Tears to Rainbow

御奈坂　緋結華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｅａｒｓ　ｔｏ　Ｒａｉｎｂｏｗ

【Ｎコード】
Ｎ９１３２Ｘ

【作者名】
御奈坂　緋結華

【あらすじ】
Ｆｒａｔｏｒｅｓ～フラトレス～　～Ｔｈｅ　Ｃｒａｚｙ　Ｃａｆｅ～　の別の場所。
県立並木高校の二年生となった桐生真也は、色褪せた日常の中で冷たい眼をしていた。
しかし少しだけいつもと違う朝。
彼の日常が少しずつ変わっていく青春ストーリー。

Ｄａｙ．１　冷たく澄んだ瞳の奥

……しんや。

「……。」

……起きないと。

「う…ん。」

声が聞こえた。

…いや、そんな気がしただけだ。

ぼやけた意識の中を漂いながら、そう思う。

既に過去になってしまった人の声は、夢の中でのみ聞けるのだ。

だから目が覚めたら、そこにはいつもの天井があるだけ、他に何もない。

儚く消え入るようなその声は、僅かに残ったまどろみへと解けていく。

まったく、嫌な朝だ。

カーテンの向こうから入る朝日に目を細めながら、俺、桐生真也（きりゅうしんや）は目を覚ます。

薄暗い、何もない部屋。

見えるのは、剥き出しのコンクリートの壁に、飾り気のない家具類。

まるで生活観の欠如した１Ｋ。

およそ高校生が住んでいるとは思えない部屋に、俺は住んでいる。

誰もいない部屋を抜けて、風呂場に向かう。

何故か妙に広く造られた風呂場で、悪夢によって掻いた汗を洗い流す。

毎日のように見る、あの日の夢。

最後には毎回、迫り来るトラックと、必死そうなあいつの顔。
…戒めなのだろう、この夢は。
俺が呑気にも忘れてしまわないように、自らの過ちを胸に刻み付けるために。
シャワーを浴びながら、今日も口から零れ落ちる。

「ごめん…姉さん、俺はまだ…あの時の俺のままだ。」

シャワーを止める。
風呂場の鏡に映るのは、鬱陶しく伸ばしたグレーの髪と、その向こうに覗く顔。
そこにある二つの瞳。
暗い闇夜のような黒、それは冷たい光を放つように、無気力なままこちらを見ている。
姉さんと同じなのに、何かが決定的に違う顔。
それなのに、いやが上にも姉さんを思い出させる。
どうして俺なんかが。
姉さんの方が、何百倍も人を幸せにできたのに。
陰鬱なまま風呂を出て、身支度を整えていく。
今日も変わらずに学校で、そこには変わらずに日常がある。
なら、早々に終わらせて帰ろう。
制服に袖を通して、髪の毛を結ぶ。
眼を隠すようにして伸ばした前髪はなくなり、他人を威圧するような眼が姿を見せる。
そして左腕に、シルバーのチェーンブレスレットを着ける。
それは、とても軽い音がした。
軽い鞄を掴み、家を出た。
さぁ、今日も変わらない退屈を味わいに行こう。

———優しい言葉も差し伸べられた手も、それは破滅を招く猛毒な

んだ。

「おはよう弟、今日も鬱陶しい前髪してるな。」

部屋を出て早々、面倒な人に捕まった。

「何の用だよ莉乃姉ぇ、今日は校門前で服装チェックじゃなかったのか？」

「勿論そうだが？」

「ならとっとと行けよ、後輩も待ってんだろ？」

「だがな真也、まだそれほど急ぐ時間でもないだろう。」

確かにまだ朝の6時、学校へ向かうにはあまりに早い時間だ。

「そもそもあたしは愛すべき弟の様子を見に来ているだけだぞ？つまらない台詞であたしを遠ざけてないで、さぁ、あたしと共に学校へ行くぞ。」

「早起きし過ぎてまだ眠いんじゃないか？笑えない冗談はやめてくれ、暇なら他の後輩を当たれよ。」

「いいや、あたしはお前と学校に行きたい気分なんだよ。」

そう言って差し伸ばされる手。

……ウザい、俺に構うなよ。

無視して背を向ける。

俺がこの時間に起きてるのは、何も姉さんの暇潰しに付き合うためじゃない。

後ろで、笑いを含んだ溜息を吐く音が聞こえた。

「仕方ないな。では真也、遅刻はするんじゃないぞ？」

あぁ、判ってるよ。

姉さんと別れ、一人、人通りの少ない道を歩いていく。

いつもと変わらない、アスファルトの遊歩道。

所々が隆起していたり、昨日と同じゴミが落ちていたり。

実際には変わっていても気づくことができない、些細な変化。

少しずつ変わっていく毎日。

俺は、変わってしまった毎日を思い出し、舌打ちする。

変わりゆく日々を願い、それを楽しんでいた。

あの頃の俺には戻れない、そう思わせる今の日常。

姉さんは、今の俺をどう思うだろうか。

いつの間にか着いていた目的地。

並木通り。

この町一番の大通り、その十字路。

この時間にも拘らず、既に沢山の車が行き来している。

そこには、タイヤの焼け焦げる臭いもなければ、人々の悲鳴もない。

いつもと変わらない、平和な日常があるだけだ。

ただ、眺める。

静かに、穏やかに、眺める。

暫くして俺は、傍にある花屋へと足を運んだ。

まだ開店していない店の前では、一人の老人が箒を持って掃き掃除をしている。

彼は俺の姿を認めると、とても穏やかな笑顔で話しかけてきた。

「おはよう真也くん、今朝も早いね。」

「おはようございます忠勝さん、今日もお願いします。」

「あぁ、待っていなさい、すぐに持ってこよう。」

箒を置いて、忠勝さんは店へと消える。

そしてすぐに、一輪の百合を持ってきた。
姉さんが、よく俺の部屋に飾っていた花。
俺は財布から代金を取り出し、彼に手渡す。
お金を受け取りながら、彼は視線を俺から外した。
その視線の向こう。
信号の根元、空き瓶に活けられた百合の花。
それは行き交う車の起こす風で、弱々しく揺れている。寂しく、切ない風景。
俺はその瓶を取ると、鞄からミネラルウォーターを取り出し、新しい花と取り換える。
僅かでも、花が萎れてしまわないように。
…もう少しで三年か。
時間にしてみればそれは長く、俺の中でそれは短い。
あっという間に過ぎ去っていった日々を、花を取り換える度に感じる。
そろそろ、あっちにも行かなきゃな。
暫くの間、静かに手を合わせる。
忠勝さんも、そんな俺の後ろで手を合わせてくれていた。
三年前から、ずっとそうしてくれている。
……さあ、行こう。
また明日も来るよ、それじゃあな。
振り返って、忠勝さんに礼を言う。
祈ってくれてありがとうと。
元来た道へ歩き出す。
時計を見ると、まだ6時半過ぎ。
学校は家を挟んで反対側だが、それでも少し早く着いてしまう。
…まぁ、予習でもして時間を潰せばいい。
元来た道を歩き出す。
少しずつ人通りも増えてきた。
早朝の静けさが、朝の喧騒に呑み込まれていく。

疲れた顔をして会社に向かうサラリーマン。
欠伸をしながら歩く学生。
世界が少しずつ目を覚ます、そう思わせる光景だ。
今日もまた動き出した日常。
……チッ。
心の中で、真っ黒な感情が湧き上がってくる。
嫌になって、俺は学校への歩を速めた。
？

7時半。
まだ静けさが残る住宅街を歩く。
もうすぐ校門だが、さてどうするか。
流石にこの時間だと登校している生徒も少ない、こっそり人混みに紛れて校門を抜けるのは難しい。
今頃は莉乃姉が何人かの役員と一緒に服装チェックの真っ最中だろうから、いつものとこに行くしかない。
俺は間違いなく捕まるだろうからな、今の莉乃姉には。
プライベートと学校での立場を完璧に分けるから、今は仕事の鬼になっているはず。
こんなグレーの長髪に着崩した制服じゃ絶対説教を食らう、めんどくさい。
とりあえず移動しよう。
俺は校門からは見えない道を進み、学校の側面に向かう。
そこは人通りも少なく、この時間なら生徒も滅多に通らない。
そしてそこには、秘密の抜け道がある。
外フェンスにある、非常用かなにかの扉。
それに付けられている南京錠が、実は古くなっていて外れるのだ。
莉乃姉が服装チェックをしている朝だけの裏口登校ってやつだ。
ちょっとした土手を登り、いつものようにフェンスの隙間から指を

伸ばし、南京錠を引っ張る。
ガキンッ、という音がして、古びた南京錠が外れた。
静かに中へと入り、鍵を元に戻す。
潜入成功だ。
目の前の体育館を横切り、校舎裏の校庭に出る。
体育館横の剣道場からは、竹刀をぶつけ合う乾いた高い音が響いてきた。
朝練とは、熱心なことだ。
その剣道場の向こう、弓道場の方からも、矢が的に中るスコンッという音が聞こえてくる。
そういえば無駄にこの高校は施設が充実しているな。
流石は文武両道を志す高校だけはある、確か県大会でもかなり強い方だったなウチは。
青春っぽい音を聞きながら昇降口へと歩きだした俺は、ふと手洗い場の辺りに目を向けた。
そこにはちょうど剣道場から出てきた少女が一人、袴姿で水を飲んでいる。
無視することもできたのに、俺は何故かその姿から目が離せなかった。
特に変わったところはないはずなのに。
確かに彼女はクラスメイトだが、それほど親しい間柄でもない。
何だろう、この感じは。

……行こう、気付かれる前に。

逃げるようにその場を後にする。
別にやましい感情を抱いたわけでもないのに、妙な後ろめたさがあった。
他人に興味を持ってはいけないのに。
でも、あれはまるで…。

…やめよう、考えるのは。
足早に教室へ歩く。
引き戸を開けると、教室は案の定無人だった。
まだ誰もいない教室に入り、窓際最後尾の席に鞄を置いてすぐに出る。
ＨＲまで時間を潰す、日課になった行動。
人気のない廊下を進み、階段を上がって三年のフロアを過ぎる。
そこには冷たい鉄扉。
重い扉を開けて、屋上に出た。
一陣の風が吹き、俺の髪を揺らす。
当然だがここも無人だ。
高いフェンスと、その手前に設置されたベンチ。
晴れた日の昼食時などは席の奪い合いになるという人気スポットだ。
逆を言えば、時間さえずらせば人はいないということ。
無心になるには適した環境だろう。
一番奥のベンチに寝転がる。
仰向けになれば、広い空を一望できる。
人々の喧騒から少しだけ離れた場所。
目を閉じる。
風が肌を撫でていく心地よさ。
心を閉じていく。
段々と音も感じなくなる。
風も、光も、少しずつ薄れていく。
自分という身体さえも、あやふやになる。
世界の中にあって、しかし分かたれている境界線が、混ざり合って解け合う。
少し特殊な現実逃避だ。
こうしている間は、少なくとも、罪を忘れられる。
俺の弱い心は、ほんの一時ですら、罰から逃れようとしてしまう。

「……ごめんなさい。」

何処からともなく湧いた言葉、謝罪。
これが、今の俺が感じているものなんだろう。
一生背負っていくんだ、この言葉を。
それから暫く、無心となる。
世界と、一つになる。
ここでは何もかもを感じることができる、そして、何も感じない。
ぼやけた世界。
今の俺には、これさえも心地いいのだ。
だが、もう終わりにしよう。
安息の時間はここまでだ。
さぁ、償いを再開しよう。
段々と、身体の感覚を取り戻していく。
自分がここに生きてしまっているという、罪の意識と共に。
目を開く。
暗闇に慣れた目に、眩しい朝日が入り込む。時計を見ると、予鈴の5分前だ。
身体を起こして、立ち上がる。
一限目は確か現国だったか。
当てられたりはしないだろうが、一応真面目に受けるとしよう。
大体、教師は俺に話しかけたりしないのだし、心配することもないか。
扉を開けて、校舎内に戻る。
階段を下りると、既に沢山の生徒が廊下を歩いていた。
屋上から降りてきた俺を訝しげに見る上級生。
朝から屋上に登るなんて物好き、珍しいからな。
三階に降りて、教室に向かう。
すれ違う同級生たちは、俺の姿を見ると目を逸らす。
不良。

俺に貼り付けられているレッテル。
慣れてきたこの呼ばれ方も、今では相応しく思える。
実際いいことはしていないのだし、間違ってはいないんだ。
開けっ放しの入り口から教室に入ると、クラス中から視線を浴びる。
それも大抵がちらちらと、隠れるように向けられるものだ。
無視して自分の席に座ると、教室に騒がしさが戻ってきた。
誰もが俺をいないように扱う。
そうなるように振る舞ってきた、だから当然のこと。
話し掛けられないように他者を威圧するような態度と外見、そして素行。
でも退学にはならないように、勉強だけは真面目にしている。
お陰で毎回学年トップクラス、クラス順位も常に一番上だ。
一応授業にもきちんと出てるし、退学ってことにはならない。
とりあえず今思うのは……早く終わってくれ。

予鈴が鳴り、学校中が俄かにざわめきだす。
昼休みの始まりだ。
クラスの奴らも学食や購買に走り出したり、弁当を広げていたりする。
さて、俺も学食に行くか。
席を立って教室を出ようとする。

「あのー、桐生くん。」

誰かに呼び止められた。
何の用だ、まったく。
振り返る。
そこには一人の女子生徒が立っていて、何故か妙に友好的な笑みを浮かべていた。

……こいつは確か今朝の袴女か。
名前は…、

「お前は……誰だったか？」
「ありゃ、覚えてもらえてないですか。去年も同じクラスだったのに。」

去年も？
……まるで記憶にないな。
まぁ去年は殆ど学校にいなかったからな、知るわけがない。
大体去年俺が同じクラスにいたことを覚えている奴なんている方が驚きだ、誰とも話した記憶もないのに。

「はぁ…それで、なんか用か？」
「緋結華。」
「…は？」
「御奈坂緋結華（みなさかひゆか）、私の名前ですよ。」
「……そうかよ。」
「はい、そうなのですよ。」
「んじゃ御奈坂緋結華、俺は暇じゃねぇから行く。」
「あ、はい、ごめんなさい。」

教室を出る。
ったく、何だったんだあの女。
何でいきなり自己紹介をしなきゃならねぇんだ、今更だろ。
…はぁ、学食やめて余所で食うかな。
なんか気を削がれて、方向を変える。
チッ、今日は他人にペースを乱されすぎだ。
下駄箱で靴に履き替えて、今朝通った扉へと向かう。
そうだな、とりあえずあそこに行くか。

目指すべき飯屋は決まった。
住宅街の真っただ中にあるうどん屋。
一軒家の一階を改装して造られたそこは、地元じゃ意外に人気の手打ちうどんを出している。
人の良い老夫婦が営んでいて、実は忠勝さんと知り合いってんだから世の中狭い。
以前忠勝さんに食事はどうしているのかと心配された時に紹介されて、それ以来は常連になっている。
学校からも近いからこうして昼休みに抜け出しては食べに来ているんだ。
扉を抜けて、鍵を締め直す。
店はここから5分くらい、今からでも十分にゆっくり食べれるな。
人気のない住宅街を歩いていく。
そういえば、特に意図してないのに俺が通る道は妙に人気が無いな。
……考えないようにしよう。
徒歩5分だけあってすぐについた。
昔ながらの引き戸に手をかける。
カラカラカラと音を立てて、ガラス張りの扉が開いた。

「いらっしゃいませ……おぉ、真也くんじゃないか。」
「こんにちは友春さん、結衣さんも。」
「あらまぁ真也くん、今日も来てくれたの？」
「お二人が打つうどんは美味しいですから。」
「褒めても大盛りにしかならんぞー！あっはっは！」
「でも大丈夫なの？今日は学校は？」
「ちゃんと行ってますって、今は昼休みなんです。」
「あらそうなの、それなら大丈夫ね。」
「高校生は多少やんちゃな方が良いんだよ母さん！」

アットホームな雰囲気に、ついつい頬が緩む。

この二人は、俺の格好や態度を見ても笑顔を絶やさなかった。
忠勝さんに紹介されて来た時も、友春さんは笑顔で迎えてくれたのだ。
数少ない俺の知人ってところだろうか。
席に着いた俺を見ると、二人はいそいそと美味しいうどんを用意してくれた。
手早くできて美味しいかけうどん３５０円、良心的なお値段。
注文しなくても作ってくれたのは、昼休みがそれほど長くないと知っているからだ。
何しろこの二人、古き時代、出来立ての並木高校卒業生。
しかもこれだけ近所に住んでいると、現役の高校生がどんな状況なのかも結構聞くらしい。
俺は特別に大盛りで食べられるからなおよし、忠勝さんには加えて感謝しなければいけない。
腰の強いうどんを啜りながら、壁掛け時計を見る。
昼休みもそれほど残ってない、帰りの時間も考えたらあと5分くらいしかいられないな。
できればゆっくりと食べたいところだが、ウチの高校は何故か妙に昼休みが短い。
当然学校の終了時間も他に比べて早いから文句はないんだが、昼飯を食べに出るには適さない。
まぁ、そもそも途中で学校を抜けだすのはまずいんだが。
因みに二人も俺が抜け出して食べに来ていることくらいは知っている。
急いで食べ終わると、財布から代金を出して席を立つ。

「それじゃご馳走様でした、すみませんいつも慌ただしくて。」
「いいのよ。わざわざ食べに来てくれるだけでも十分嬉しいんだから。」
「たまには忠勝の奴も食べに来いって言っといてくれよ真也くん！」

「あぁ、判りました、伝えときますね。」
それじゃと、頭を下げて店を出た。
また静かな住宅街を歩いていく、多少ギリギリだが予鈴には間に合うだろう。
学校のフェンスに着くと、朝と同じように鍵を外して中に入る。
「しーんーやー？」
「……チッ、待ち伏せかよ。」
体育館の影からこちらへと歩いてくるのは、まごうことなき生徒会長、小湊莉乃（こみなとりの）。
「校則第三章第五節、途中下校は早退または特別な場合を除きこれを禁ず。」
「章とか節とか、まるで聖書だな。ウチは十字教の高校だったのか？」
「さぁね。それよりも、生徒手帳にもしっかりと記載されたこの校則、よもや知らないとは言わせないぞ真也。」
「生徒手帳なんて受け取ったところで誰も読まないと思うが？読むとしたら真面目な優等生か、莉乃姉みたいな生徒会長兼風紀委員まで手を出すような正義の化身くらいなもんだ。」
「黙れ真也、こそこそ裏口使う時点で抜け出し禁止って知ってると言っているようなものだぞ！」
「俺はここを通る方が目的地に近いから使っているだけだよ、まさか抜け出し禁止だったなんて知らなかったよ。」
「うるさい、つまらない言い訳をあたしにすんな！」
「どうしたんだ莉乃姉、いつもと比べて随分と性急じゃないか？何にイラついてるか知らないが、俺にぶつけるのは理不尽だろう？」
「しらばっくれるな！毎回あたしが服装チェックする度にここ使っ

てただろ！」
「さて、何のことやら。」
「……。」
あ、やりすぎたか。
地面を向いてわなわなと震える莉乃姉。
こりゃくるな。
「ぬあああ！あほ真也！ぶっ飛ばす！」
風を切る音と共に、高速のハイキックが鼻先を掠めていく。
俺は続けざまに来る回し蹴りを軽く躱しながら叫ぶ。
「あっぶねぇな！生徒会長が暴力とかいいのかよ！」
「ばれなきゃいいのだよ！あとはお前を黙らせれば問題はないのさ！」
「そりゃ随分と素晴らしい理論だな、俺が反撃できれば文句なしなんだが。」
「反撃したら即座に罰則追加だ！諦めて倒れなさい！」
「ったく、信じられねぇ生徒会長様だ。」
次々と繰り出される蹴りを躱していく。
てかこの姉さんは自分がスカート穿いてること忘れてるのか？
遠心力で綺麗に広がるスカートを見ないようにしながら、ふと時計を確認。
…あと5分耐えきれば逃げ切れるな。
だが莉乃姉も意外に鋭い蹴りを放つ、この細足でよくもまぁ。
「な、何してるんですかぁ！？」

突然響く声。
思わず反応してしまった俺は、物の見事に莉乃姉の回し蹴りを腹に食らった。

「ぐはっ！」
「お、当たったぞ？」
「け、喧嘩は駄目ですよ！？」

声の主が駆け寄ってきて、腹を押さえた俺をその背に隠す。

「何があったんですか！？」
「む、君は確か…。」
「御奈坂緋結華です。桐生くんは何かしたんですか？」
「勝手に校外へ抜け出していたからな、故に鉄拳制裁を…。」
「生徒会長がそんなことしたらまずいですよ！」

…ごもっとも。

「む、確かにそうだが。」
「お互いに悪いことしたんですし、おあいこですよね？」
「……どうしよう真也、言い返せない。」
「まぁ正論だからな。それと、蹴っておいて俺に言うな。」
「仕方ないな…真也、今回は見逃すが次は容赦なく罰則室に連れてくぞ！」

そんな部屋があんのかよ生徒会。
強気な発言の割にはばつが悪そうにしながら、莉乃姉は校舎へと歩いていった。
俺は痛みから復活すると、目の前で心配そうにしている御奈坂を見る。

「桐生くん大丈夫？」
「あぁ。」
「なら良かったですよー。」
「ったく、助けろと言った覚えはないんだがな。」
「ごめんなさい、余計なお世話でしたか？」
「そうだな、余計なお世話だ。」
「すみません…。」

見るからに落ち込む御奈坂。
……チッ、俺も嫌な奴だな。

「…まぁ、迷惑ではなかった。」
「ホントですか！？」
「あ、あぁ。」
「良かったぁー、怒らせてたりしてたらどうしようかと。」

打って変わって嬉しそうにする御奈坂。
まったく、忙しい奴だなこいつは。
人のことで一喜一憂して、悪くもないのに謝って。
いつも損な役回りをしてそうだ、間違いなく厄介事にも首を突っ込んでるだろう。

「もう…俺に関わるなよ。」
「でも…困った時は助け合うのが当たり前ですよ。」
「意味が判らねぇ、人の話聞いてたか？」
「はい、だから私が好きでやってるだけですよ。」
「チッ…お人好し。」
「え、何か言いましたか？」
「何でもねぇよ。もういい早く行くぞ、昼休みももう終わりだ。」

「あ、そうですね、急ぎましょう！」
駆け足で校舎に向かう御奈坂の後ろを、俺は急ぐでもなく歩いていく。
…まったく、今日はなんかおかしいな。

？
「それではこれで以上とする。」
教師が教室を出ていくと、待ち望んだ放課後になる。
教室は昼休みのような騒がしさで溢れた。
部活、バイト、遊び、帰宅。
皆が笑顔で、或いは嫌そうに教室を後にする。
俺も鞄を掴むと、足早に教室を出ていく。
放課後は特に予定もない。
ならいつものとこで時間を潰そう、今日は人の中にいない方が良さそうだ。
下駄箱で靴を履き替え、中庭を抜けて学校を出た。
さて、駅に行くか。
丘の上の展望台。
木野塚町の中ほどにある小さな公園だ。
そして……、

真耶姉の墓の近くにある。

まぁ今日は供える花もないから墓参りはしない、次の日曜にでもまた行こう。
墓所の近くという訳あって、あそこはあまり人も寄り付かない。
お陰で考え事をしたり人混みから離れたい時には最適だ、邪魔が入

ったりしないからな。
他人と余計な関係を作らなくて済むし、一石二鳥とはこのことだろう。
１０分ほど歩いて駅に着くと、切符を買って改札を通る。
俺はホームのなるだけ端の方まで歩いていき、電車を待つ。
自分でも嫌になるくらい他人を寄せ付けない鋭い目つき、そして目立つ格好。
別に他人に迷惑を掛けたい訳ではない、実際俺はそこらの不良みたく迷惑行為は絶対しない。
単に他人と関わりたくないんだ。
不良の格好をしていれば人はなるだけ寄り付かなくなる、だが不良は寄せ付ける。
まぁ、奴らみたいなのに関わっても特に気にならない、ぶちのめすだけの相手、石ころと変わらない。
だが余計に他人とは関われなくなっていく。
普通に考えれば悪循環だが、俺からすれば都合が良い。
俺は独りでいいから。
電車に乗って、隣の駅で降りる。
改札を出た。

「おいそこのロン毛とまれ！」
「あ？」

やれやれいきなりか。
俺の前には金髪サングラスや、短髪オールバックの少年たちが、取り囲むように立ち塞がる。
無駄に他者を威圧する態度、妙に肩を揺らす歩き方、まるで品のない顔。
まさしく不良、判りやすい。

「テメェこの前は随分と舐めた真似してくれたなコラ！」
「何のことやらさっぱりだな、暇だからって言いがかりはやめてほしいもんだ。」
「あぁ？ざけんなよテメェ！こいつらをボコッたらしいじゃねえか！」
「覚えてねぇよ、お前ら揃って同じような面に見えるからな。」
「舐めんなよコラ！こっち来いテメェ！」

両腕を掴まれて連れて行かれる。
はぁ、こりゃ暇潰しの時間は終わりだな。
こういう奴らは少し街を歩けば蛾みたいに出てくる、蛍光灯か俺は。
周りの奴らは既に勝った気でいるのか、ニヤニヤした笑みだ。
そのまま人気のない路地を抜けて、寂れた公園に出る。
あ、ここは覚えてるな、確か二人くらい潰したんだったか。
いちいち顔まで覚えてたらきりがないから忘れてた、確か前も突然絡まれてここに連れてこられたんだ。
公園の中心で背中を押され、距離をおいて囲まれる。
1…2…10人くらいか、めんどくさいな。
流石に、無傷とはいかなさそうだ。

「おら、こいつらに頭下げろよ。テメェのせいで鼻が折れたんだよ！」
「へぇ、そいつは大変だったな。カルシウム、足りてないんじゃないか？」
「なんだとテメェ！」
「騒ぐなよ、五月蠅いだけだぞ？」
「殺すぞコラ！」
「お前ら如きに殺されちまったら笑い話だなぁ。」
「強がってんじゃねぇぞコラ！」

一人が挑発に乗って殴りかかってきた。
……判りやすい軌道だな。
顔を狙った大振りの拳を躱して、カウンターで腹に一発叩き込む。
内臓まで響く一撃に、少年の肺から酸素が無理矢理押し出される。
辛そうな呻き声を上げて倒れた少年に爪先で蹴りを入れると、そのまま動かなくなった。
地面に転がったゴミを一瞥し、前を向く。
仲間がやられた途端、猛烈な敵意が全方位から叩きつけられる。
完全にスイッチが入った。
もう後には引けない。
１対１０。
数で負けてるのに迎え撃つのは即ち死を意味する。
なら先手必勝だ。
今更これだけの人数で取り囲んでおいてどちらが正当だとかいう問答はないだろう。
相手がこちらに仕掛けてくる前に踏み出す。
取り囲まれたままでは袋叩きにあう、ならこの人の壁を蹴り破るしかない。
正面から一人を蹴り飛ばし、左右で一瞬動きが止まった二人の顎に、位置も確認せず裏拳を叩き込む。
体勢は崩れない。
地道な努力の賜物か、単に喧嘩の動きに慣れてしまっただけか。
蹴り飛ばした奴には追撃として顔を踏みつけ、素早く振り返る。
幾つもの拳がそこにあった。
後ろに跳びながら両腕でガード。
チッ…痛いな、クソッ。
威力を殺しても普通に痛い、現実はゲームのようにノーダメージでは防げない。
胴体や顔に当たらないようにするのがガードなんだ、腕は当然犠牲になる。

自然と表情が歪む。
カウンターで一人潰しても、まだ圧倒的に不利だ。
しかも相手は複数で固まって移動し、少しずつタイミングをずらして拳を放ってくる。
それは洗練されたコンビネーションではなくとも、袋叩きにするには十分な威力だ。
最近そこかしこで絡まれちゃぁ喧嘩してたしなぁ、流石に対策は練られてるよな。
俺の体術は一度の攻撃で確実に一人を倒すもの。
だから必然的にゴリ押しされたらキツイ。
俺はタフさに自信があるわけじゃないし、どちらかといえば痩躯だ、打たれたら意外に早く消耗する。
多数の敵を相手にする時も、素早く倒すのが基本戦法だ。
速度を封じられた今の状況。

……流石に今日は最悪も考えないとな。

拳を躱し、防ぎ、僅かな隙に攻撃する。
腕は言うまでもなく、顔や胴体にも結構なダメージが溜まってきた。
あと五人。
攻撃の隙も増えてきた、あと少し。
四人……三人……二人。
最後の一人が、叫びながら突っ込んでくる。
もう俺の身体も満足に動かない。
けど、これで終わりだ。

「うらぁぁぁぁぁ！」
「……これでラストォォォォォ！」

最後の一撃を、相手の鼻っ柱に渾身の力で打ち込んだ。

金髪少年は吹き飛び、公園に静寂が訪れる。
周りには気絶か、戦意喪失して倒れた少年たち。
血の味がする。
額からも一筋の血が流れ、左腕に至っては痛みで上がりもしない。
まさに満身創痍だ、みっともないな。
唾と一緒に血を吐き捨てる。
公園の水道で顔を洗い、口をゆすぐ。
土埃にまみれた鞄を拾い上げると、俺はその場を後にした。
随分と時間が経っていたらしい、時計を見れば既に夕食時だ。
疲労で重い足を叱咤しながら、近くのコンビニで夕飯を適当に買っていく。
店員が一瞬引いたのが見えたが、気にしていたら買い物なんてできない。
結局目的の場所には行けず、わざわざ喧嘩のために電車に乗ったような感じだ。
やれやれ、本当に今日はついてない。
隣駅で降りると、そのまま家に歩き出す。
疲れと痛みで一歩進むのも億劫だ。
ボーッとしていたのだろう。
気が付いて辺りを見回すと知らない場所にいた。
チッ、何処だここは。
一軒家が立ち並ぶ住宅街、どうやら随分と脇道に逸れてしまったようだ。
しかも方向感覚があやふやだ、今どの方角を向いてるのかも判らない。
よりによって家と逆の方向に歩き出したらものすごくかったりぃことになる。
……さて、どうすっかな。
「……もしかして桐生くん？」

「あ？」

後ろから声を掛けられて振り返ると、そこには何故か御奈坂緋結華の姿が。

制服姿ってことは一度も家に帰ってないのか？

そういうことには初心な奴かと思ってたけど、案外遊んでんのかね。

「何か用か？」

「友達を学校以外で見かけたら思わず声掛けません？」

…掛けねぇよ、大体友達じゃないだろ。

「…何で俺だと判った？」

「いやいや、そのグレーのポニーテールは多分この辺りでは桐生くんくらいしかいないですよ。」

「暗くてグレーかどうかなんて判んねぇだろ。」

「だって桐生くん街灯の真下にいるじゃないですか？」

上を見上げる。

そこには蛾や羽虫を纏った街灯が輝いていた。

……チッ、こんなことにも気付かないくらいに限界ってことかよ。

思わず街灯に寄りかかる。

座り込んだ途端、どっと疲れが押し寄せてきた。

するといきなり御奈坂がハンカチを取り出し、俺の額に当てる。

「…何してんだお前。」

「だって血が出てます、それによく見たら顔も腫れてますよ。……喧嘩ですか？」

「それがなんだ、お前には関係ないだろ。」

「すぐ近くに家があるのでちゃんと手当しましょう。」

「何なんだよお前、頼んでもねぇのに勝手なこと言うな！」
「ダメです！傷口からばい菌が入ったら大変です！さぁ行きますよ！」

驚いて声が出なかった。
こいつ、何処までお人好しなんだよ。
呆れた。
ついでに諦めた。
多分こいつは無理矢理にでも俺を連れていく、そんな気がする。
意味が判らねぇ、どういう思考回路してやがるんだ？
俺の手当てをしたって何の得にもならねぇし、わざわざ手間を増やすだけだってのに。
引っ張り上げられ、俺の腕が御奈坂の肩に回される。
顔を上げれば、間近には御奈坂の横顔があった。
その表情は必死で、まるで御奈坂自身が怪我をしているみたいに辛そうに見える。

———重なる。

かつて見た光景に、それはよく似ていた。
いつだったか、それは思い出せないけれど。
靄がかかったように、記憶が不鮮明だ。
もう、何も考えられない。
くそったれ。
また俺は、他人に甘えるつもりか。
俺に関わるなよ。
それはきっと、間違っているんだから。

———姉さんと。

少しずつ瞼が落ちてくる。
御奈坂に身体を預けながら、俺の意識は深く沈んでいった。
？

……。

「真也は強いね。」
「そんなことないさ。今だってこうして姉さんの肩を借りてる、まったくひどい体たらくだ。」
「こんな時くらいしか頼られないからね、頑張るッスよ〜！」

違う、いつも頼ってるさ。
ただ、表に出すのが苦手なだけだ。
俺より小さな体で一生懸命に俺を支える姉さん。
俺が俺であるのは、姉さんがいるからなんだよって。
……俺はいつになったら言えるのだろう。

「ありがとな姉さん。」
「いやいや真也、お礼を言うのはあたしの方だから。」
「俺は当たり前のことをしただけだって。」
「それが強いってことだよ！」

何故だか嬉しそうに言う。
まるで自分のことみたいに、幸せそうな笑みまで浮かべて。
段々と視界が白く染まっていく。
あぁ、もう少しで夢が終わるのか。
もう少し、見ていたかったな。

「真也。」

「ん？」
「真也は強くありなさい、大切な人を守れるようにね！」

ごめんな、姉さん。
その約束、守れなかったよ。
白い世界。
醒めていく。
……。

目を開けた。
暗い部屋の中にいる。
はっきりしない意識では、ここが何処なのか判らない。
身体を起こすと鈍い痛みが走った。
痛んだ腕を見ると、湿布や包帯で治療してある。
…あぁ、ここは御奈坂の家か。
ホントに連れてこられたんだな俺。
痛みを我慢してベッドから出る。
女の部屋にしては飾り気のない部屋。
それと、壁に立て掛けられた竹刀。
剣道部だったなあいつ。
隣の棚の上には幾つかトロフィーも飾ってある。
そんなに強いのか。
あまり女子の部屋を物色するのも趣味が悪い。
扉を開けて部屋を出る。
人の話し声が下から聞こえてきた、ってことは二階なのかここは。
曲がり角の向こうにあった階段を降りて、リビングに向かう。
そこには、見たこともない光景があった。
御奈坂とその両親が、楽しそうに食事を摂っている。

穏やかにお喋りをしながら食べているそれは、まさに家族団欒といえる光景。
実家ではそんなことをした覚えがない。
共働きの両親はいつも遅くまで帰ってこないから、家ではいつも姉さんと一緒に食事を摂っていた。
姉さんは俺と違って家事も料理もできたから、俺はせいぜい洗い物くらいしかできていなかったな。

「あ、桐生くん起きたんですね。」
「あ、あぁ。」

御奈坂の両親もこちらに振り向くと、人のいい笑顔で話しかけてきた。

「ほぉ、君が噂の桐生くんか。随分と綺麗な顔をしているな緋結華。」
「そうでしょ？クラスでも有名なんだよ！」
「そうか…どうか娘をよろしくお願いします。」
「は！？いや、あの……。」
「お父さん！桐生くんが困るでしょ！」
「うふふ、ごめんなさいね桐生くん。騒がしいでしょう？」
「いえ…大丈夫です。」

居心地が悪い。
俺が立つ場所じゃないんだここは。
暖かい、ぬるま湯みたいな、そんな世界。
俺はもっと冷たい、渇いた場所にいるべきだ。
幸せな家庭。
場違いにもほどがある。
早く出よう。

そしてまたあの無機質な部屋で、冷たい夕食を食べればいい。
そういえば俺の荷物は何処にいったんだ？
まさか御奈坂の部屋にあったとか。
だとすると面倒だが取りに行かなければならない、鞄は置いていけないから。
まぁでも、聞いた方が早いか。

「あの、俺の荷物は何処に？」
「あ、ごめんなさい。桐生くんの荷物はそこのソファーに置いてあるよ。」

御奈坂に指された方を見ると、革張りのソファーの上に俺の鞄と、帰りに買った夕飯が入ったコンビニ袋が置いてあった。
俺はそれらを掴むと、御奈坂たちに向かって頭を下げる。

「すみませんでした、色々とご迷惑をお掛けしてしまって。」
「いやいや、気にすることはないぞ。」
「そうだよ。それに私が勝手にしたことだし。」
「もし良かったら夕食も食べていきなさいな、味は保証しますよ？」
「お母さんのご飯は凄く美味しいよ！桐生くんも食べてみてよ！」
「いや、流石にこれ以上は。」

ここにいたら当てられる、この違和感ばかりの空気に。
だが何なんだ、俺に関わる必要があるのか？
ただでさえ迷惑を掛けられているというのに、何故この人たちは俺をそこに加えようとする。
調子が狂う。
予想外の言葉が飛び交う。
理解が及ばない。

「それでは帰ります、今日はありがとうございました。」
「そうか、気を付けて帰りなさい。」
「緋結華、玄関まで送って差し上げなさいな。」
「うん、こっちだよ桐生くん。」

御奈坂が席を立ち、玄関まで案内してくれる。
綺麗に並べられた靴の中から自分のを探して履くと、振り返って改めて御奈坂に礼を言う。

「すまなかった、迷惑を掛けた。」
「全然大丈夫ですよ、寧ろもう大丈夫ですか？まだ痛むようならゆっくりしていって良いんですよ？」
「いや大丈夫だ、いつものことで慣れている。」
「……。」
「何だ？何か言いたそうな顔だな。」
「喧嘩は…ダメですよ。」
「は？」
「喧嘩は…ダメです。怪我するし、誰も幸せにならないし。」
「はっ…そうかもな。」

背を向けた。
もう話すことはない。
やはり違うんだ、感じている意味が。
扉を開けて、一歩踏み出す。
それによって、世界が隔たれる。
温かな家庭と、冷たく渇いた夜に。
御奈坂は何も言わない。
きっと、その顔は悲しみに歪んでいるだろう。
何となく、少ししかこいつとは話していないが、判る。
だからこそ見たくなかった。

それは本当に姉さんのようで、嫌でも思い出してしまう。
既に失われたその気持ちに、心が揺れてしまうから。

「今度こそもう…俺には関わるな。じゃあな。」
「桐生く…、」

御奈坂が言い終わる前に扉を閉めた。
春先の優しい風が、頬を撫でていく。
さて、帰ろう。
温かな時間は終わりだ、これは小さな間違いだった。
それはまるで道に迷い、迷い込んだ先に、お菓子の家で楽しそうにはしゃぐ子供たちがいたかのような。
だが、それに触れることができないんだ。
なら、引き返すしかない。
……。
あ、結局ここは何処だろう。

「やぁ真也、随分と遅かったな！」

御奈坂の家を出て一時間くらい、漸く位置を把握して家に着いた。
時間は既に日を跨ぐような頃、いつもならとうに寝ている。
疲れ果てた身体で鍵を開けようとして、何故か鍵が開いていることに気付き中に入った。
人様の家にナチュラルな不法侵入を果たしていたのは、私服姿の莉乃姉。
巨大な圧力鍋がドンとテーブルに鎮座していて、その隣で床に寝そべり漫画を読んでいた。
はぁ、まだ寝れそうにないな。

「おい莉乃姉、どうやってここに入った、どうしてここにいる？」
「待て真也、今いいとこなんだ。」
楽しそうに漫画をめくる莉乃姉。
ったく、プライベートじゃ一層自由な人だな。
諦めて鞄を置き、ビニール袋を冷蔵庫に放り込む。
代わりにミネラルウォーターを取り出し、ソファーに座って一口飲むと、莉乃姉を待つ。
暫くすると読み終わったのか漫画を閉じ、積み上げられた次の一冊を手に取った。

「おい、今何巻目だ？」
「んー、十四巻目。」
「全部で何巻ある？」
「三十四巻だが？」
「ざけんなよ待てるか！お前それ全部読むまで待たせるつもりか！」
「そうだ！しばし待たれよ！」
「冗談じゃねぇアホか！」
「仕方ないな、せっかちなやつめ。」

漫画を置いてこちらに向き直ると、咳払いをして口を開いた。

「あたしは小湊莉乃、十七歳です！趣味は真也の世話をすることです！」
「聞いてねぇし、合コンじゃねぇし、世話焼かせんなし。」
「やれやれ、ノリが悪いぞ真也。そんなだから周りから怖がられるんだ。」
「余計なお世話だ。最初の質問に答える気がないなら帰れ。」
「ふむ。まず入った方法だが、前から何度も入っているのに今更す

ぎないか？」
「まぁ確かにそうだが…。」
「まぁいいか。答えは簡単、合鍵を勝手に作ったからだ！」
「さて、警察に電話するか。」
「待て待て、それは性急すぎるぞ真也。まだ来た理由を言ってないじゃないか。」
「合鍵の件に関しては理由なんて関係ないとは思うが、どうせ理由はこれだろ？」

俺は目の前のテーブルに鎮座する圧力鍋を指す。

「まぁそうだが。」
「余計なお世話だと何度も言ってるよな？」
「こうでもしなければ栄養が偏るだろう、面倒だからって食べないとかな。料理とか家事がてんでダメだからなお前は。」
「お節介だな、俺のことは放っておけよ。不法侵入にいたってはもう犯罪だぞ？」
「……ま、言われても聞かないのがあたしなのだ。」
「チッ、めんどくせぇ。」
「どうした、妙に不機嫌じゃないか。」
「あんたのせいだよ、鬱陶しいな。もう寝るから出てけ。」
「そうか、では。」

漫画を片付けて服を正す。
へぇ、今日はやけに素直だな莉乃姉、解放されるのは助かるが。
と思えば、莉乃姉は俺のベッドに入り込み、招き入れるように布団を持ち上げた。

「おいで、あたしが添い寝してやろう。」
「イカれてんのか？」

「何てこと言うんだ！学校でも大人気の小湊先輩の添い寝だぞ、嬉しくないはずがない！…そうか、恥ずかしいのだな？ふふん、中々に可愛らしいとこがあるじゃないか真也。」
「はっ、こんな女が大人気だと？学校の男子連中は眼球取り換えた方がいいんじゃないか？」
「そんな辛辣真也にも好きな娘くらいいるだろう？ほれ、お姉さんに話してごらん。」
「修学旅行中か？ウゼェぞ、んな奴はいねぇよ。いいからとっとと失せろ。」
「やれやれ、なら真也もご機嫌斜めだし帰るとするか。」

心底仕方なさそうにベッドから抜け出すと、鞄を肩にかけて玄関に歩いていく。
扉を開けたところで、莉乃姉がこちらに振り返った。

「それじゃ、また明日な真也。」
「うるせぇ、来るな。」
「はっはっは、朝が必ず来るように、あたしも必ず来るのだよ。」
「チッ、暇人め。」
「では気を付けて帰るよ、それじゃあな。」

何故かきざったらしく颯爽と帰っていく。
はぁ、無駄に疲れたぞ。
部屋に戻る。
制服を脱ぎジャージに着替えると、そのまま電気を消してベッドに倒れた。
うつ伏せになると、疲れがどっと押し寄せてきて、急激な眠気に襲われる。
ふとテーブルに目を向けてみると、そのには莉乃姉が置いていった圧力鍋。

……またシチューかな、まったくお節介め。
背を向けて目を閉じる。
深い海の底に沈んでいくような感覚の中、小さく呟く。
———何故、俺はここにいるんだろう。

Day. 2　雨はまだ止まない

迫りくるトラック。
何かが、吹き飛ばされる音。
両手を染める。
赤。
綺麗な赤。
頬に触れる。
手。
真っ赤に染まったそれは、僅かに俺に触れて、落ちていく。
目の前にあるのに、俺の手は伸ばしても届かず。

――――世界が、白く染まる。

……。

「おーい真也―、そろそろ起きろよー！」
「ん……あ？」
「本当にお前は朝が弱いな、まったく。」

布団が剥がされ、少しだけ冷たい気温に晒される。
あぁ、朝か。
慣れないな、この夢にも。
毎朝突きつけられる、生の感覚。
生かされた身体が、再び動き出す。
頬を拭う。
そこには今日も、乾いた跡があった。
視線を動かすと、制服エプロン姿の莉乃姉が俺を見下ろしていた。
だが何も言わない。

莉乃姉は無表情に背を向けて、小さなキッチンに戻っていく。
知っていたんだな、俺が毎日夢に見ていることを。
寝ている間に、女々しく泣いていることも。
無表情はきっと、莉乃姉なりの気遣い。
お互いにまだ、乗り越えられていないから。
今、二人で涙を流したら、収拾がつかなくなる。
だから莉乃姉は耐えた、精一杯無表情になるように。
なら俺も覚めないと、いつまでも汚い面を晒してはおけないな。
無言でベッドから抜け出して、そのまま風呂場へ。
シャワーで済まし出てくると、テーブルには案の定シチューと、軽いサラダが並んでいた。
…今日くらいは食べるか、莉乃姉のシチューは美味いからな。
制服に着替えて大人しくクッションに座る。

「いただきます。」
「たんとおあがり。」
「年寄り臭いぞ莉乃姉。」
「いいから黙って食え」
「はいはい。」
「因みに今日の隠し味は……愛だ！」
「ごちそうさま。」
「……他にも色々と新たな試みがってなにぃ！？食べなさいよ！あたしが時間かけて作ったんだぞ！」
「あぁ、隠し味を本当に隠してくれてりゃ食えたんだがな。」
「どういう意味だ！あたしの愛は食べられんと言うのか！」
「莉乃姉の愛は特に鬱陶しそうだからな、全力で願い下げだ。」
「ふっふっふ、いかな真也であろうと真の隠し味を見ては食べる気にならざるを得まい！」
「何だそりゃ、また訳の分からないもん入れたのか？」
「探してみるがいい、すぐに解るぞ！そして真也はそれを思わず口

に運んでしまうだろう！」

何なんだこの自信は、どうしたらこんなテンションになるんだ。
とりあえず湯気の立つ鍋の中をおたまで混ぜてみる。
すると、何か薄くて大きなものが出てきた。
……湯葉か？

「あたしの脱ぎたてパンティだ！」
「こいつアホだ。」
「なにぃ！？何故だ！あたしのパンティだぞ、脱ぎたてだぞ、普通食いつくだろ！」
「ふざけんなボケ！誰がシチューまみれの下着に食いつくんだ！お前は俺をどんな性癖にしたいんだよ変態め！食べ物粗末にすんなアホ！」
「ボケとかアホとか言いすぎだ！……いやしかし、真也がここまで興奮するとは、やはり入れて正解か！？」
「んなわけあるか！これを正解だとぬかす奴は頭がイカレてるわ！」
「そうか、真也はブラの方が良かったか、迂闊だった！次は失敗しないぞ！」
「次なんてねぇよ！もし入れやがったらお前の口に無理矢理捻じ込んでやるからな。」
「つまらん奴だなぁ、素直にわーいお姉ちゃんのブラだはぁはぁと欲情できんのか。」
「よーし歯を食いしばれ、重いの一発いくぞ。」
「あーっはっはっは！さて学校行くか真也。」
「誰がお前みたいな変態と一緒に行くか。」
「いいじゃないか、手を繋いで行けばあたしとの親密度アップだぞ。」
「はぁ、もう黙っててくれ、頭が痛くなる。」
「お、なら勝負はあたしの勝ちだな！まだまだあたしには勝てない

な真也は、はっはっは！」
「ったく、いつから勝負に発展したんだよ。」
「人生は何事も勝負なのだ！」
「訳わかんねぇ。」
「あっはっは、真也は可愛いな、ついつい苛めたくなる。」
「莉乃姉は馬鹿だな、もう話したくなくなる。」
「し、真也に嫌われた！？何故だ！？」
「嫌われないと思っていたことが何故だ？」
「あっはっは、学校行くか！待っていろ、すぐに食器を洗ってしまうからな！」

莉乃姉はシチューとサラダにラップをして冷蔵庫にしまうと、素早く汚れた食器を洗い始める。
ふざけていない時の莉乃姉は普通に絵になるのだが、どうにもここではテンションが上がるようだな。
それだけ普段から他じゃ気を張っているということなのか。
ふと莉乃姉の手元を見ると、一生懸命さっきのパンツを洗っていた。
……まさか、あれをまた穿くのか！？

「よし終わった、行こうか真也。」
「あ、あぁ。」

腑に落ちないまま頷くと、莉乃姉は食器と一緒にパンツを乾かし始めた。

「そこに干すのかよ！？」
「え、ダメか？」
「そこは食器を乾かすところだろうが！」
「それもそうだな。よしっ、ちゃんとベランダに干そう。」
「そうだな……って、いやいや持って帰れよ！」

「何だ、ベランダに干す分には自然だろう。」
「男の一人暮らしのベランダに女物の下着が干してあったら十分不自然だ！」
「違うぞ真也。」
「あ？」
「パンツではなくパンティだ！」
「どうでもいいわ！」
「いや大事だろ！なんかこう……エロさが。」
「いいから持って帰れ、このビニール袋にでも入れろ。」
「チッ、仕方ないな。」

渋々といった表情でアヒルみたいに唇を尖らせながら、莉乃姉は洗った下着をビニールに詰めていた。
やっとボケが終わった、まったく疲れる。
鍵をかけて歩道に出ると、莉乃姉が大きく伸びをした。
空を見上げると、遠くの空に雨雲らしき灰色の雲が見える。
今日は降りそうだな、まぁ濡れて帰ればいいか。
隣を向くと、莉乃姉がスカートを押さえて顔を赤らめていた。

「どうした莉乃姉？」
「やっぱりパンティ穿いてないとスースーするな。」
「マジで穿いてきたのをシチューに入れやがったのか！？挙句替えの物も持ってきてないと？」
「あーっはっはっは、やっちまったぜ！」
「言ってる場合か！とりあえず部屋に戻ってドライヤーで乾かすか。」
「いや流石に冗談だぞ？」
「この女…。」

高笑いしながら先を歩いていく莉乃姉。

はぁ、溜め息しか出ねぇよ。
朝から壮絶に疲れながら、俺は学校へと歩きだした。

？
「おはようございます姉御！」
「うむ、おはよう。」
「今日も姉御は凛々しいッス！」
「そうだろうそうだろう。」

目の前で繰り広げられるコントに呆れて、俺は足早に離れていく。
何か後ろで莉乃姉が叫んでいる気がしなくもないが、面倒なので無視する。
彼らは毎朝莉乃姉を慕って挨拶に来る運動部の男たちだ。
かつて、莉乃姉が入学したての頃。
莉乃姉は体験入部した全ての運動部で、天は二物を与えずなんて言葉を余裕でぶっちぎるくらいに大暴れで活躍したらしい。
結局剣道部と弓道部に入ることにしたのだが、各部では彼女が卒業するまでは勧誘を続けていくことになっているようだ。
まぁ莉乃姉も気まぐれに助っ人を引き受けたりするみたいだし、勧誘し甲斐もあるだろう。
まさに生ける伝説と化した莉乃姉は、まるで家来を引き連れた女王のように堂々と校舎へ歩いていく。
あれで何故か同じ女子連中からも嫌われたりせずにいるらしい、流石は姉御肌といったところか。
まったく、あれが今朝からかましたボケを晒したらあいつらどんな反応すんのかね。

「桐生くん、おはようございます。」
「あ？」

後ろから突然挨拶されて振り返る。
そこには少し遠慮がちな笑みを浮かべた御奈坂が立っていた。
またこいつか、関わるなと言ったのに。

「昨日はごめんなさい。」

今度は突然謝られた。
思考が追いつかない、こいつとは相性が悪いのか？
なんていうか、考えがここまで読めないのは気分が悪い。
しかも、そのどれもが、完全な不意打ちのような言葉ばかりだから。

「……挨拶されるような間柄か？」
「え？」
「まぁ、お前の理論ではどうだか知らないが、少なくとも俺は挨拶される覚えはない。俺に関わるなと言っただろ。」
「う、うん。でも！」
「いいから、構うんじゃねぇよ。俺の近くにいると教師から注意されるぞ、それにろくなことにもならない。」

何か言おうとした御奈坂を置いて先に行く。
クラスメイトだから同じ場所に行くことにはなるが、なるだけ人と一緒にはいたくない。
特に…御奈坂はダメだ。
何となくだが、何かが変わってしまいそうで……、

……どうしようもなく不安になるんだ。

だがこれだけキツく突き放せば、もう関わろうとはしないだろう。
そもそもあいつといると調子が狂う、話さない方がいい。

…さて、今日も早く着いてしまったし、また屋上で暇を持て余すとするかな。

？

ノートを書く音が響く四時限目の教室。
ウチのクラスは真面目な奴が多いのか、他のクラスに比べてかなり静かだ。
俺は黒板に書かれたものをノートに写しながら、ふと視線を感じで顔を上げた。
…やっぱり御奈坂か、何なんだ一体。
朝のことがあってから、ずっと俺を見ては目を逸らすことを繰り返している。
休み時間には恐るおそる話し掛けようと寄って来るのだが、俺はそれが鬱陶しくて、毎回無視を決め込んで教室から出ていくようにしていた。
ったく、何で俺が逃げるような真似をしなくちゃならないんだ。
そもそも何が楽しくて俺に関わろうとするのかが判らない。
他の奴らなんて、俺の怪我を見ただけで距離をおこうとするのに。
何か用なのか、もしかしたらこの包帯を返してほしいのか？
それならそうと早く言えばいいんだ、手短に済ませられるだろうに。
なら、明日にでも新しい物を持ってくればいいかな。
そうしたら、このよく判らない状態も終わるだろう。

「よし、なら生類憐みの令とは何か、峰岸、言ってみろ。」
「オレッスか！？え、えーっと、生類…なまるいだから……生物は可哀想だから全て干物にしろ！みたいな感じで、大正解でしょ！」
「……はぁ、そうだな、もうそれでいい。」
「よっしゃ、たまにはやるぜオレも！」

ガッツポーズした彼を見て、教室中が笑いに溢れ、教師は頭を抱えて呆れる。
何だあれ、恐ろしいほどにアホだな。

「やれやれ。…すまないが桐生、答えてくれるか？」
「江戸時代に徳川綱吉が出した複数のお触れの総称で、こういった名前の法令があったわけではありません。犬が有名ですが、他にも魚や虫、人間の乳幼児まで範囲は広く決められていました。しかし綱吉が丙戌年だったため、特に犬が保護されました。」
「上出来だ、よく勉強しているな。峰岸も、桐生を見習って少しは勉強しろ！」
「へーい。」
「では続けるぞ……、」

退屈。
勉強も、することがないから暇潰しに始めた。
でも最初の理由は、姉さんだったな。

「暇ならあたしを助けてよ、真也は勉強できるでしょ？」

まったく、今更だが我が儘な理屈だ。
それに素直に従う俺もどうかと思うが、まぁ無駄にはならないからって始めたんだったな。
もう、教える相手はいないけど。
ふと、窓の外を見る。
黒い雲が、近づいていた。

？
昼休みになった。

さて、飯でも食べに行くか。
そう思い席を立つと、またも御奈坂がこちらへと歩いてきた。
いい加減ウザい、しつこいにもほどがある。

「あの、桐生くん…。」
「包帯…、」
「え？」
「返せばもうつきまとわないか？」
「そ、そういうつもりじゃないよ。返してもらう物でもないから。」
「じゃあ何だ？昨日と今朝の俺の言葉、聞いてなかったわけじゃないだろ？」
「勿論聞いてたけど、渡したい物があって。」
「何にせよ余計なお世話だな、俺は何も頼んでない。」
「でも、折角持ってきたから。」
「…はぁ、何だよ一体。」
「これなんだけど…。」

御奈坂が何かを差し出してくる。
それは女の子らしいハンカチに包まれた、四角い箱状の物体。
弁当…なのか？

「これを俺に？」
「うん、お母さんが渡しなさいって。」
「意味が判らねぇ、何故だ？」
「昨日桐生くんが買ってた物を見て、これじゃ栄養が偏るからダメだって。」
「はぁ！？」

お人好し一家かよ、度が過ぎるぞこれは。
なんだって突然倒れてやってきた娘のクラスメイトの食事まで気に

する人間がいる、他人を気にかけないと死ぬ珍しい病でも患ってるのか？

「桐生くんいつも学食だし、私もその方が良いなって思ったから、うん。」

「あのなぁ御奈坂、別に俺の食生活に偏りがあったところでお前には関係ないだろ？それともお前は、周りの人間みんなの食生活を管理する委員会にでも所属してるのか？」

「違うけど……折角だから食べてほしい。」

クソッ、こいつ馬鹿だ。

こいつあれか、栄養バランスの大切さを伝えてまわる食の伝道師か？

……馬鹿馬鹿しい、アホか俺は。

はぁ、どうもこいつといると素が出そうになるな。

…仕方ねぇ、受け取らないと逃げられそうにないか。

こいつは妙に意思を曲げない節がある。

…こんなとこまで姉さんにそっくりかよ。

「判ったよ、今回だけはありがたく頂く。」

「ホントですか！？」

「ただし、今度こそ俺に関わるのは止めろ。」

「それより何処で食べましょうか？」

「……は？」

「ですから、何処かお昼休みでも空いてる所はないですかと。」

「ちょっと待て、一緒に食うのか！？」

「え、私も同じお弁当ですし。」

「いやいやおかしいだろ、お前いつも他の奴と食ってるじゃねぇか！」

「姫百合ちゃん…じゃなくて、龍矢くんには今朝から了承を得てます、今日はお友達と食べるからって。」

この状況も朝から計画してたってのかよ、ったく。

「……お前、結構強引なのな。」
「そうですか？」
「はぁ、もういい。なら屋上行くぞ。」
「でも屋上って人気高いですよね？」
「今ならまだ購買組は来てないだろうし、まだ間に合うだろう。」
「それなら行きましょう、昼休みは短いですしね。」

何か楽しそうに先行して歩き出す御奈坂。
ったく、振り回されてるな俺。
階段を上り、分厚い扉の前に並ぶ。
ワクワクしてますと言わんばかりのオーラを出す御奈坂をよそに、
俺は扉を押し開けた。
案の定、まだ人もまばらな屋上。
主にカップルや女子同士が占拠していて、既に大半のベンチも埋まっている。
どうにもこうにも、入口に立っただけで居心地が悪い。
この空間で食うのか…やっぱやめよう、気まずすぎる。

「なぁ、言いだしておいてなんだがやっぱ別の場所に…。」
「あ、あそこのベンチ空いてますよ！誰か座らないうちに早く座っちゃいましょう！」

とてとてと小走りで端っこのベンチに向かう御奈坂。
おいおい、あいつ周りの状況お構いなしか？
溜め息一つして、嫌々ながらそちらに向かう。
御奈坂は既に弁当を膝の上に広げ、ビシッと箸まで構えていた。
その光景にまた溜め息を吐いて、仕方なく隣に座る。

なるだけ距離を離し、少しだけ背を向けた。
溜め息が止まらない、何だこの状況は。
学校でも成績が悪くなれば即退学になりそうな素行の俺が、このカップルの巣窟で、女子から貰った弁当持って、その女子と並んで飯を食おうとしてる。
……うわ、寒気のする構図だ。
莉乃姉に見られたら嬉々として高笑いしながら写真を撮りそうだ、想像するだけでウザったい。
食欲なくなってきたな。
ふと隣を見ると、御奈坂が嬉しそうに弁当を食べ始めていた。
…俺より弁当箱デカくないか？

「よく食うなお前。」
「ごふっ！」

急に話し掛けられて驚いたのかむせ始める御奈坂。
俺は溜め息を吐いてポケットに手を突っ込むと、御奈坂から逃げる口実に休み時間に買った珈琲を取り出して、御奈坂に放った。
手で口を押さえながらぺこぺこと頭を下げて、プルタブを開けると一気に飲む。

「苦いっ！」
「まぁブラックなんだから当然だな。」
「けほっけほっ、よくブラックなんて飲めますね？」
「甘いのは苦手なんでな。」
「私は甘いのしか飲めないので、いつもマスターに甘くしてもらってます。」
「マスター？」
「木野塚町にあるカフェのマスターです、とっても気さくな人ですよ。良かったら今度一緒に行きませんか？」

「行かねぇよ、珈琲なら家でも飲める。大体何で毎回お前は一緒になんだよ、誰彼構わず誘ってんのか？」
「誰彼構わずってわけじゃないですけど、一人より二人の方が楽しいじゃないですか？」
「俺は一人がいいんだよ、他を当たれ。」
「そんなこと言わずに行きましょうよ。」
「テメェ、俺の台詞全部聞き流してるだろ。」
「いえいえ、そんなことないです。それより、お弁当食べないんですか」

俺は手元にある封を解いていない弁当を見る。
やっぱ食わないと納得しないか。
御奈坂は既に食べ終わり、食後のプリンまで食べ始めている。
にしてもよく食うなこいつ、その割には太ってもいないし。
部活を頑張ってれば自然に痩せもするだろうが、それにしたってこの量は…。
まぁ関係ないか、もう今日限り話すことはない。
仕方なしに弁当を開ける。
中には色とりどりのおかずと、おかかを乗せた白米が詰まっていた。
う、普通に美味そうだ、コンビニ弁当じゃこうはいかない。
隣で笑みを浮かべている御奈坂を無視して、とりあえず一口食べてみる。
……美味いな、妙に癪だが。
二口目を口に運ぶ。
程よい出汁加減の卵焼き、こんなの中々食べられない。
その反応だけで十分だったのか、御奈坂は嬉しそうにプリンを食べ始めた。
チッ、まぁ別に弁当は悪くないからな、大人しく食べよう。
暫く無言で食べ続ける。
御奈坂はプリンまで食べ終えたのか、手持ち無沙汰に足をぶらぶら

と揺らす。

「桐生くんって部活とかしないんですか？」

「さぁな、聞いてどうする？」

「やや、もしよければ剣道部なんて如何でしょうと思いまして。桐生くんって実はかなり鍛えてますよね？」

……何故気づいた。

確かに俺は日頃から武道を嗜んでいるが、そんなの莉乃姉くらいしか知らないはずだぞ。

莉乃姉は喋るとは思えないが、あの人は剣道部も部長を務めてるからな、こいつが話の弾みに聞いていてもおかしくはない。

「何故そう思う？」

「歩き方とか仕草に落ち着きを感じますし、立ち居振る舞いにも凛とした雰囲気があります。いい加減な鍛え方では中々そんな雰囲気出せませんし、実は相当の実力者なのではと思ったのですよ。」

…抜けてる奴かと思いきや、こいつ鋭い所に目をつけるな。

それにさっきまでと目つきが違う。

チッ、甘く見てたな。

物事の本質を見極める目を持ってる、多分本人は気付いていないが。

「さてね、知らねぇよ。俺は暇じゃないし、他人と馴れ合うのも嫌いだ、部活なんて興味ないな。」

「…桐生くんはもっと友達とか作った方が良いですよ。」

「黙れ、余計なお世話だ。何様でお前は俺に説教してやがる。」

「いえ…そんなつもりじゃ。」

「チッ、ウゼェ。俺のことに口を出すな、友達気取りも止めろ、鬱陶しいし迷惑だ。」

「うぅ。」
「お前の楽しみに俺を巻き込むな、誰もがお前みたいにはいかないんだよ。」
「差し出がましく友達作れとか言ったのは謝ります！でも、私は本当に桐生くんと友達になれたらなって思っただけで！」
「俺は望んでないしなりたくもない、お前の望みも知ったこっちゃない。もう二度と話し掛けるな。」

冗談じゃないふざけやがって。
ただの他人が指図だと？
少し話したくらいで調子に乗って、俺のことを知った風な口を。
弁当をたたみ、御奈坂に突き返す。
俺はそのまま無言で立ち上がると、俯いたまま動かない御奈坂を置いて、一人屋上を後にした。

？
放課後の並木通り。
俺は花を取り換えにまたここへ足を運んでいた。
だが気分は最高に悪い。
あの昼休みの後、流石にもう話し掛けてくることはなくなった。
それは喜ぶべきことで、本来ならいつもの俺に戻らないとおかしいのに。
何故、未だ気が晴れない。
クソッ、まさか今更になって罪悪感を感じてるのか俺は？
馬鹿馬鹿しい、あいつは他人だろう。
チッ、何なんだよ。
目の前で揺れる花弁に視線を落とす。
なぁ姉さん、俺は間違えたのか？

――しんや、にげないで。

え？

今、姉さんの声がした…気がする。

幻聴とは、そんなにまいってたのか俺は。

でも、逃げないで…か。

逃げてたんだろうな、俺。

大切だと思える人を作りたくない。

だから、人から逃げてた。

でも、俺はまだまだ弱いんだよ姉さん。

もう、大切な人を失うのは嫌なんだ。

俺の手は、二つしかないから。

左手首を見る。

そこには、女性用のシルバーブレスレット。

真耶姉さんの形見。

触れる。

いつまでも変わらないそれは、今の俺みたいだ。

重たい気分のまま、俺は立ち上がった。

こんな時は、あそこに行こう。

昨日の今日だし、また邪魔が入るかもしれないけど、今は静かな場所にいたい。

駅に向かって歩き出す。

黒い雲が、もうそこまで来ていた。

？

何の妨害もなく、無事に公園に辿り着いた。

まぁあれだけ多数で攻めて負けたんだ、暫くは大人しくしているだろう。

長い階段を登っていく。

周りには生い茂る木々や、草が揺れる音に満ちている。
鳥の声はしない。
恐らく雨が近づいているからだろう、巣に戻っているのかもしれない。
湿った空気は、まだ涼しげに感じられる。
葉の隙間から零れ落ちてくる光は、少しだけ暗い。
着いたらすぐに降り出しそうだな、あまり長居はできないか。
階段を登りきると、そこは急に開けた場所になる。
小さなベンチが一つだけあり、その向こうには木の手摺りと、この街が見渡せるのだ。
人気スポットになりそうなものだが、ここまで来るのに恐ろしく長い階段を登らなきゃならないから、ここで人に会うことは稀だ。
だが、今日は違った。
一つだけのベンチ。
そこに誰かが座って、街を見下ろしている。
あれはウチの学校の制服だな、男か。
わざわざこんなとこまで足を運ぶ暇人が俺以外にもいたとはな、それもあの階段を登ってまで。
でも、今日は一人になりたくて来たんだ。
仕方ない、今日は諦めて帰るか。
だがちょうど背を向けようとした時、ベンチに座っていた男がこちらに振り返った。

「え、桐生？」
「お前は確か……ダメだ思い出せない、もしかしてクラスメイトか？」
「ちょ、オレのこと判らないのか！？」
「あ？知らねぇよ。」

睨みを利かせると、そいつは顔を引きつらせて一歩引いた。

だが別に逃げ出そうとするわけでもないらしい、まぁ俺も危害を加えるつもりはないんだけど。
つか、こいつって。

「桐生ってさ、クラスメイトの名前覚えてないだろ。」
「へぇ、生物は全て干物にするような奴も、それくらいは判るんだな。」
「覚えてんじゃねぇか！」
「あんな馬鹿げた解答する奴が他にもいたら、日本の将来が心配になる。」
「何っ！？あれはやはり間違っていたのか！？」
「いや、間違えたのは俺の方さ。お前のが大正解だ。」
「マジかよ！ふぅ、焦ったぜ。ならオレの名前も判るよな？」
「は？知るかボケ。」
「酷っ！？峰岸だよ峰岸！峰岸真幸！」
「興味がないし覚える気もない。」
「頼むよ！覚えてくれよ！覚えてもらえないと寂しいだろ！」
「そうかよ、じゃあ俺は帰る。」
「まぁまぁ待てよ桐生、一人じゃ退屈だから少し喋っていこうぜ！」

……最近の俺はしつこい奴に絡まれる傾向にあるのか
大体退屈なら一人でこんなとこまで来るなよ、やっぱ馬鹿だなこいつ。

「俺はお前に用もないし話すこともない。」
「ぬぉぉぉ！断られただとぉ！？桐生ってオレのこと嫌いか！？」
「好きでもないし嫌いとも思わない、そもそもまるで興味がない。」
「む、嫌われてないってことは喋ってくれるのか？」
「何を聞いてたんだお前、脳ミソ入ってねぇのか？」
「自慢じゃないが入ってないぜ！ってうぉぉ、オレは今どうやって

生きてるんだ！？」
「一人でやってろ。」

今度こそ歩き出す。
茶番に付き合わされて疲れる一日だ、帰って休もう。
だが、不意に腕を掴まれて止められた。

「待ってくれ、聞きたいことがあるんだ。」
「離せ、馴れ馴れしいんだよテメェ。それに答えてやる義理もない、ウゼェぞ！」
「御奈坂に何かしたのか？」
「あ？」
「今日の昼休み、御奈坂と二人で何処かに行ったよな？それで桐生だけ先に帰ってきて、後から来た御奈坂は何か辛そうな顔をしてた。」
「だからどうだってんだ？」
「もし桐生が何かして御奈坂の元気がなくなったなら、オレは桐生を許せない。」
「何だテメェ、正義のヒーローのつもりかよ。」
「違う！オレは御奈坂が好きなんだ。だから御奈坂の顔を曇らせる奴は許せない！」
「はっ、知るかんなこと。で？俺が犯人ならどうするつもりだ？」
「やっぱり桐生なのか？」
「鬱陶しいから二度と話し掛けんなと怒鳴りつけただけだ、しつけぇんだよあの女は。」
「テメェ…。」
「何だ、やるのか？殴れるならやってみろよ、お調子者の馬鹿野郎が。」
「許さねぇ…ぜってー許さねぇ！お前に勝って御奈坂に謝らせてやる！」

「そりゃ面白くもねぇ冗談だ。やってみろよ、俺もちょうどイライラしてたとこだ！」

大振りな右拳が、俺の顔に向かって振るわれる。
はっ、所詮は素人の拳か、つまらないな。
腕を掴まれたままでも容易く躱せる。
上体を反らし、拳が過ぎたところでそのままヘッドバットを食らわせた。

「ぐわっ！」

掴まれていた腕も自由になり、たたらを踏んで体勢が崩れた峰岸の腹に蹴りを打ち込む。
くの時に折れた峰岸は、すぐに膝をつく。
手加減してこの程度か、話にならないな。
苦しそうに呻く峰岸を見下ろすと、そのまま鳩尾に爪先で蹴りを入れた。
もう暫くは動けないだろ。

「ざまあないな、これじゃ気も晴れやしねぇ。」
「……待てよ。」
「あん？」
「まだ……オレはやれるぞ！」
「はっ、下らねぇ虚勢を張んなよ。地べたに這いつくばって汚ぇもん垂れ流すお前がまだやれるだと？笑わせんなよテメェ、大人しく寝てろ。」
「お前に……謝らせるまで、……オレは…ゴホッ……諦めねえ！」

チッ、根性だけは人一倍か。

気絶すれば楽になんのに、無駄に耐えやがって。
…仕方ないな。
俺はもう一度鳩尾に蹴りを入れる。
声にならない呻きを上げて、峰岸はそのまま気絶した。
さて、面倒だが運ぶか。
不良なら放置するところだが、流石に学校関係者はまずいだろ。
あの病院、今日は開いてんだろうなぁ。
気紛れだからなあのオッサン、寝てなきゃいいんだが。
峰岸の鞄を掴み、峰岸の身体を担ぎ上げる。
ん、結構鍛えてあんなこいつ。
何かの運動部にでも入ってるんだろう、今日は部活サボりか？
肩に担いだまま下を見る。
そこには、長い長い階段。
……はぁ、かったりぃ。
俺は一歩ずつ、足元を確かめるように階段を降り始めた。

？

できる限り人気の少ない道を選びながら、俺は漸く件の病院に辿り着いた。
いい加減重い、流石に距離が長すぎたか。
冴塚診療所と書かれた建物の敷居を跨ぎ、ガラスの自動ドアを開けて中に入る。
しんと静まり返った診療所には、一切の照明が点いていない。
まぁいつものことだ、ここが開いてるかどうかも怪しいのは。
勝手に奥の診療室に向かう。
幾つか並んだベッドの一つに峰岸を寝かせ、鞄を適当に置いておく。
さて、とりあえずオッサン探すか。
無人の病院内を歩き、階段に行きつく。
二階は自宅になっていて、オッサンは呼びに行かないと降りてこな

い。
階段を登ると、きちんとと言うかおかしいと言うか、ちゃんと呼び鈴と扉がある。
一応チャイムを鳴らす。
……まぁ、出てきたことないからな。
勝手に扉を開けて中に入ると、靴を脱いで上がりこむ。
ったく、鍵くらいかけとけよ、無用心すぎるだろ。
入ってすぐの扉を開ければ、生活感のないリビング。
そのリビングのソファーで、白衣のオッサンはだらしなく寝ていた。
無精髭に癖の強い長髪。
医者としては最低の部類に入る見た目の悪さだ、よく医者になれたものだと感心する。
俺はいつもみたく、棚に置いてあるベルを軽く叩いた。
真鍮のベルが、高い音を響かせる。
音を聴いてもぞもぞと起き上がるオッサン。

「よぉ、起きたかよオッサン。」
「……チッ、何だテメェか真也。また喧嘩でもしたのか？飽きないねぇお前も。」
「何も言ってねぇだろ。とにかく起きろ、怪我人がいんだよ。」
「あ？今日はお前じゃねぇのかよ、珍しいな人を連れてくるなんて。」
「四の五の言ってねぇで下来いよ、じゃなきゃどうせずっと寝てんだろ？」
「ふ、まあな。」
「何でそんなに偉そうなんだよアホ。」
「チッ、わーったよ面倒だな。」

チッ、相変わらず医者の風上にも置けねぇオッサンだ。
頭をボリボリと掻きながら立ち上がる。

俺さえ見上げる長身、だらしないが整った顔立ち。
これで四十手前とか嘘だろって言いたくなるくらいに見た目が若い、
それこそ最初は疑った。
だけど俺と同い年の娘に会ってしまっては、まぁ信じざるを得ない。
釈然としないが、腕もかなり良いらしい。
だらだらと歩くオッサンを引き連れ、峰岸が寝ているベッドに向かう。
…まだ気絶してんのか、こりゃヤバいとこ入ったかな。
起きてたらまた気絶させるつもりだったから、どちらでもいいっちゃいいんだが。

「こいつ起きたら手当しといてくれ。」
「お前と同じ制服だな、お前がやったのか？」
「だから何だよ？」
「いつものように放置してこいよ、わざわざ連れてくんな。」
「はぁ、アンタそれでも医者か？」
「資格持ってるって意味じゃ医者だな。」
「つまり特に自覚はしてねぇってことかよ。」
「あぁ、してねぇ。ま、とりあえず診といてやっから。」
「ん、頼むわ。」
「こいつ起きたら何て言えばいいんだ？」
「別に、何も言わなくていいぞ。適当に手当てしたら追い出せ。」
「お前のダチじゃねぇよな、何故わざわざ連れてきた？」
「詮索すんな、関係あるか？」
「まぁ、治療には関係ねぇな。」
「んじゃ、帰るわ。」
「テメェみてぇな糞ガキ、もう来んなよ。」
「はいはい、アンタもたまには娘の面倒見ろよ。」

悪態を吐きあって病院を後にする。

よくこんな関係が続くもんだ、普通なら殴り合ってても不思議はない。
冴塚恵（さえづかめぐみ）。
高校に入ったばかりの頃、路上喧嘩して倒れてたのを助けられて以来こんな関係が続いている。
お互い他人には無関心なものだから、名前くらいしか知らない。
何故か金は取られない上にあまり詮索もしないから、俺としては助かってる。
オッサンの素性もいつかは知ることもあるだろうが、今は興味がない。
さて、無駄足食ったし、早く帰って休むかな。
ふと、空を見上げる。
あぁ、今頃になってなのか。
朝から優れなかった天気は、今になって雨雲に変わり、

――――雨が降り出した。

傘は持っていない。
まぁ駅までそう遠くない、急げばそれほど濡れないだろう。
走り出す。
暗く重い雲は、何故か俺を不安にさせた。

？

自宅の最寄駅に降り立った。
ここから暫く歩くことになるが、急げば大した時間でもない。
このもやもやした気持ちも、雨に濡れたら流されていくだろうか。
雨は本降りになってきたらしい、雨粒も大きなものになってきた。
段々と制服が重くなっていく。
長い前髪は、顔に張り付いて気持ち悪い。

体温は雨に奪われ、身体が冷たくなっていく。
このまま死ねないかな、そう頭をよぎるが、振り払う。
俺は死ねない、それだけはできない。
俺を守るために死んでしまった姉さんの分まで、少しでも長く生きなければ。
生きるのは辛い。
けどそれは俺への罰であり、償いでもある。
今の俺を生かしている、鎖。
断ち切られないように、強くならないと。
交差点に差し掛かった。
中央分離帯がある、大きな交差点だ。
ここを超えれば家はもうすぐ。

……にゃぁ。

ん？
今、何か聞こえた気がする。
……気のせいか？
この雨の音じゃ、小さな音は聞こえないだろう。
黙って信号が変わるのを待つ。
車の交通量は多い、雨だから車を使う人が増えたのだろう。
視線を動かす。
中央分離帯を見ると、一匹の黒猫がいた。
住処の一つにしているのか、植木の隙間に潜り込んでいる。
雨に濡れて、弱っているみたいだ。
健気に生きてるんだな。
すると、その猫と目が合った。
だがすぐに気付く。
その瞳は、俺を見てるわけではない。
足元を見ると、小さな黒猫が縮こまっていた。

あぁ、こいつの親なのか。
きっと子供だけが渡りそこなって、あそこで待っているんだ。

「お前、ちゃんとついて行けよ。」
「……にゃぁ。」

弱々しい返事が返ってきた。
きっと早く親の体温で暖まりたいのだろう。
人懐っこいのか、単に温もりを求めたのか、小さな黒猫は俺の足に擦り寄ってきた。
小さな黒猫は落ち着かない性格なのか、俺の周りを回り始める。
危ないから大人しくしていろ。
そう言おうとした瞬間、

―――小さな黒猫は道路へと飛び出していた。

即座に反応するが、小さな黒猫は既に手の届かない位置まで駈け出していた。
そして俺の目には、迫ってくる一台のトラックが映る。
一瞬、躊躇ってしまった。
小さな黒猫はトラックに気付かず、一直線に親猫の元へ向かう。
親猫もどうしていいか判らないのか、植木の中で動けないでいた。
雨の音が消える。

―――バンッ！

呆気ない音が、嫌に耳にこべりついた。
信号が青になる。
車は一斉に止まり、歩行者が歩き出す。
俺と黒猫だけ、時間が止まったまま。

漸く、足が動く。
俺は、離れた場所で動かなくなった小さな黒猫を抱き上げた。
それはとても軽く、取り返しがつかないくらいに冷たい。
涙が、とめどなく溢れ出す。
心に満ちた感情は、自己嫌悪。
どうして、あそこで躊躇った。
間に合ったかもしれないのに、この黒猫はまだ息をして、親猫と温めあってたかもしれないのに。
数分前まで足に擦り寄ってきた命は、もうない。
理不尽に、唐突にそれは失われた。
俺は小さな黒猫を抱いて立ち上がる。
横断歩道を渡り、後ろを振り返った。
そこには俺を、その手元を見つめる黒猫。
ごめんな……守れなかったよ。
本当に……ごめん。
お前も、独りになっちまったな。

…にゃぁ。

涙で目が霞む。
しゃがみこむと、黒猫は俺の腕に乗って、仔猫の顔を舐め始めた。
動かなくなった仔猫を、ずっと舐め続けた。

？

あれから暫くして、俺は雨の中を歩き続けていた。
胸には未だ、冷たい仔猫を抱えている。
黒猫はずっと後ろに着いてきていた。
まだ理解ができていないのか、仔猫を抱える俺から離れない。
その姿はまるで、かつての俺だ。

真耶姉の死を受け入れられず、虚ろな瞳で莉乃姉の後ろを歩いていた俺と。
あの頃から、心にぽっかりと空いた孔。
そこへ吹く隙間風は、俺の目から、世界の色を消していった。
毎日に、何も感じなくなる。
己自身に、価値を見いだせなくなる。
こいつにはそうなってほしくない。
顔を上げると、小さな公園にいた。
遠回りして、家の近くまで来ていたようだ。
俺は一番奥の木の下に歩いていく。
幸いにもそこは、あまり雨が滲みていない地面があった。
しゃがみこみ、鞄を開く。
確か筆箱にアルミ製の定規が入っていたはずだ。
濡れて皺だらけになったノートなどを押し退けて筆箱を取り出すと、
中から定規を手にした。
それを使って、地面に穴を掘る。
固い土を少しずつ掘り返し、脇に山を作っていく。
片手しか使えないから、あまり効率は良くない。
あっという間に定規が歪み、手も泥だらけになった。
それでも根気よく、何も考えずに地面を掘る。
隣には、大人しく静かにそれを見つめる黒猫。
どれくらい経っただろう。
気が付けば目の前には、数十センチほどの穴が開いていた。
黒猫が歩み寄り、掘られた穴を覗き込むと、俺と目を合わせ、鳴く。
あぁ、お前の子供はちゃんと埋めるよ。
定規を放り捨て、両手でそっと仔猫を穴に下ろす。
あとは、埋めるだけだ。
山になった土を掬う。
だが、そこで俺は動けなくなった。
親猫が穴に飛び込み、仔猫に寄り添ったのだ。

泥のついた仔猫の顔を、一生懸命舐めて綺麗にしようとしている。
だが、どれだけ舐めても仔猫は動かない。
親猫が俺を見上げた。
その瞳はまるで、このまま一緒に埋めてくれ、そう言っているように感じる。
それはもう、生きる意味を感じていない者の答え。
あらゆる未来を諦め、幸せを失い、絶望の淵に沈む決断。
……俺には、できなかった決断だ。

「くっそぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

後悔。
あの日から続く自責、目の前の現実。
叫ばずにはいられなかった。
再び溢れ出す涙。
俺にはこの黒猫の決断を止められない。
掬った土を落としていく。
黒猫は動かない。
未練などないかのように、土に埋もれていく。

「真也！」

振り返ると、そこには莉乃姉が立っていた。
莉乃姉が歩み寄ってくる。
そして俺がしていることを見た途端、思いっ切り蹴り飛ばされた。
泥にまみれ、雨を浴びる。
もう、立ち上がる気力さえなかった。
灰色の空を、無心で見る。
視界の端に、親猫を抱きかかえた莉乃姉が見えた。
仔猫は埋めてくれたのか、両手は土で汚れている。

表情は苦痛に歪んでいて、まるで泣いているみたいだ。
「お前……自分が何をしていたのか分かっているのか！」
「……。」
「馬鹿真也！お前は助かった命の尊さを一番判っているはずだろうが！そのお前が何故こんなことをした！」
「……俺には、止められなかったんだ。」
「だからって！命を擲(なげう)つ者を後押しするな！真耶だって絶対に止めるぞ！」
「っ！…俺は莉乃姉みたいに強くない！……弱いんだよ。」

莉乃姉は当たり前のように救い出そうとする。
それはたまらなく眩しくて、俺が望む強さだ。
間違っていることを間違っていると言えることは、強くないとできない。
でも、絶望に満たされた心のまま生きていくのは、辛いんだよ。
例えその選択が間違っていると知っていても、自分を騙さないと耐えられないんだ。
だから黒猫の気持ちは、痛いほど良く判る。

「……もういい、とりあえず真也の家に行くぞ。立て、ここにいては風邪を引く。」

莉乃姉に引っ張られて立ち上がると、傘と鞄を手渡された。
ここにきて初めてちゃんと莉乃姉を見る。
私服姿の莉乃姉は、既にかなり雨に濡れていた。
おそらくは先に俺の家に行ってみたらいなかったから、傘を持って探しに来たのだろう。
さっきの叫び声に気付いて来てみたら、俺が生きた猫を埋めようとしていたわけだ。

流石は莉乃姉だよ、ここぞという時に現れて、大切なものを守れる。
もし仔猫が飛び出した時に莉乃姉がいたら、助かっただろうか。
…助かっただろう、いや、莉乃姉なら助けただろう。
己の身の危険さえ考慮に入れて、仔猫も助ける。
それをできる強さを、莉乃姉は持ってるから。
ホントに、眩しい。
莉乃姉が俺の手を握り、歩き出す。
その手は雨に濡れていても温かくて、冷たくなった俺に伝わってきた。

「……ありがとう莉乃姉。」
「ん。」

短い返事。
それに含まれた優しさに胸が温かくなる。
俺にもまだ、温かくなる心があったのか。
それっきり家に着くまで、莉乃姉は話し掛けてこなかった。
玄関を開けて中に入ると、莉乃姉が風呂場に行き、二枚のタオルを持ってくる。

「真也はすぐに風呂に入れ、制服も洗わないと。」
「あぁ、そうだな。」

土まみれの制服は洗面所に置いて、シャワーを浴びる。
冷めきった身体に、人口の温かい雨が降り注ぐ。
髪留めを外すと、長い髪の隙間をお湯が通り抜けて心地いい。
暫く身体を温めていた。
予想以上に体温を奪われていたらしい、少しだけ寒気がする。
風呂から上がり部屋着に着替えると、リビングに行く。
そこではソファーに座った莉乃姉と、その膝で小さくなっている黒

猫がいた。
いつの間にか綺麗になった黒猫は、優しく撫でられて寝てしまったようだ。
そういえば、昔の俺もああやって撫でられてたな。

「莉乃姉。」
「お、上がったのか。ならあたしも入ろうかな。」
「……は？」
「どうした真也、きょとんとした顔して。」
「ウチで風呂入っていくのか？」
「そりゃああたしも雨に濡れてるし、入らないと流石に寒いぞ。」
「いや、まぁそうなんだが…。」
「よし、では風呂を借りるぞ。」

この人は恥じらいという感情が欠落しているらしい。
幼馴染とはいえ普通はそろそろ躊躇うような年齢だろ、そりゃ何もしないけどさ。
信頼されてるのは判るんだが、少しだけ複雑な気分だ。

「入るのは構わないが、着替えはどうするんだ？」
「まぁ濡れてしまってまた着るのは嫌だしな、真也のを借りる。」
「まぁ良いけど、その……下着とかどうすんだ？」
「おや？おやおやおや？何を期待してるんだ真也ぁ？」
「黙れ、純粋に心配してんのに邪推すんな！」
「あーっはっはっは、面白いな真也は。安心しろ、大丈夫だ。」
「ったく、早く入れ。」
「一緒に入るか？」
「頭イカレてんのか？」
「あたしは別に構わないぞ、真也になら見せてもいい、なんなら触ってみるか？」

「……。」
「あーっはっはっは！顔が赤くなってるぞ？可愛いなぁ真也は。」
「追い出すぞコラ！」
最高に楽しいと言わんばかりに、随分ご機嫌なまま莉乃姉は風呂に消えていった。
いや、気を遣われたんだ。
俺が落ち込んで塞ぎ込む隙を与えないように、必要以上に明るく振る舞ってくれる。
ったく、流石だよ。
溜め息を吐いてから、ソファーを見る。
いつから起きていたのか、黒猫が俺の方をじっと見つめていた。
ソファーに座ると、俺の膝の上に登ってくる。
人懐っこいな、それとも同類の匂いが判るのか？
……ここってペット大丈夫だったよな。
何を買えばいいんだろう、トイレとかか。
まぁ、明日は休みだし、買いに行くかな。
今日は疲れた。
……。

「真也、ちゃんとベッドで寝ろ。」
「ん……上がったのか莉乃姉。」
重い瞼を開けると、俺の部屋着を着た莉乃姉が顔を覗き込んでいた。
サイズが大きいせいで、かなり裾が余っている。
膝に視線を向けると、黒猫の腹が穏やかに上下していた。
起こさないようにそっと持ち上げて、ソファーに下ろす。
「あたしも疲れたよ、ご飯は明日にしようか。」
「…あぁ。」

「それじゃあ、少し早いが寝よう。」
「そうだな、くたくただ。」

ふらふらとした足取りで立ち上がる。
疲れと眠さで、意識ははっきりしない。
ベッドに潜り込む。
莉乃姉も入ってきたから、なるだけ奥に潜った。
莉乃姉を背にして、目を閉じる。
すると、後ろでもぞもぞ動いて、莉乃姉が俺を抱きしめた。

「あまり無理をするな真也、たまにはあたしを頼れ。」
「あぁ、そうするよ。」
「おやすみ真也、ゆっくり眠れ。」
「…おやすみ。」

深く沈んでいく。
俺の意識はあっさりと、眠りに溶けていった。

Day. 3　些細なきっかけ1

ゆったりと意識が戻っていく。
海月のように漂っていた意識は、海底から上る泡のように、現実に引き戻される。
寝返りを打つ。
いつもなら動き回れるベッドが、今朝は妙に狭く感じる。
疑問に思ったまま、手を伸ばしてみた。
何かに手が触れる。
それはとても優しい温かさで、驚くほど柔らかい。
心地がいい、それになんだか懐かしさを感じる。
何故だろう、俺はこの感触を知らないのに。
思わず抱きついた。
その懐かしさを確かめるように、強く抱きしめる。
あぁ、でも起きないと。
今日は墓参りに行くからな、買い物もしないといけない。
名残惜しく思いながらも、俺はゆっくりと目を開けた。

「やっと目が覚めたか真也。」
「……え？」
「何だ寝惚けてるのか、朝が弱いのは直らないな。」
「え、ちょ、何で？」
「混乱してるとこ悪いが、そろそろ放してくれないか？この感触は得難いし気持ちいいが、流石のあたしも恥ずかしい。」

見れば俺は、何故か隣で寝ている莉乃姉を思いっきり抱きしめていた。
間近で見た莉乃姉の頬は、熱でもあるかのように真っ赤だ。

しかも俺のシャツを着ていて、首周りもかなり緩い。
莉乃姉の艶めかしいラインが、俺の目に映し出されている。
…これは何だ。
傍から見たらかなりヤバい状況だ、幸い見てる人はいないが。
俺は大急ぎで離れると、壁まで後退した。

「な、何で隣で寝てんだよ！」
「お前、朝は記憶も曖昧なのか？」
「は？」
「確かに一緒に寝ることの了承を得た覚えもないが、あたしには拒否された記憶もないんだ。思い出したか？」

……あぁ、思い出したさ。
昨日あの出来事があって、心身ともに疲れ果てて、かなり思考力が低下してたんだ。
莉乃姉が風呂から上がって、俺のシャツを着て、一緒に寝始めたのに止めもしなかった。
挙句寝ながら莉乃姉を抱きしめるとか、最悪だ。

「うぁぁぁぁあ！クソッ、アホすぎるぞ俺！」
「なにぃ！？散々あたしを辱めておいて何様だお前！」
「くっ、それを言われると…って辱めるって何だよ！言い方に語弊があるぞ！」
「こんなに衣服を乱し、うら若き乙女を思いっきり抱きしめたんだ、不満でもあるのか！」
「違うっつうの！てか下着はどうした！」
「寝る時まで着けないさ、快適に眠れないだろ。あぁ安心しろ、下は穿いている。」
「あったりめぇだ！」
「いやいや真也、世の中には穿かない女性もいるのだぞ？」

「訊いてねぇよ！」
「ふっふっふ、さてと、朝ご飯にするか。昨日は食べないで寝てしまったから、真也もお腹が空いているだろう？」
「そんなのいいから今すぐに自分の服着てとっとと帰れ！」
「ほう…そんな態度をとっても良いのかな？」

ベッドから立ち上がった莉乃姉は不敵な笑みでこちらに振り返ると、涙を流すような仕草をして胸元を隠した。

「真也にあたしの初めてを奪われた、もうお嫁に行けない。」
「言い方がいちいち誤解を生むんだよ！抱きしめただけだろ！」
「あたしは一番好きな人に抱きしめてもらいたかったのに！男の人にあんなに強く抱きしめられたのは初めてだったんだぞ。」
「くっ……な、何が望みだ。」
「あたしを嫁にしてください。」
「断固拒否する。」
「何だ、あたしの身体じゃ不満なのか？」
「そうじゃねぇ！そういう台詞が不満なんだ！」
「つまり抱き心地は良かったと？」
「うっ……くっ…。」
「ふふふ、そうかそうか、それは嬉しいことだな。」

急に俺の顔を覗き込んで微笑むと、莉乃姉は上機嫌にキッチンへ入っていく。
チッ、いつの間にか誘導尋問されてたか。
だが不覚にも、寝惚けた俺は確かに心地いいと思ってしまっている。
クソッタレ、朝から抜けてるな俺。
でも、今日はあの夢を見なかった。
迫りくるトラックと、真耶姉の顔。

冷たくなっていく感覚と、両手を染めた赤。
それが、今朝はない。
莉乃姉を抱きしめていたからかは判らないが、少なくとも本当に久し振りに穏やかな眠りだったのは間違いないな。
それこそ、あの日から今日まで、夢を見なかったことなどなかったんだ。
はぁ…今日くらいはいいか。
鼻歌まじりに朝食を作り始めた莉乃姉を眺めた後、シャワーを浴びに行く。
シャワーを終えると髪を結び、余った髪をヘアピンで留めて、身嗜みを整える。
最後にブレスレットを…。

「あぁ、昨日つけたまま寝てたのか。」

姉さんのブレスレットが壊れていないか確認し、リビングに戻る。
そこには出来上がったシンプルな朝食と……、

「おい、何の真似だコラ。」
「ふふふふふ、新婚生活っぽいだろう！」

裸エプロンな莉乃姉が席についていた。
慌てて目を逸らし、全力で入ってきた扉を凝視する。
何なんだ、今日はそういう路線で俺を弄るつもりか？
ただでさえスタイルが良い莉乃姉にそんなことされたら、流石に直視できない。
一瞬しか見てないが、かなり際どい状態だ、胸なんてほとんど隠れてないじゃないか。
心臓が早鐘を打ち始める。
当然だろう、俺とて男という性別には変わりないのだから。

「どうしたの真也、もっとちゃんとあたしを見てよ。」
「猫撫で声出すんじゃねぇ！いいからとっとと服着やがれ！」
「はっはっは、初心だなぁ真也は。そんなに顔を赤くして恥ずかしがって、可愛いじゃないか。」
「うるせぇ！」
「普通男ならテンションあがってわぁ～いおっぱいだやふ～っ！って抱きついてくるものだろう。」
「そうならねぇようにしてんだろアホが！」
「ほぉ、ならあと一押しで真也を落とせるのか。」

莉乃姉が動く音がして、慌てて後ろに下がる。
クソッ、朝っぱらからハイテンションすぎるぞ莉乃姉。
気配がゆっくりと近づいてくる。
視界の端に太ももが見えてしまい、手で視界を塞ぐ。

「やめろ…マジで来るなって！」
「今朝はあんなに激しく求めてくれたのに、何でそんなに冷たくするの？ほら、触っていいよ……真也になら、あたし…。」
「マジで勘弁してくれ！これ以上は流石にヤバい！」
「あーっはっはっは！戸惑う真也は本当に可愛いな、朝ご飯の前にお腹いっぱいだ」
「テメェ、おちょくるのも大概にしろよ！」
「美人なお姉ちゃんと一緒に寝て、あまつさえ抱きしめて、お手製朝ご飯に裸エプロンだぞ？至れり尽くせりじゃないか、こんな美味しい状況滅多にないぞ、それこそ学校の男子が聞いたら卒倒する。」
「知るかそんなこと！いいから服を着ろ！」
「それにしても凄いな真也は。恥ずかしがっていても少しだけ開けた指の隙間とか、実はこっそり見てたりするものなのに、お前は一切隙なく見ないようにしてるな。」

「それがどうしたってんだよ。」
「や、そんな頑なに嫌がられるとあたしってここまでしても魅力ないのかなぁ～って、まぁ傷ついたりもする。う～ん、結構自信はあったんだが、まだ真也を落とすには至らないか。」
「……。」

溜め息まで吐き始めた莉乃姉。
何故だろう、物凄く俺が悪者っぽいのは。
でも俺にどうしろと？
ごめんな莉乃姉、莉乃姉は十分に魅力的だよ、俺も実は見たかったけど恥ずかしかったんだ、って言うのか？
……はっ、冗談じゃない無理に決まってんだろ馬鹿馬鹿しい。
クソッ、どうしたら止めてくれるんだ。
流石にそろそろ限界だ、俺の自制心がもたなくなる。
そうか、莉乃姉が今よりも興味を引くことさえあれば…。

「判った！何でも言うこと聞くから服着てくれ！」
「……今の言葉に嘘はないな真也？」
「浅はかだった！？」
「いつも冷静な真也にしては迂闊な発言だったな。あたしの身体も伊達じゃないってことか、あーっはっはっは！」

盛大に高笑いすると、カサカサと衣擦れの音が聞こえてきた。
信じられねぇこの姉、何をさせるつもりだ。
とりあえず窮地？は脱したけど、実は余計にヤバい状況じゃないか？
莉乃姉のことだから、言ったからには必ずやらせる。
逃げても追いかけてくる、てか鍵を握られてるから逃げられねぇ。
……急ぎで引っ越すか？

「もういいぞ真也。」
「本当だろうな？」
「あたしは嘘を吐かないぞ。」
「まぁ確かにそうだけどな。」

固く瞑っていた瞼を開けると、ちゃんと服を着た莉乃姉がいた。
その顔はご機嫌モードで、楽しいことが待っている乙女みたいに無邪気だ。
いや無邪気って、隠れてるだけで邪気はありそうだな。

「さて、朝ご飯食べたら出かける準備をするんだぞ真也。」
「あ？まぁ出かけるけど、何で莉乃姉に言われなきゃいけないんだ？」
「何でって、あたしと出かけるからだよ。」
「は？何でだよ。」
「さっきお前、何でも言うこと聞くからって言ったじゃないか。まさかもう忘れたのか？」
「早速使うのかよそれ。で、何をさせるつもりだよ。」
「あたしとデート。」
「はい！？」
「そうか嬉しいか、あたしも嬉しいんだ。なんたって真也とデートだからな。」
「いやいや言ってねぇし、何で突然。」
「普段からここでしか会わないからな、たまには外で一緒にいるのもいいかと思って。」
「意味が判らん、別のにしろよ。」
「ダメ、今日はデートだ。」

はぁ、仕方ない、諦めるしかないか。
莉乃姉は言い出したら本気だからな。

「判った。で、何処で何をするのか決まってんのか？」
「うむ、ちゃんとデートプランは考えてあるぞ。」
「…あのさ莉乃姉、いちいちデートって言うのに意味とかあるのか？結局いつもしてることだぞ？」
「あるとも！」
「言い切りやがった、意味なんてなさそうなのに。」
「何かデートって言うだけでドキドキするだろ！」
「あぁ、確かにするな。」
「おぉ、真也が同意してくれるとは！」
「何か嫌なことされそうでドキドキだ。」
「そっちか！？」
「で、結局何すんの？」
「秘密。まずは朝ご飯食べるぞ、折角あたしが愛情込めて作ったのに冷めてしまう。」

冷めてしまう原因を作ったのは莉乃姉な気がするが。
…言っても仕方ないし、とりあえず食べるか。
クッションに座ると、目の前に並ぶ和食に箸を伸ばす。
今日はワカメの味噌汁に、炊くのは間に合わないから冷凍してあった米、それと漬物。
食材や調味料は、ここに引っ越してきた時から莉乃姉が時々補充している。
まぁ俺はまったく使わないのだが。
味噌汁に口をつける。
ん、相変わらず絶妙だ、美味しい。
実家にいた頃は家が近所だったから、よく毎日のように作ってくれていた。
その頃はまだ、修行してるから味をみてくれって言ってたっけ。
まぁこともそれほど離れているという訳でもないんだけど、す

ぐに来れるって程じゃない。
なのに莉乃姉は俺を心配して毎日のように来てくれてる。
ホントに、お人好しだよ莉乃姉は。
ふと顔を上げれば、莉乃姉が無言で食事をしている。
食事の時は互いに無言。
食器の鳴る音だけが、静かな室内に響いている。
ピンと背筋を伸ばし、綺麗な姿勢で食べる莉乃姉。
さっきまで色仕掛けで人を弄っていたのと同一人物とはとても思えない。
箸の使い方から礼儀作法、俺も色々と影響を受けてきた。
今の俺を形成したのも、半分は莉乃姉だ。
両親なんかよりよほど親であり、本当の姉さんのように気にかけてくれている。
いや、本人もきっと本当の姉さんのつもりなのだろう。
この色のない世界の中で、唯一信頼している人だ。
莉乃姉はそれじゃダメだ、真也には仲間が必要だって言うが、それは俺に守るべき人を作れってことだろう。
でも、俺は何人も守れるほど強くない。
たくさんの仲間を守れるほど強くない、たった一人だって守れなかったんだ。
だからなるだけ莉乃姉にも、俺に関わってほしくない。
俺といるだけで、きっとろくなことにはならないから。
だけど、莉乃姉だけは必ず守る。
例え何処にいようとも、助けに行く。
この世界にいる、ただ一人大切な人だから。
姉さんみたいなことになろうとも、今度は俺の命を懸けよう。
そうした時に漸く、姉さんが生かしてくれたこの命に、意味ができる気がするから。

食べ終わると、莉乃姉は食器を洗い始めた。
俺も手伝おうとしたのだが、
「あたしがこの家にいる間はキッチンに入らないこと、ここはあたしの聖域だ！」
って言うものだから、どうも手持無沙汰だ。
どうせ料理は手伝えないのだし、せめて食器洗いだけでもと思ったのだが。
特にすることもなくソファーに座っていると、黒猫が俺の膝の上に飛び乗ってきた。
脳裏に昨日の光景が映し出される。
……思い詰めても仕方ないのか。
俺は優しく黒猫の頭を撫でてやりながら、ふと思う。
こいつ、ここに来てから何も口にしてない気がするな。
ふむ、猫って何を食べるんだ？
…魚？
昔見てた某昭和7人家族アニメの歌でも、魚を咥えた猫って言ってたような…。
「莉乃姉、魚ってこの家にあるのか？」
「は？急にどうしたんだ真也、魚？」
「そうだ魚、あるのか？」
「あることにはあるが、何に使うんだ？」
「こいつに食わす。」
俺は膝の上で動かない黒猫を指差す。
莉乃姉は納得したように頷き、しかし首を振る。

「ダメだよ真也、ここにあるのは干物だからな。猫には塩分が強すぎるだろう。」
「あぁ、そういうのもまずいのか。」
「そうだな。人間には問題なくても、猫の身体には毒であることもあるんだ。だから真也、可愛いからって何でも食べさせたらダメだぞ？」
「べ、別に可愛いってわけじゃねぇよ。」
「ふふふ、そうか？まぁ今はあげられそうな物が食パンくらいしかない、夕方まではこれで我慢してもらおう。」
「そうか…だってさお前、我慢できるか？」
「にゃぁ。」

俺を見上げて小さく鳴く。
莉乃姉は皿に千切った食パンを乗せると、床にそれを置いた。
そっと持ち上げて床に下ろしてやると、素早く走り寄ってパンを食べ始める。
これで夜までか…今夜の餌は少し豪華な物を買ってやろうかな。
一心不乱にパンを食べる黒猫を、俺はしゃがんで眺めていた。

「ほぉ、クールな真也も小動物にはそんな表情も見せるのか。」
「え……なっ！？」
「はっはっは、あたしはそんな真也が好きだな。」
「チッ、うるせえよ。そもそも、猫に冷たくしたって仕方ないだろうが。」
「そうれもそうだな、そういうことにしておこうか。」

クソッ、気が抜けてたか。
莉乃姉が洗い物を片付け終わると、俺達は一緒に家を出た。
鍵を掛ける時、物凄くナチュラルに莉乃姉が鍵を出していて奪い取り損ねたが。

二階建てマンションの階段を下りて歩道に出ると、いきなり莉乃姉が俺と腕を組み、しっかりと密着してきた。

「じゃあ行こっか真也。」
「雰囲気出そうとしたって無駄だぞ。」
「すぐに見破るくらいなら乗ってくれてもいいじゃないか。」
「はっ、誰が。」
「まぁいいか、このまま行こう。」
「アホぬかせ、離れろ。」
「言うこと聞かないなら今朝のこと、面白おかしく校内放送してやるからっ！」
「チッ、判ったよ。」
「まぁ、今はこれで我慢するかな。」

は？
我慢も何も、思いっきりやりたい放題じゃないか。
つか、これは結局他の噂を広めるだけなんじゃ。
どちらを選んでも逃げられないか…なんて選択肢だよ。
はぁ、でもいいか。
噂が流れたところで、俺は別に困らないからな。
もし困るとしても莉乃姉だけだし、そこんとこちゃんと考えてるだろうし。
俺に近寄る奴がいないなら、それほど困る結果は生まないだろう。
カップルのように、二人並んで歩きだす。

「それで、一体何処に向かうんだ？」
「そうだな、とりあえずあたしがエスコートしよう。」

莉乃姉に連れられて、朝の静かな住宅街を歩いてく。
学校へと向かういつもの道。

変わらない景色と、雨上りの青空が広がっているだけ。
俺は暫くボーっと、無言でその青空を見ながら歩いた。
すると不意に服の裾を引っ張られて視線を落とすと、拗ねた顔の莉乃姉が見上げている。

「何だよ、んな顔して。」
「デートっぽくない。」
「はぁ？」
「デートっぽくないって言ったんだ。何で無言なんだ、これじゃただ並んで歩いてるだけだぞ！」
「こういう静かなデートもあるだろう？」
「そうかもしれないけど、あたしはもっと話がしたい、お前もたまには話題を提供しろ！」

なんて我が儘な言い分だよ。

「誘っておいて他人頼みかよ。莉乃姉が考えたっていうデートプランに話題くらい入れとけよな。」
「う…確かに考えが甘かったようだ、やはりあたしもこういったことには不慣れだな。次からは気を付けよう。」

次もあんのかよ、嫌だなかったりぃ。
にしても話題か、何かあったかな。
普段から割と同じ時間を共有してることが多いから、今更話すことなんてない。
そういえば、自分から話題を探すなんて初めてかもしれないな。
昔から莉乃姉は喋るの好きだし、俺は他の奴と話さないし。
む、意外に難題だなこれは。
真耶姉も莉乃姉と一緒で喋りまくりの人だったから、ホントに考えたことがない。

どうすっかな、基本からいけばいいのか。

「…今日はいい天気だな。」
「確かに、綺麗な青空だ。これだけの快晴だと、気分もいい。」
「……え、終わりか？」
「それはあたしの台詞だ！」
「ちゃんと話題を提供したろ！」
「今のが話題だと！？」
「あぁそうだ。なのに莉乃姉が終わらせたからな、もう話すことがない。」
「あたしのせいか！？むぅ、えっと……清々しくて気持ちいいな、真也もそう思うだろ！」

珍しい、莉乃姉が混乱してる。
どうしたんだ、妙に弱いな今の莉乃姉。
いつもならどんなことも軽々とやってのけるのに、何でこんなにテンパってんだ？
こういうことは不慣れって言ってたにしても、ここまで面白くなるとは。

「にしても、こんなに天気がいいなら洗濯物干してくるんだったな。」
「うわっ、確かに忘れてた、勿体ないことしたな。真也は籠から溢れるまで洗濯しないから、あたしがやらないとな。」
「私服なんて週末くらいしか着ないんだから別に困らないだろ。」
「そうだとしてもだ、溜め込むのは良くないぞ。」
「めんどい。」
「まったく、やはり真也はあたしがいないとダメだな！」

莉乃姉が得意げに笑う。

ん、いつもの莉乃姉に戻ったか、その方が楽だ。
ほとんど無言で歩いていたからか、気が付けばもう学校の前に着いていた。
ここからだと駅に行くのか、他には何処か遊ぶようなとこあったか？

「よし、着いたぞ。」
「は？着いたぞって、ここ学校だけど。」
「あぁ、今日は学校デートなのさ。」
「はぁ！？こんなとこで何するつもりだ？」
「い、今なら保健室誰もいないから……真也さえ良ければ。」
「な、何言ってやがる！？」
「…くっくっく。」
「……この女。」
「はっはっは！まぁまぁ、とりあえず入るぞ。」

私服のままずかずかと校門を抜ける莉乃姉。
ウチの学校は珍しく、休みの日であれば私服登校も許されている。
生徒会やその他の委員会、部活に励む奴らにとっては随分と楽な仕組みだ。
流石に公式の試合や、学校の代表として活動する場合はその限りではない。
まぁ、俺みたいに休日登校なんてしない側からすれば関係のない校則ではあるが。
理由も聞かされないまま、俺は先を行く莉乃姉の後を追う。
校庭の方からは、おそらくサッカー部だと思うが、気合の入った掛け声が聞こえてくる。
てか何なんだ、委員会の手伝いでもさせるつもりか？
…だとすると面倒だ。
知らない奴、しかも生徒会や風紀委員に入っているような連中な

んて。
ただでさえそういう奴からは煙たがられてるってのに、人選間違えすぎだぞ莉乃姉、やっかみ買っても知らないからな。
上履きに履き替えて、階段を上る。
向かう先は明らかに職員室、部屋の鍵でも受け取るんだろう。
職員室の前に着くと、俺は立ち止まる。

「ではここで待っていてくれ、すぐに戻るから。」

無言で頷くと、失礼しますと言って莉乃姉が中に消える。
はぁ、このまま帰りたい。
今日は用事もあるし、できれば長居したくはないんだが。
だが逃げる間もなく、莉乃姉が職員室から出てきてしまった。

「よし、では行くぞ真也……ってどうした、そんな顔して。」
「いや、別に何も。」
「そうか？では、今日は思いっきりあたしを楽しませてくれ。」
「楽しませる？何だよ、他の奴らの前で恥でも掻かせるつもりか？」
「ん？真也の実力なら恥など掻かないと思うが、まぁいい、少なくともそんなつもりはないから安心しろ。」
「はぁ、マジで何させる気だよ。」

無邪気な笑みを浮かべた莉乃姉は、また俺と腕を組むと歩き出した。
階段にさしかかる。
生徒会室は一番上の階にあるから、ここを上らなければならない。
俺は上り階段に向きを変えた。

「何してるんだ真也、そっちじゃないぞ？」
「何言ってんだ、生徒会室は上だろうが。」

「お前こそ何を言っている、誰が生徒会室に行くと言った？あたしたちが行くのは剣道場だぞ。」

不思議そうな顔をしながら、莉乃姉が手にしている何かの鍵を見せてきた。

鍵に付いている赤いタグの中には、確かに剣道場と書かれた紙が収まっている。

……俺の勘違いか。

まぁ、状況が好転したとは必ずしも言い難いが。

寧ろ悪くなった、よりにもよって剣道の方だとは。

あそこには、御奈坂がいるじゃないか。

昨日の今日だ、少し後ろめたさも残ってる。

どうせなら弓道部にしてくれてればいいものを。

あぁクソッ、厄介な手間をこさえたな。

莉乃姉と一緒にいると、何もない一日なんて過ごせないんじゃないか？

判ってはいたが、巻き込まれると有無を言わさずついて来いって感じなんだよな。

つか、こんな莉乃姉が部長をしてる剣道部って大丈夫なのか？

何か全員風紀委員みたいに、規律を乱す輩は成敗するとか言い出さないよな。

だとしたら確実に俺は襲われる。

そもそも、この学校自体が既に莉乃姉配下の要塞になってる気がするけど。

まぁとりあえず、今は御奈坂を如何に躱すかだな。

……意識しすぎかもな俺、いつも通りに無愛想・無関心でやればいい。

余計なことさえしなければ、きっとすぐに解放されるはず。

階段を下りて昇降口に戻ると、靴を履き替えて剣道場に向かう。

すると丁度そこに、女子生徒が一人歩いてきた。

俺としっかり腕を組んだ状態の莉乃姉に一瞬動きが止まったが、どうやらその娘は剣道部員らしく、莉乃姉に頭を下げる。

「小湊部長、おはようございます！」
「おはよう藤原、今日も元気があって何よりだ。」
「それであの…そちらの方は？」
「彼氏だ。」
「違ぇだろ！」
「はっはっは、まぁいいじゃないか。」
「勝手に事実を捏造すんな。」
「仕方ないな。こいつは今日の練習相手に連れてきた、まぁ助っ人みたいなものだ。真也、一年生の藤原だ、挨拶しろ。」
「は？必要ないだろ、どうせ今日だけなんだ。」
「短い時間とはいえ同じ場所にて剣を振るう者同士、挨拶くらいは礼儀だ。」
「チッ、判ったよ。……二年の桐生だ。」
「あ、藤原奏恵（ふじわらかなえ）です！本日はよろしくお願いします！」
「あ…あぁ。」

深々と頭を下げられ、少し居心地が悪い。
莉乃姉の教育の賜物なのか、単にこの娘が礼儀正しいのか。

「今日は藤原が掃除当番だったな、鍵を開けるからついて来てくれ。」
「はい、お願いします！」

三人で校舎裏の剣道場に移動すると、莉乃姉が道場の鍵を開けて中に入る。
静謐な空気に満ちた剣道場。
板張りの床は、窓から入る光を反射して輝いている。

隣の二人は道場に一礼すると、藤原と名乗った少女は更衣室に歩いていった。

「あたしも着替えてくるから、真也は軽く準備運動でもして待っていてくれ。」

「つか、俺は練習に参加するのか？」

「うむ、今日は皆と手合わせしてもらう。勿論、その相手にはあたしも含まれるぞ。寧ろそれが本命だ。」

「俺は剣道のルールとか作法なんて知らないぞ？」

「構わないさ、真也は自分の剣を振るえばいい。あたし相手なら剣道のルールにしなくても良い。ただ真也は、相手を一度でいいから斬れば勝ちだ。」

「……なるほど、それなら確かに相手になれそうだな。」

「あたしも強くなったんだ、また真也を倒してやろう。」

「はっ、部長が恥を掻かないようにしてくれよな。」

莉乃姉は不敵に笑うと、更衣室に歩いていった。

さて、莉乃姉相手ならそれなりに準備運動も必要だな。

俺は手足を伸ばし、全身をほぐしていく。

すると、先程の後輩が袴に着替え終えて、床を掃除し始めた。

俺は邪魔にならないように、できるだけ端に寄る。

そういえば、俺は着替えたり防具を着けなくて良いのか？

持ってないから誰かに借りることになるだろうが、ジーンズに黒いシャツってマズい気がする。

ま、俺が気にすることじゃないか。

準備運動を終え、座って掃除を眺めていると、段々と部員が集まりだした。

誰一人例外なく、俺を見て驚いた顔をする。

まぁ、俺は評判悪いからな。

遠巻きに見る奴に目を合わせると、皆一斉に目を逸らす。

どうしてここに不良がと、思ってるんだろう。
明らかに剣道場には似つかわしくない外見だし、とても仮入部とか見学には見えない。
俺だって好き好んでここにいるわけじゃない、どちらかといえば被害者だ。
はぁ、早くこっから出たい。
ふと、視線を変えた。
そこに立っていたのは、袴姿の御奈坂。
向こうも俺に気付いて、その表情が固まる。
どうしていいのか判らない。
御奈坂もそれは同じなのか、戸惑いを隠せず動かなくなった。
暫くそうしていると、御奈坂の後ろから出てきた小柄な少年に先を促され、はっとしたように歩き出す。
はぁ、マジで帰りたい。
こうなることは判ってたけどさ、実際に出くわすとやっぱり戸惑う自分がいる。
クソッ、変に疲れるぞ。
もう好奇の視線さえも気にならない、ついでに言うと機嫌もあまり良くない。
暫くじっと動かずにいると、誰かに肩を叩かれた。
見上げると、心配そうな顔をした莉乃姉が袴姿で立っている。

「どうした真也、あまりにテンションが低くないか？」
「そりゃ高くはならないだろうよ、もう帰っていいか？」
「なにぃ！？あたしとのデートが楽しくないのか！？」
「これがデートだと？あぁ楽しいな。デートって言葉の意味を、俺の中で書き換える必要がありそうだ。」
「また辛辣だな真也、何をそんなに怒ってるんだ？」
「別に怒ってるわけじゃねぇよ。そもそもデートの相手が今の今まで傍にいなかったんでな、お陰で随分と晒し者にされた気分だ。」

「う、それはすまなかった。着替え以外にも色々とやることが多くてな、なかなか戻れなかったんだ。」
「はぁ、まぁいいや。で、俺はどうしたら良いんだ？」
「とりあえずあたしの後ろにいてくれ、皆で“礼”をしなければ。」
「あぁ、了解。」

立ち上がり、莉乃姉の後に続く。
板張りの硬い床の上で綺麗に整列した剣道部員たち。
俺は彼らの前に向かい合って座る莉乃姉の後ろに控え、黙して待つ。
莉乃姉は彼らを見渡すと、手近にいた部員に声をかけた。

「全員揃ってるか？」
「まだ峰岸君が来ていません、連絡したら少し遅れると。」

…峰岸だと？
何かどっかで聞いたことあるような…気のせいか？

「判った、では始めようか。全員正座！」

莉乃姉の号令で部員たちはその場に正座する。
莉乃姉も静かに正座したのに続き、俺も正座した。

「では皆、改めておはよう。」
『おはようございます！』
「さて今日の練習内容だが、試合形式にしようと思う。最近はずっと基礎練習だったからな、一年生もそろそろ自由に試合をしたい頃だと思う。それに折角休日にこれだけ集まったんだ、普段練習しない相手とも試合してみてくれ。」

俄かに喜びの声が上がる。
まぁこういう礼節を大事にするスポーツでも、試合ってのは楽しいものだからな。
日頃鍛えた成果を発揮するには、同じ部員同士の方が実力も近いし。
それに、いつも同じことばかりしてるとモチベーションも下がってくるからな。

「怪我だけはしないように気をつけて、日々の鍛練の成果を互いにぶつけ合ってほしい。」
「小湊部長。」

小柄な少年が、すっと手を上げた。
あれは、さっき御奈坂の後ろにいたやつか。
中世的な顔をした少年は、俺を一瞥すると莉乃姉に問いかける。

「そちらにいらっしゃる方は、一体何故ここにいるのでしょうか？」

場がざわめく。
誰もが知りたくても聞けなかった話題だ、興味も湧くだろう。
莉乃姉は俺に振り返り苦笑すると、前を向いて答えた。

「知っている者も多いと思うが、一応紹介する。こいつは二年生の桐生真也、あたしの弟みたいなものだ。今日は皆の練習相手にと連れてきた。見た目と違ってかなり剣の腕は立つからな、逢坂も練習相手になってもらうと良いぞ。」
「……確かに、強さは雰囲気からも感じられますね。」
「そうだろう。逢坂ほどにもなれば、やはり刃を交えずとも判るか？」
「えぇ、そうですね。」

「まぁ礼節の方も問題はない。見た目は…あまり褒められたものではないけどな。だが逢坂も言っているように、単なる強さだけなら……あたしより強いぞ。」

場が更にざわめく。

あぁ、やっぱ莉乃姉ってかなり強い方なんだな。

確か莉乃姉が入ってから、ウチの高校も強豪として扱われ始めたって聞いてるし。

そんな莉乃姉よりも強いと本人が認めたら、そりゃ驚きもするだろう。

「ただし、真也は剣道のルールを知らないんだ。こいつは元々剣術を鍛えただけだから、スポーツとしては戦えない。よって真也と試合するときは単純に一太刀浴びせたら勝ち、何処に打ち込んでも構わない。」

「あの、桐生さんは防具を着けないんですか？」

あぁ、それは俺も思ってた。

流石に防具なしで竹刀を打ち込まれたら、正直悶絶する自信がある。

だが莉乃姉は楽しそうに笑みを浮かべると、自信満々に叫んだ。

「あたしの真也が打ち込まれるなんてありえない！だから防具などいらん！」

『えぇ！？』

「おい莉乃姉、ふざけるのも大概にしろよ。」

「だが実際着けたいのか？」

「……まぁ、かったりぃな。」

「だろう？というわけで気にせずどんどん打ち込め！出し惜しみはするな！全力でいけばあるいは届くかもしれんぞ。まぁ、あたしの

真也が負けるはずないんだけどな！」

あーっはっはっはと、いつもみたく笑いだす。

部員たちは呆れ果てて、しかしこのテンションはいつものことなのか怒りだしたりはしない。

何処からか姉バカって聞こえた気がするが、きっと莉乃姉には届いていないだろう。

「さて、ではそろそろ練習を始めようか。あぁそうだ真也、流石に体術は使うなよ？」

「いや、それくらい判ってる。剣道してる相手に回し蹴りとか入れたら反則だろ。」

「うむ、まぁ真也なら大丈夫だな。では皆、準備運動をしっかりしたら始めてくれ。」

『はい！』

部員たちはそれぞれパートナーを選んで、軽い運動やストレッチを始めだす。

俺は莉乃姉に言って竹刀を借りると、端の方でその感覚を確かめる。

ここ何日か触ってなかったから、素振りくらいはしておくか。

暫くすると、各自が莉乃姉に申告し、試合を始めた。

きちんと礼をし、気合の掛け声と共に相手へと打ち込む。

剣道独特のあの音が、広い道場に響く。

へぇ、結構いい動きをするな。

審判をしている莉乃姉も、満足そうな笑みを浮かべている。

一太刀ごとの気迫、その後の立て直し。

流石は県大会でも好成績を収めるだけはある、皆綺麗な太刀筋だ。

「あの桐生さん、お手合わせ願えますか？」

「あ？あ…あぁ俺とか、判った。莉乃姉、次入るぞ。」
「早速申し込まれたか。ふむ、酒井か。よし、全力を出せよ。」
「はい部長！」

防具に身を固めた酒井という男子が、俺とは反対の方へと歩いていく。
俺も竹刀を掴むと、後に続いた。
中心に向かって歩き、間合いを取って止まると、互いに礼。
俺はちゃんとした礼なんて知らないから、とりあえず頭を下げただけ。
しんと静まった中、竹刀を正眼に構える。
莉乃姉が手を上げて、それを下して叫ぶ。

「始め！」
「はっ！」

合図と同時に踏み込んできた。
柄を片手で短く握っての胴狙い、警戒してるのか速度重視だ。
ふん、居合か。
先手には相応しい一太刀だな、純粋に速い。
でも、予想外って程でもないな。
軽く、だが確実に間合いの外に逃れるステップで躱す。
まさかこの速度を受けずに躱されると思っていなかったのか、すぐには切り返してこない。
そのがら空きの胴に向かって、俺は片手で持った竹刀を叩き込んだ。
パァン！

「一本！」
「なっ！？」

「まぁ、久し振りならこんなもんか。」
竹刀を下して頭を下げると、俺は黙って背を向けた。
相手の男は信じられないようで、動けずに、打ち込まれた胴体を睨んでいる。
周りの部員たちも、何事かを囁きあっている。
「どうだ酒井、真也と試合した感想は。」
「一番槍は俺が！…とか思ってたんですけどね、強すぎますよあの人。」
「何故負けたのか判るか？」
「そうですね、まずは純粋に速さでも負けていました。でもそれよりも、戸惑い…いえ、迷いのなさでしょうか。」
「それが判れば上出来だな。次は相手を図り損ねず、きちんと次の動きも予測しろ。」
「はい、更に鍛練を続けます！桐生さん、ありがとうございました。」
俺は振り返りもせず手をひらひらと振って、また床に立て膝で座る。
流石に今の試合を見た直後じゃ、俺に挑む奴はいないらしい。
特にすることもなく、練習相手もいないまま、大人しく他の部員の試合を観戦する。
予想はしてたが、やはり俺の相手になれそうな奴はいなかった。
暇を持て余しながら、午後の予定に思考を巡らせる。
午後になったら適当な理由をつけて抜けよう、部活がいつまで続くか判らないし。
そしたら忠勝さんのとこで花を買って、駅に行く途中でお供え物も買おうかな。
……そういえばここ最近隣駅に毎日行ってるな、毎回目的は達

成できないが。
最初は駅前のヤンキー、次は……名前は忘れたけどアホ。
今日はどんな馬鹿に振り回されるのかね、二度あることは三度あるっていうしな。
まぁ、三度目の正直って考えるか。
意識を目の前に戻すと、既に幾つかの試合も終わり、次の組み合わせも決まっていないようだった。

「よし、そろそろあたしもやるか。真也、やるぞ！」
「これが終わったら帰るからな、俺も用事があるし、他の奴らも俺には挑んできそうにない。」
「まぁあれだけ初戦から見せつけたら怖気ずくさ。それにその用事、あたしも付き合うぞ。」
「何処に行くのか判ってんのか？」
「あぁ、日曜ってことは一つしか思いつかない。あたしも最近は忙しくて行ってないから、できれば一緒に会いに行こう。勿論帰りの買い出しも手伝う、だから部活が終わるまで待て。」
「チッ、仕方ないな。何時までだよ部活は。」
「2時には終えようと思っている。今日は休日だし、まだ大会も先だからな。」
「ま、それくらいならまだ時間もあるか。」
「ところで真也、負けた方が一つ言うことを聞くというのはどうだ？」
「断る。」
「むぅ、ダメか？」
「莉乃姉の上目遣いが効くと思うのか？」
「なにぃ！？何故だ！」
「大好きな食べ物だって毎日のように出されたら嬉しくなくなるだろ、それと同じだ。」
「……お？つまり真也はあたしが好きだと！」

「……やっちまった。」
「そうだったのか、いやいや嬉しいよ真也！」
「違うっ！誤解だ！話を聞け、今のは言葉のあやだ！」
「いやぁあの真也がこんな人中で告白とは、流石のお姉ちゃんも不意打ちだった。うむ、あたしも当然オーケーだ！そうだな、真也がこんな素敵に愛を囁いてくれたんだ、あたしも何かで答えなければ！よしっ、キスするぞ真也！勿論今ここでだ！」
「だから誤解だって言ってんだろ！」

周りから笑い声が響き始める。
クソッ、流石に顔が熱い。

「……お二方、夫婦漫才は余所でお願いします。」
「おっと、すまないな逢坂。つい嬉しくって我を忘れていた。」

審判役で近くに立っていた逢坂と呼ばれた少年が、呆れた顔で溜め息を吐いた。
すると逢坂は、何故か俺を睨みつける。

「桐生さん、貴女も貴方です。そういう発言はもう少し場所を選んでいただけますか？」
「あ？だから莉乃姉の誤解だって言ってんだろ。」
「誤解される言い方をした貴方にも責任はありますよ。」
「…喧嘩売ってんのかテメェ。」
「そうですね、ボクは貴方みたいな人は嫌いです。」
「はいはいそこまで。」

睨み合う俺たちの間に莉乃姉が割って入る。

「いきなりどうした、真也も落ち着け。」

「チッ、何だよこいつ。」
「それはボクの台詞です。…何故よりにもよって貴方が。」
「桐生くん止めようよ！龍矢くんも！」
見ていられなくなったのか、御奈坂まで止めに入ってきた。
「緋結華さん、何でこいつを庇うんですか！この人は緋結華さんを…。」
「それは関係ないよ、今のは龍矢くんの言い方も悪いです。」
「う……。」
「まぁまぁ二人とも、とりあえず大事になる前に止めろ。」
今にも互いを殴りそうな俺たちを引き離すと、莉乃姉はぽんと手を叩いた。
「よし、男なら戦って勝負をつけろ。」
「剣で勝負ってことか？」
「それは面白いですね。」
「小湊部長！」
「御奈坂、お前なら判るだろ？逢坂は負けず嫌い、真也だって同じだ。なら、思いっきり戦わせた方がスッキリするさ、勿論一本勝負でな。」
「すぐに莉乃姉倒してテメェも倒す。」
「え…真也？」
「小湊部長の後だから疲れてたなんて言い訳、しないで下さいね？」
「テメェこそ、下らない言い訳なんてしねぇよな？」
「し、真也く～ん？」
「よし、とっとと終わらす。莉乃姉、やろ……う？」
莉乃姉に目を向けると、何故か体育座りでいじけていた。

……あん？
知らない間に莉乃姉が凹んでる。
「おい莉乃姉、どうした？」
「…真也に無視された。」
「は？」
「…あたしは所詮前哨戦なんだ、適当に叩かれて終わりなんだ。」
「あ…あのさ莉乃姉、とりあえず落ち着いてくれ。」
「……させないぞ。」
「は？」

莉乃姉は不意に立ち上がると、俺に向かって竹刀を突きだして叫んだ。

「真也になんて負けてやるか―！逢坂と戦う前にあたしが真也をボコボコにして倒してやる！それでもう一度、しっかり告白させてやるぞ！」
「何か話がおかしくなってるぞ！？」
「おい逢坂！」
「は、はいっ！？」
「お前と真也の勝負、あたしが預かるぞ。」
「はい、お願いします！」
「あの、小湊部長？」
「御奈坂、お前も危ないからさがっていろ。今宵のあたしは真也に飢えておる。」

…きっとツッコんだら負けなんだろうな。
もはや先程までの諍いもどうでもよくなった。
それは逢坂も同じようで、溜め息を吐きながら審判の位置に移動する。

クソッ、かったりぃことになった。
まぁ色々と失言だったのは認めるが、まさかこんな事態を招くとは。
俺は溜め息を吐いてから、しっかりと竹刀を構えた。
御奈坂は不安そうな顔をしつつも、他の部員たちの所へとさがっていく。
正面の莉乃姉に目を向ける。
既に真剣モードなのか、目には一切の揺れもない。
…あぁ、そういうことか。
俺たちの諍いを有耶無耶にするために、わざと大事にしたんだな。
大きな火災は、それ以上に大きな爆発で吹き飛ばすのと同じだ。
やれやれ、迷惑を掛けたみたいだな。
……まぁ、若干怒っているのは事実みたいだが。
逢坂が莉乃姉と同じく片手を上げて、俺たちも竹刀を構える。

「始め！」
「はぁっ！」
「っ！」

莉乃姉は掛け声を上げ、俺は無言で一歩を踏み出す。
今朝に振り下ろした竹刀が交差し、パァンと大きな音を立てた。
莉乃姉が悔しそうな顔をしながら、フェイントを入れた横薙ぎを入れてくる。
最初の一太刀、大抵はここで互いの実力差に気付く。
腕相撲で相手の手を握った時に、掌から感じるようなもの。
今の一瞬、莉乃姉は敏感にそれを感じたはずだ。
まだ、莉乃姉は俺に勝てない。
いや…もう勝てないと言うべきか。
まだお互いに小さかった頃は、毎日のように俺は負けていた。
俺に勝つたびに嬉しそうに笑う莉乃姉を見て、俺は子供心にこう

思ったんだ。

「男の俺が女に負けてるようじゃダメだ。」

悔しくて情けなくて、俺は必死になって鍛えた。

それに、俺はもう負けるつもりはない。

あの夕陽が妙に眩しかった日に、死にたくなるほどに打ちのめされたから。

どんな状況だろうと必ず相手だけは守れるように、俺は強くなったんだから。

だからさ莉乃姉。

……悪いが、莉乃姉に負けるようじゃダメなんだよ。

本気でやらせてもらうぞ。

莉乃姉の逆袈裟斬りを僅かに身体を反らして躱す。

もうここから、俺は一切の攻撃を受けない。

弾くことも、いなすこともしない、全て躱す。

ただ一太刀だけで、終わらせてやる。

足を少しずつずらし、常に莉乃姉の側面へと移動していく。

もう初めの怒りはないのか、莉乃姉の目つきは真剣だ。

だが冷静になると同時に、驚きも隠せなくなる。

絶えず相手の次の手を予測し、最小限の動きだけでそれを躱す。

それはまるで柳が風に揺れるような、自然の動き。

風に舞う綿を斬り裂けないのと同じ、僅かな風圧さえ己の追い風として味方につける。

さて、莉乃姉はどうやって攻めるのかな？

焦れて無駄な力が入るか、或いは冷静に静かなる一太刀を振るうか。

三度だけ、見極める。

一つ、袈裟斬り。

鋭く放たれたそれは、しかし戸惑いからか無駄な力が入っていた。

ダメだ、それでは当たらないよ莉乃姉。
二つ、返す刃。
目つきが変わったそれは、冷静に小手を狙った一振り。
だがまだ違う、速さに頼るのでは綿を斬り落とせはしない。
三つ、胴を狙う払い。
少しずつだが、感覚を掴んできたらしい。
流石は莉乃姉、驚異的な順応性だな。
僅か三太刀でこの動きに合わせようとするとは、そのうち本当に当ててきそうだ。
だけど、今日はもう終わりにするぞ莉乃姉。
四つ、俺は更なる動きを加えた。
それはただ躱すだけではなく、そのまま背後へと回る動き。
風の流れに身を任せ、振りぬかれた竹刀が起こす風に乗り、滑らかに背後へと流れる。
莉乃姉は竹刀を振りぬいていて、後ろには攻撃できない。
追撃の為に制御した攻撃は、二の手を考えて振るわれる。
そもそも後ろを取られると思っていなければ、そのまま攻撃を繋げるだなんてできやしないのだ。
俺は無言で、莉乃姉の首筋に竹刀をそっと当てた。

「終わりだな莉乃姉、俺の勝ちだ。」
「……あんな動き、いつの間に使えるようになった。」
「あー…実は結構昔からだ、単に使わなかっただけ。」
「くそぅ、真也に弄ばれた。」
「いちいち誤解を招くようなこと言うな！」

ったく、かったりぃな。
悔しそうにしている莉乃姉を見ていると、いきなり逢坂が俺に話しかけてきた。

「貴方…小峰宗十郎と言う御方をご存知ですか？」
「は？何だよ突然。」
「答えて下さい。」
「答える義理はないな。」
「……。」

いきなり質問してきたと思ったら、今度は黙りだす。

「はぁ……そんな奴知らねぇよ、これでいいか？」
「あの動きは何処で習いました？」
「質問ばっかだなお前。」
「……。」

また無言か、さっきまでの威勢は何処へやら。
莉乃姉もよく判らないらしく、俺と逢坂を交互に見て戸惑っている。
意味不明だ、何故こいつに自分のことを話さなきゃならない。

「もういい、面倒だから俺は帰るぞ莉乃姉。」
「なにぃ！？あたしとのデートはどうするんだ！」
「知るかよ。莉乃姉とはちゃんと勝負したんだし、目的は果たせたんじゃないのか？」
「むぅ、確かに今のあたしの実力は判ったが……いや待て、部活が終わるまで待っててくれる約束は？」
「そんな約束したか？」
「しただろう！あたしも真耶に会いに行きたいし、少しくらい待っててくれ。」
「はぁ、なら終わるまで別のとこにいるよ。ここにいると面倒だし、何より場違いだろ。」
「すまん……やはり居心地悪かったか？」

「別に謝らなくていい、単に真面目に頑張ってる奴らの中にいるのが嫌なだけだ。……じゃあな。」

竹刀を莉乃姉に渡すと、俺はすっかり冷めた空気の剣道場を後にした。

とりあえず屋上にしよう、休みだし人はいないはずだ。

無人の校内に入ると、いつものように階段を上る。

普段は人の気配に満ちたここも、今は静かだ。

遠く聞こえる喧騒も、反響して何だかぼやけている。

それは一種の心地よさを感じるとともに、否応なしに自分は今独りなのだと、そう思わせる響きだ。

外界と遮断された巨大な箱の中で独り、窓の向こうに思いを馳せる人形のように。

それに違和感はない、ただいつもの自分と変わらない。

教室にいようと、莉乃姉といようと、何処にいようと変わらない虚無感。

胸の中に空いた空洞。

結局、何処にいたって俺は独りだ。

それを悲しいとも感じられないのは、とうに冷めきってしまったからなのか、何か大事なものを落としてきちまったのか。

……どちらにしても、あの日からだな。

姉さん、俺はまだ頑張って生きてるよ。

姉さんが残してくれたこの命を、姉さんの分まで全うするために。

涙はもう流さない。

涙は大切な人のために流すものだと、姉さんは言っていた。

なら、自分のためには流せない。

やっぱりまだ、俺は心の何処かで死にたいと願っている。

でも俺がまだ生きているのは、姉さんへの償いを終えてないからだ。

いつまでも終わらない罪への贖い、それが生きる理由。

――――まるで、既に亡霊みたいだ。

屋上に着くと、当然のように誰もいなかった。
入口から一番遠いベンチに横になると、空をぼんやりと眺める。
空の青は遠く、春の終わりが近いのだと教えてくれる。
梅雨が過ぎれば、暑い太陽が街を照らすだろう。
爽やかな夏がくれば、夏休み。
今年はあの場所に行こう、あそこは二人の想い出の場所だから。
思い出すのは、見渡す限りの青い海と、緑萌ゆる太古の森。
そして、森の先にある小さな丘。
でも、一人で行くのは初めてだな。
いつも隣には姉さんがいて、俺の手を引いていた。
身体も大きくなって、もうそんな歳じゃないって言ってんのに、嬉しそうな笑顔で。
……チッ、どうしちまったんだ俺は。
感傷に浸るなんてらしくない。
俺はそんな事すら、許される人間じゃないのに。
目を閉じて、無心になろうとする。
すると、屋上の扉が開く音がして、誰かの気配がした。
こんな休みに屋上へ来る物好きが他にもいるのか。
気になって体を起こすと、来訪者を見る。
そこには、袴姿のままの御奈坂緋結華が立っていた。
御奈坂は少し息を切らし、俺の姿を認めると安堵の表情を浮かべた。
なんでだよ。
なんで、まだ追ってきたんだ。
俺は御奈坂を睨みつけた。
大抵の人間ならまず近寄らない眼光を、御奈坂に叩きつける。
表情が揺らぐ。

そうだ、そのまま引き返せ。
俺に関わっても、お互い何の益にもならないんだから。
だが、御奈坂は一歩を踏み出した。
辛そうに顔を歪めながらも、また一歩、また一歩と近づいてくる。
———そもそも、本当に辛かったのはどちらだったのか。

「来るな！」

御奈坂がビクッと震え、目を瞑って立ち止まる。
怖いはずだ、苦しいはずだ。
そんな泣きそうな顔をしてるんだから、辛くないはずがない。
なのに何故、お前はその恐怖に立ち向かえる？
どうしてまだ関わろうとするんだ？
そうまでして俺の所まで来ても、俺はお前に何も渡すものなんてない。
逃げてしまえよ。
まだ一線を越えていない今なら、振り返り、校舎を出て、剣道場に戻るだけでいいんだ。
そこにはお前を大切に思ってくれる、お前に喜びや楽しさを与えてくれる友達がたくさんいるだろ。
俺はお前を見ているのが辛いんだ。
だから、来るなよ。
それでも、御奈坂は歩いてきて。
遂に目の前で止まった。
今にも泣きそうな顔と、俺に合わせられない視線。
拳は固く握られていて、少しだが震えている。
だが目を閉じて、再び開いた瞳には……俺にはない強さが宿っていた。

「桐生…くん。」
「黙れ！近寄るな！」
「っ！……ううん、嫌です。」
「何なんだよ！何故俺につきまとうんだ！」
「それは、桐生くんと友達になりたいからです。」
「意味が判んねぇよ！こんな…酷いこと言われて、冷たくされて、それなのに何故だ！俺に関わらなくても、他に幾らでもいるだろ！」
「いいえ！桐生くんはこの世界にたった一人、他にはいません！私が友達になりたいと思った桐生真也は、貴方しかいないんです！」
「ふざけんな！そんなの理由になるか！」
「最初は…勧誘のつもりでした……剣道部の。桐生くんは強そうだし、不良みたいな格好してるけど絶対優しい人だって、一目見て思ったから。だから一緒に剣道やらないですかと、そう言うつもりでした。」
「はっ、なら答えは“断る”だ。もうこれで終いじゃないか。」
「いいえ、今はもう剣道部に入ってほしいとかじゃないんです。最近まで話し掛ける勇気が出なくて、でも何度か話すことができた。でもあの夜に怪我してても助けを求めない桐生くんを見て……とても寂しくなりました。あぁ、この人はきっとすごく孤独なんだろうって。」
「だから何だ、全部お前の想像じゃないか。」
「でも私は桐生くんが誰かを頼っているのを見たことがありません。小湊先輩と一緒にいる姿も見てましたけど、それでもいつも頼るのは小湊先輩の方だと思いました。」
「見てただと？お前一体いつから…。」
「入学した時からですよ。入学早々から校内の不良に絡まれ、たった一人で全員倒した新入生って有名でしたから。」
……チッ、確かに初日から髪の毛のことで目をつけられて絡まれたな。

まぁ御奈坂が言うとおり、俺はそいつらを公衆の面前でまとめてブッ潰し、いきなり校内最恐の不良となったのだが。
俺は正当防衛とはいえ一週間の謹慎。
まぁ当然だろう。
たった一人だったとはいえ、ほぼ全員が病院送りという怪我を負ったのだから。
莉乃姉がきちんと弁護してくれていなければ、今俺はこの学校に通えていないだろう。
不良たちは良くても一ヶ月の謹慎、主犯の何人かは退学だ。
それに、謹慎食らった奴らもそのほとんどが辞めていった。
それほどの大事件だ、俺を知らない方がおかしい。

「でもその時でさえ、桐生くんは小湊先輩を頼らなかったと聞きました。以前気になって聞いた時に、先輩は寂しそうにそう言っていましたよ。あいつは最後まで退学しようとしていたんだって、だからあたしが止めたんだと。」
「クソッ、莉乃姉め余計なことを。」
「それに、桐生くんも小湊先輩も目立ちますから。当時次期生徒会長と噂されていた小湊先輩と、最恐の新入生が仲良さそうに歩いていたら誰でも見ますよ。」

確かに、俺と莉乃姉は異例の組み合わせだ。
莉乃姉は最強無敵の正義の人で、俺は最恐になった不良。
幼馴染と知らない連中からしたら、そのまるで正反対の二人が一緒にいるだけでも興味を持つだろう。
だがだからといって、俺に話しかけてくる人間は皆無だった。

「私も当時はまだ怖かったです。あんなにも大勢を一人で倒してしまう人を見たことがありませんでしたから。学校外でも桐生くんが不良に絡まれていたって話はよく聞きましたし、実際翌日は怪我し

てきてましたから、皆ますます怖がっていました。」
「そりゃそうだろ。そんな奴にわざわざ話し掛けようとするのは、頭のおかしい剣道女くらいだ。」
「確かに私は他の人たちと少し違いました。普通はそんな光景を目にしたら怖くなるのに、私は段々とこう思うようになっていきました。実はこの人は優しいのではないかと。」
「頭のネジを何処かに棄ててきたのかテメェは。」
「あはは…そうかもしれませんね。それからはよく見てましたよ。でも桐生くんは、一度も普通の生徒を殴ったりはしませんでした。それどころか話し掛けようとも、関わろうともしなかった。だから思ったんです、私が話し掛けてみようと。」
「いよいよ医者に行った方がいいな、イカレた医者なら紹介してやるぞ。」
「あはは。でも、話し掛けて良かったです。話し掛けなかったら、桐生くんが思いやりをもった優しい人って知りえませんでしたし。」
「さっきから聞いていりゃ俺が優しいだとか孤独だとか、随分寝言を言うじゃねぇか。孤独はともかく、人に対して暴力振るうのも躊躇わない人間だぞ俺は。それをどんなおかしな脳内解釈すれば優しいとか言えんだよ？何なら今すぐテメェをブッ飛ばしても構わない。」
「もしそうだとしても、桐生くんは私を殴りませんよ。」
「はっ、何を根拠に。」
「勘…ですかね、私の勘です。」
「……。」

勘…だと？
そんな不確かな感覚を信じて、友達になりたいだなんて願いを叶えようとしてるのか？
……判らない、そんな行動原理は。
こんなにも冷たくされて怒鳴られて、そんなことをされるきっか

けが勘だなんて。
……馬鹿げてる。
そんなの、まるで釣り合わないじゃないか。
俺と友達になるまでに受けた仕打ちと、俺自身の価値が釣り合わない。
偽物を高値で騙されて買うのと同じだ。
しかもこいつは、騙していますと告げられた上でなお、自分の勘では値打ち物なので買いますと、悪徳業者ですら罪悪感に駆られるほどの笑顔でそう言うのだから。
だがそんなことを平然と言ってのける人間が、この色褪せた世界に一体どれほど少ないか。
退屈なまでに過ぎていく日々と、自分のことで手一杯な生活。
そんな人生を過ごす中で、他人を気にかけて、友達にまでなろうとする。
正直、俺には過ぎた人間だ。
真耶姉さんにそっくりな少女。
俺はきっと、その優しさに甘えてしまう。
真耶姉の時みたいに、依存してしまう。
それはダメだ、それは判ってる。
そうなれば、俺はこいつを守ろうとするだろう。
弱いままの俺に、それができるとは思えない。
莉乃姉すら守れるか怪しい俺が、二人も守れるか。
ならまた突き放して、冷たい態度で、今度こそ徹底的に関わらない方が正しい。
でもきっとこいつは…、御奈坂は諦めないんだろうな。
逃げてばかりの俺とは正反対だ。
そんな強い奴から、この先ずっと逃げ切れるのか？
クソッ、どうしたら良いんだよ。
———しんや、あなたならだいじょうぶだよ。

まただ、また聞こえる。
幻聴なのかも、もう判らなくなってきた。
最近になって聞こえ始めた、真耶姉さんの声。
まるで優しく包むように、俺に語りかけてくる。
助言なのかな、これは。
俺はそこまで姉さんを…。
自分で答えが出ないなら、他人に答えを委ねても良いのか？
……もしこの声が真耶姉さんの言葉なら、信じても良いかもしれない。
俯いたままで、話しだす。

「俺は……ろくな人間じゃないぞ。」
「あはは、私は気にしませんよそんなこと。」
「厄介なことに巻き込まれるかもしれないぞ？」
「むしろ二人の力で乗り越えましょう！桐生くんには小湊先輩もついてます！」
「…チッ、物好きだなお前は。」
「緋結華。」
「は？」
「御奈坂緋結華、私の名前です。良かったら、緋結華って呼んでください。私も真也くんって呼びますから。」
「……勝手にしろ。」
「はいっ、そうします！」

きっと御奈坂は笑顔を浮かべているだろう。
でも、俺は顔を上げられない。
見えないけれど、酷い面をしているから。
男としてみっともないくらい、酷い面を。

「おい、御奈坂。」
「はい、何でしょうか？」
「お前、部活はいいのかよ。」
「……あ。」
「……はぁ、急いで戻れ。」
「はいっ、そうします！真也くんもよかったら一緒に…。」
「俺はいい、莉乃姉に屋上とだけ伝えておいてくれ。」
「はい、判りました！それじゃあまた！」

走って屋上を飛び出していく御奈坂。
急に静かになった屋上で一人、空を見上げる。
何処までも晴れ渡った空が、ほんの少し胸の孔を埋めてくれた気がした。

Day. 3　些細なきっかけ2

それから暫くした頃、扉が開く音がして、莉乃姉が屋上に顔を覗かせた。

「すまないな真也、予定より長引いてしまった。」
「ん、構わないさ。」
「いやぁ、やっぱり真也は部員たちにいい刺激となったみたいだ。あれから皆のやる気が凄くてな、あたしも流石に疲れてしまったよ。」
「そうか、役に立ったみたいだな。」
「ありがとう真也、もし良ければまた顔を出してくれると嬉しい。」
「……まぁ気が向いたらな。」

できれば行きたくはないが、たまには実戦もしたいところだな。
俺自身の鍛練にも多少はなるだろうし、莉乃姉と闘っている時は少しだけ楽しくはあった。
それに、御奈坂とのことも一応終わったからな。

「でも他の部員が嫌がるだろう、特にあの逢坂って野郎が。」
「あぁ、逢坂か。いつもは真面目で大人しいんだが、何故か真也には突っかかっていたな。周りの部員も不思議がっていたよ。」

そうだとしたら意味が判らないな。
確かに俺は部外者だが、あの感情のぶつけ方は明らかに俺を敵視したものだった。
恨みを買うような生活はしてるけど、あいつとは一切面識がない。
……まぁ人の顔をいちいち覚えてないから、もしかしたら何処かで何かあったのかもしれないが。

別に興味もないし、考えても仕方ないか。
会ったとしても無視しとけばいいだろう、沈黙は金だ。
「さて、真耶に会いに行こうか。あの猫の餌とかも買わないとダメだしな。」
「あぁ、明るいうちに済まそう。」

じゃないとまた厄介な奴らに絡まれそうだ。
今日は莉乃姉もいるし、無茶はしたくない。
莉乃姉に傷一つでもついたら、俺は自分を許せないからな。

「で、真也に相談があるんだが。」
「却下。」
「早っ！？いいじゃないか、減るものじゃないんだし。」
「いや、莉乃姉のお願いは何か減る。なんつーか、俺の精神的体力が。」
「何か相談が勝手にお願いに変わってる！？」
「似たようなもんだろうが。」
「むぅ、今の真也は可愛くないぞ。」
「別に可愛くなろうとしてねぇよ。」
「まぁいいか。そもそもお願いというのもあたしからではないからな。」
「は？どういうことだよ。」
「それは本人に聞いてくれ。…入ってきて大丈夫だぞー！」

莉乃姉が入口の扉に向かって声をかける。
するとゆっくり扉が開いて、中から御奈坂が顔を覗かせた。
少しだけ戸惑ったような笑顔でこちらに歩いてくると、気恥ずかしそうに頭を下げる。
俺が怪訝そうに二人を見比べると、莉乃姉が御奈坂の肩を叩いて

後押しした。

「ほら御奈坂、言いたいことがあるんだろう？」

「は、はいっ！えっと…真也くん、さっきぶり…かな。」

「…あぁ、そうだな。」

……。

え、終わりなのか？

俺はそのまま俯いた御奈坂を見た後、視線で莉乃姉に問いかける。

（おい、なんだこれ。）

（ふむ、一体どうしたんだろうな？）

「御奈坂、お願いってそんなに言い辛いことだったのか？」

「えっと、すみません。いざ真也くんを前にすると緊張してしまって。」

緊張？

マジで何を言おうとしてるんだ？

御奈坂は深呼吸して気持ちを落ち着かせると、俺を真っ直ぐに見て口を開いた。

「あの……良かったら私も真耶さんに会いに行きたいです。」

「……え？」

「ご迷惑というのは重々承知です！でも、私も真耶さんがどういう人なのか知りたいんです。」

「…莉乃姉、喋ったのか？」

「う……まさかそれがお願いだったとは。」

「ったく、余計なことを喋るのが得意だな莉乃姉。まったく恐れ入るよ。」

「……ごめん。」

「いや、もういいよ。まだ御奈坂で良かったさ。」
「……ダメでしょうか？」

……どうすればいいのだろう。
多分御奈坂は真耶姉が既にこの世にいない人だと知らない。
俺も莉乃姉も意識して墓参りとは言わないから、何処か別の場所に住んでると思っているのだろう。
別に秘密と呼ぶようなことではないにしても、これは俺と莉乃姉の想い出に関わる問題だ。
誰でもそうやすやすと触れられる話ではないし、御奈坂なんてそれこそ今日からの間柄だ。
本来なら興味本位で連れて行くべきではない、それは莉乃姉も判ってるんだろう。
でも、莉乃姉は何も言わない。
喋ってしまったことに対する後ろめたさからではないだろう。
莉乃姉は、俺に判断をさせようとしている。
俺が決めるべき問題だというように。
それに実際はそう簡単なことでもない。
俺は御奈坂の目を見た。
……よし、ならこうするしかない。

「先に言っとくぞ御奈坂。」
「はい。」
「今から話すことは別段特別なことじゃない。何処にでも起こっているような、そんな話だ。だが、俺たちにとっては特別な話なんだ。それを良く理解した上で、着いて来るのかをお前が決めろ。」
「判りました。」
「莉乃姉もそれで構わないか？」
「真也がそれでいいと思ったなら、あたしは従うさ。」
「あぁ、ありがとう莉乃姉。」

身体の向きを変え、御奈坂に向き合った。
こいつが俺を恐れず歩み寄ったように、俺も少しだけ自分のことを話そう。
きっと、友達ってそういうもんだよな…姉さん。
さぁ、昔話を始めよう。

「桐生真耶（きりゅうまや）。俺の双子の姉で、唯一の姉弟だ。そして……三年前に交通事故で亡くなった。」
「……え？」

御奈坂の顔から表情が消えていく。
やっぱ知らなかったか、まぁそこまでは莉乃姉も言わないだろう。
姉さんの存在を知っている人間なんて、この高校にはきっと数えるほどしかいない。
忘れないでいる人間なんて、俺と莉乃姉くらいだ。
姉さんと仲が良かった連中も、この高校には入学していないから。
胸が苦しい。
自分の口から姉さんの死を肯定するのは、やっぱりこんなにも苦しい。
まだ…全然乗り越えられていないからな。
こればかりは、時間でさえ解決してくれないだろう。
俺自身が変わらない限りは、きっといつまでもこの痛みが続く。
でも、変わるって何だろう。
何がどう変わるのだろう。
莉乃姉を見ると、辛そうな顔で目を閉じている。
ごめんな莉乃姉、なるだけ短く済ませるから。

「事故の原因はトラックドライバーの前方不注意、どうやら随分と疲れていたらしい。でもホントの原因は…俺だ、俺が……殺したよ

うなものだ。」

莉乃姉が息を詰まらせる。

俺も長くはもたないかもしれないな。

「俺の両親は共働きでな、ほとんど家にいなかった。だから姉さんだけが唯一の家族みたいに思ってたし、一緒にいない時間なんてなかったくらいだ。でも、とある事件があって俺は荒れていた。そんな時に俺は、姉さんに助けられたんだ。」

胸の痛みが増していく。

「並木通りの交差点で、俺は姉さんと別れて、一人になろうとした。その時だよ、俺に向かってトラックが突っ込んできたのは。」

莉乃姉が背を向ける。

「俺は突然のことに動けなかった、情けないよな。鍛えていた身体も、いざとなったら動かないもんだ。でも……姉さんは違った。迷わずに走り出していた。俺を…助けるために。」

ここから先はもう言えない。

それは今でも夢に見る。

毎日、その光景も、姉さんの重さも、流れ出る血の熱さも。

目の奥が熱くなってきた。

「姉さんはほぼ即死に近かった。俺は冷たくなっていく身体を、最後の瞬間まで抱きしめていたよ。でも、もう姉さんはいないんだ。」

嗚咽が聞こえる。

あぁ莉乃姉、勘弁してくれ。
俺も……もう限界なんだ。

「これで話は終わりだ。さて、どうする御奈坂。」
「……。」

ショックだったんだろう、御奈坂は口を開かずに俯いている。
ダメだったか、やっぱり。
俺は立ち上がると、莉乃姉の肩に手を置いた。
莉乃姉が振り返り、何も言わずに俺の胸へ顔を埋める。
これじゃいつもと逆だ。
抱きついた莉乃姉から体温が伝わってくる。
ヤバいなこれ、折角耐えてたのにトドメになりそうだ。
だけど耐えなきゃな。
俺はもう、流すべき涙がないんだから。
暫く、莉乃姉の嗚咽だけが屋上に聞こえていた。

「真也くん。」

振り返る。
御奈坂が、俺を見ていた。
真っ直ぐに、何かを決意した瞳で。
覚悟が、決まったようだ。

「何だ？」
「私は、向き合おうと思います。真也くんとも、真也くんの過去とも。」
「何故だ？」
「だって…友達ですから。だから、連れて行って下さい、真耶さんの所へ。」

「…そうか。」
「真也くんに友達と認めてもらうにはどうしたら良いのか、真耶さんに聞いてみます。」

ホントに、こいつは。
俺にも、こんな強さは手に入るのか。

「……真也。」
「ん？」
「もう大丈夫だ、ありがとう。」
「あぁ、なら良かった。」

莉乃姉が俺から離れ、ハンカチで目元を拭く。
深呼吸して落ち着いたのか、莉乃姉は御奈坂の方を見た。
泣き腫らして赤い目のままで、御奈坂に話しかける。

「御奈坂。」
「はい。」
「ありがとう。」
「え？」
「御奈坂が真也と友達なってくれて、とても嬉しく思う。そして、よく最後まで話を聞いてくれた。」
「いえ、お礼を言うのは私の方ですよ。こんな大事な話を黙って聞かせてくれてありがとうございました。小湊先輩、改めてこれからよろしくお願いします！」
「はは、こちらこそ改めてだな。よろしく御奈坂、真也を頼む。見ての通り人付き合いが苦手な弟でな。冷たい態度をとるだろうけど、嫌いにはならないでやってくれ。」
「はいっ！」
「おい莉乃姉、余計なこと言ってんな。」

「何を言う！あたしは真也の友好関係を案じてだな。」
「ふふ、お二人は本当に仲が良いんですね。」
「まぁ幼馴染だからな。」
「あたしは真也が好きだからな！」
「やっぱりお二人は……付き合ってるんですね。」
「あぁ、ラブラブのあまあまだ！もうお泊りとかしちゃうぞ！」
「えぇ！？……大人です。」
「おい御奈坂、真に受けんなよ。莉乃姉、ふざけたことぬかすと口塞ぐぞ！」
「真也……御奈坂の前で大胆だな。でもそんな真也も大好きだ！」
「ドキドキ…。」
「大胆って何が……って違ぇよ！そういう意味じゃない！手だ！手！」
「真也はたまにこうして自爆するから、御奈坂も弄ると楽しいぞ。」
「意外です、真也くんってクールなイメージが強いから。あ、でも昨日包帯返すとか言われて驚きました。」
「ほぉ、詳しく聞かせろ御奈坂。」
「包帯？…あ、待て御奈坂やめろ！」

止めようとした途端、莉乃姉が御奈坂の手を掴んで逃がした。
クソッ、確かに今思えば包帯返せっていう奴はいない。
過去に戻れるなら昨日の俺をぶん殴って止めるのに。
少し離れた所で御奈坂の話を聞いた莉乃姉は、嫌らしい笑みを浮かべながら戻ってきた。

「…真也。」
「うるせぇ、何も言うな！」
「……可愛いなぁ！」
「もう喋んな！」
「……私も、可愛いと思います。」

「はぁ！？」
「おぉ御奈坂、話が判るな！」
「何かこう……ギャップが素敵です。」
「よし御奈坂、今夜は語り明かそう！真也について色々と教えてやるぞ！」
「余計なこと喋ったら二度とウチに入れねぇからな。」
「む、それはマズい。すまん御奈坂、やっぱりなしだ。」
「もういいだろ、いつまでも話してたら日が暮れる。」
「そうですね、もう随分と時間が経ってしまいましたし。」

実際話しすぎてる、もう出ないと時間がな。
少し急がないと帰りが遅くなりそうだし、人数も予定より増えた。
守らなきゃならない奴が増えるとこんなにも気苦労が増える。
俺に…守りきれるだろうか。
姉さんはきっと、真也なら大丈夫だって言うんだろうな。
三人で屋上を後にする。
まずは少し遠いが、忠勝さんの花屋に行くとしよう。

「緋結華は何故真也と話そうと思ったんだ？」
「きっかけは去年同じクラスになった時でした。あの頃の真也くんって、毎日傷だらけで学校に来てて。」
「確かにあの頃の真也は一番荒れていたな、あたしも手を焼いたよ。」
「周りの人たちは嫌そうに真也くんを遠ざけていたんですけど、どうしてか私は気になって。」
「……御奈坂は意外にライバルかもしれないな。」
「えぇ！？何でですか！？」

…女は三人寄れば姦しいって言い出した奴をここに連れて来い、二人でも十分だってことを体感させてやろう。
俺は後ろの会話をなるべく聞かないようにしながら、黙々と朝来た道を歩いていく。
並木通りは家を挟んで反対側、だから必然的に通学路を通っているのだ。
だが一つ問題がある。
通学路を通っているということは、必ずウチの前を通過するということだ。
御奈坂と完全に意気投合した莉乃姉なら、あっさりと口を滑らせるだろう。
…仕方ない、少し遠回りになるが道を変えるか。
右に曲がるべき所で、あえて直進する。
次の角を曲がれば、距離もそれほど変わらず…、

「どうした真也、お前の家の前を通った方が早いだろう？」
「あ……あぁ、そうだったな。」
「え、真也くんの家ってこの辺りだったんですか？」
「あぁ、ここを曲がればすぐだぞ。」

……余計なことすんじゃなかった―！
無言で早足に抜ければもしかしたら何もなかったかもしれないのに。
…はぁ、こうなったら諦めよう。
一歩戻って右に曲がる。
後ろでは御奈坂が俺の家はどれかとキョロキョロしていた。

「莉乃さん、真也くんの家ってどんな形ですか？」
「普通のワンルームマンションだよ、そんなに大きいものでもない。見た目もシンプルで、特に目立つような部分もないしな。」

「ワンルーム？真也くんって一人暮らしなんですか？」
「あぁ、一人だ。」
「ご実家が遠いとかでしょうか？あれ？でも莉乃さんと幼馴染ってことはそうでもないですよね？」
「……。」
「……。」

立ち止まり、俺も莉乃姉も黙る。
御奈坂はその穏やかじゃない空気を察したのか、気まずそうに謝ってきた。

「ごめんなさい、聞いてはいけない話だったみたいですね…。」
「…いや、別に大した話でもない。聞きたければ教えてやる。」
「真也、本気か？いくらなんでもそれは…。」
「そんな声出すなよ莉乃姉。俺は気にしちゃいないし、莉乃姉が気に病む話じゃないだろ？」
「……。」
「あの、真也くん。」
「何だ、聞きたいのか？」
「いえ、真也くんが話そうと思ってくれるまではやめておきます。好奇心だけで聞いてはいけない話なんでしょうし、何よりまだ、そこまで踏み込むのは図々しいですし。」
「そうか、まぁ面白い話ではないからな。知らなくても済むならその方がいい。」

俺は背を向けて歩いていく。
後ろには、もう先程までの賑やかさはない。
まぁ、仕方ないことではあるけれど。
そろそろ家の前だ。
はぁ、莉乃姉まで落ち込んだままは良い気分じゃないな。

こんな状態の二人を連れて行ったら、きっと姉さんも怒るだろう。
そもそも騒がしくする所でもないけど。

「おい御奈坂。」
「はい、何でしょうか？」
「これが俺の家だ。」

俺は何処にでもある普通のワンルームマンションを指差す。
御奈坂は指差されたマンションを見上げて、首を捻った。

「普通…ですね。」
「だから普通だって言っただろ。」
「何か真也くんってもっと質素だけどモダンな家に住んでるってイメージがありました。」
「勝手な妄想すんなよ、俺はただの学生だぞ。」
「それもそうですよね……じゃあ早速お邪魔します。」
「……まぁ、少しなら構わないが。」
「いいのか！？」
「何故そこで莉乃姉が驚く？」
「だって真也の部屋だぞ？なんかこの世界で最も不可侵領域っぽいのに！？」
「その不可侵領域に毎日ずかずかと侵入してんのは何処の誰だよ。」
「あたしは良いんだ、なにせ真也の姉だからな！」
「どんな理屈だよ、ったく。」
「あの、流石に冗談ですよ？」
「あぁ、冗談だったのか。」
「いえ、でも入れるならお邪魔したいです。」
「お前なら構わない。俺も無意識だったとはいえ、一度はお前の部屋に入ったからな。一度だけなら。」
「あぁ、そういうことですか。なら安心してお邪魔できますね。」

「…ちょっと待て真也、そんな話は聞いてないぞ？」
「そりゃ言ってないし。」
「…うわぁぁぁぁぁ！！真也が不良になったーーー！？！？」
「割と前からそうだと思うが？」
「別に真也は普通の人に迷惑かけてるわけじゃないじゃないか！なのに年頃の女の子の部屋に入るだなんて……お姉ちゃんは許しません！真也にはまだ早い！」

意味不明なことを叫びだす莉乃姉。
何だこれ、酒でも飲んできたのか？
今日はまた一段と騒がしいし、忙しすぎておかしくなったとか？
すると見かねた御奈坂が、莉乃姉を宥めながら説明しようとする。

「莉乃さん落ち着いてください、何か誤解してますよ！」
「うるさい！真也はあたしのだ！誰にも渡さないぞー！」
「いつから俺は莉乃姉の所有物になったんだ？」
「真也が生まれる前からだー！」
「えぇ！？もう真也くん、ちゃんと説明しないと大変なことに！あのですね莉乃さん、ちゃんと理由があるんです。」
「それはあたしが納得できる理由か？」
「はい、間違いなく！一昨日の夜に私の家の近くで傷ついた真也くんを見かけて、手当てするために連れて帰ったんです。途中で気絶しちゃったので、手当てしてから私の部屋で寝ててもらいました。真也くんも起きてすぐに帰りましたよ。」
「……本当か、真也？」
「俺はともかく、御奈坂が嘘吐くように見えるか？」
「……。」
「納得してもらえました？」
「…あぁそうだよ！あたしが勝手に恥ずかしい想像して取り乱しましたよ！馬鹿にしたければすればいいじゃないか！すみませんでし

たーーー！！」

莉乃姉真剣土下座。

はぁ、妄想力逞しい姉さんだな。

御奈坂はホッと胸を撫で下ろすと、莉乃姉を落ち着かせながら立ち上がらせる。

「御奈坂、ウチに上がるのはまた今度でも構わないか？そろそろ無駄な時間も無くなってきた。」

「あ、はい。そうですね、あまり遅くなると危ないですし。」

「すみませんごめんなさい！あたしが騒いだばっかりに！」

莉乃姉がまた謝り始める、落ち着け。

「莉乃さん、大丈夫ですから。とりあえずさっきのは忘れて、お花を買いに行きましょう。」

「うん、すまん。」

「はぁ、御奈坂も災難だったな。」

「いえ、全然そんなことは。」

「うはははははは！」

「莉乃さんが壊れた！？」

「……はぁ。」

こんだけ騒がしいと、厄介事を招きそうで嫌だな。

もう夏が近づいてきていて陽も長くはなってきているが、暗くなるまでには二人を帰したい。

少し早足になって、俺たちは並木通りに急いだ。

休日の並木通りは人通りが多い。
路上にはテーブル席が並べられ、爽やかな日差しの中でお茶をする人が目立つ。
梅雨に入ったと天気予報では流れていたと御奈坂が話していたが、まだ本格的に降るわけではないらしい。
漸く辿り着いた忠勝さんの花屋に入ると、むせ返るような芳香が俺たちを包んだ。
それほど広くない店内には人も疎らで、忠勝さんも手が空いているようだった。

「こんにちは忠勝さん。」
「あぁ真也くん、こんにちは。今日は献花で良いのかな？」
「えぇ、いつもありがとうございます。あと、それとは別に百合を。」
「任せなさい、すぐに用意するよ。……今日は一人ではないんだね。」
「えぇまぁ。姉さんに会いに行くと言ったら一緒に行くと言いだして。」

すると莉乃姉が一歩前に出て一礼する。

「いつも真也がお世話になっております。小湊莉乃と申します。真耶のためにいつも手を合わせて頂き、きっと真耶も感謝しています。」
「御丁寧な挨拶をありがとう。私は佐伯忠勝です、真也くんにはお世話になっているよ。」
「私は御奈坂緋結華です、初めまして。真也くんとはクラスメイトです。」
「あぁ、よろしくね。今日は私の分まで真耶さんに会ってきてください。」

『はい。』

二人ともまた頭を下げる。

忠勝さんは優しげな微笑みを浮かべると、一輪の百合を渡してきた。

「先に花を取り換えてきなさい、献花はその間に用意しておくよ。」

「はい、ありがとうございます。」

俺は受け取った百合を持って外に出る。

すぐ近くの交差点に活けられた花を取り換えて、新しい水を注ぐ。

儚げに揺れる百合を見て、静かに黙祷を捧げた。

今日も並木通りは平和だ。

ここに来るたびに思い出される状況とはまるで違う、いつもの十字路。

できればあんな悲惨な事故は、二度と見たくない。

誰にとっても、大切な人を失うのは辛いから。

御奈坂も莉乃姉も、俺の後ろで目を伏せている。

…さて、行こうか。

俺は立ち上がると、店内に戻る。

忠勝さんは綺麗な献花を持って待っていてくれた。

代金と花束を交換して、頭を下げる。

「真耶さんによろしくね。」

「えぇ、判りました。あ、友春さんがたまには食べに来いって言ってましたよ。」

「はっはっは、そうだったか。確かに最近は顔を出していなかったよ。ありがとう、今晩食べに行こう。」

「そうしてあげてください。では、これで。」

「あぁ、行ってらっしゃい。」

忠勝さんに見送られながら店を後にする。
振り返って二人の顔を見ると、俺は駅への道に足を向けた。

桐生家之墓。
そう彫られた墓標の前に、俺たちは立っていた。
爽やかに晴れた空の下で、灰色の墓石は鈍く光っている。
俺は少しだけその彫られた文字を眺めると、すぐに掃除を始めた。
管理室から借りてきた桶に水を汲み、ブラシで汚れを落としていく。

「掃除は…俺がするから。」

最初にそう言っていたから、二人には花を活ける用意などを頼んだ。
淡々と掃除を続ける。
可能な限り隅々まで綺麗にしていく。
胸には痛みが走る。
こうしていると、様々な想い出が心を過ぎ去っていく。
姉さんの笑顔や仕草、温もりまでもが、俺の心を駆け抜けて、後に冷たさを残す。
それでも涙は流さないように、懸命に堪えた。
少しでも油断したら、きっと溢れてしまう。
姉さんの温もりや、夏の日差しのように眩しい笑顔を、思い出してしまう。
口を開いたら、弱音を吐いてしまいそうだ。
薄情かもしれない、きちんと言葉をかけないといけないけど。
ごめん姉さん。

俺はまだ、長くここにいることができない。
だから、今日もすぐに帰るよ。
掃除を終えると、花を供え、三人で並んだ。
手を合わせて目を閉じる。
ごめん姉さん。
何度も繰り返し思い浮かべる。
姉さんの人生を奪ったのは、俺だ。
俺が弱かったから、こんなことになってしまった。
謝って許されるとは思ってないけど、俺には他に何もできない。
どうしたらこの贖いの時が終わるのか、それが判らないから、こうしてまた謝り続ける。
親に怒られた子供と同じだ。
怒られた意味が判らないから、謝ることしかできない。
莉乃姉はどうなのだろう。
まだお互いに受け入れられていない現実。
きっと莉乃姉も、謝っているんだろうな。
暫くして俺は立ち上がる。

「帰ろう、もう時間も遅い。」
「…そうだな、伝えたいことも伝えられた。」
「私も、挨拶をちゃんとできました。」

俺は頷くと、桶などを掴んで墓に背を向けた。
また掃除をしに来るよ。
夏には、あの場所に行こうと思ってるんだ。
姉さんが大好きだった、あの向日葵の丘に。
きっと夏になったら、また鮮やかな黄色い花を咲かせているだろう。
あそこには、姉さんとの想い出があるから。

――――大切な想い出が。

借りた物を管理室に返すと、俺たちは墓地を後にした。
駅までは自然公園を抜けていくと早い。
小鳥の囀りが聞こえる土の道を、三人並んで歩く。
雨が降った翌日は、やはり空が澄んでいる。
春の温かな風が頬を撫でて、緑の匂いを運んでいく。
沈んだ気持ちさえも軽くしてくれるように、それは心地いい。
オレンジ色に変わっていく日の光は、木漏れ日となってキラキラと輝いている。
こんな日は、ふと空を仰いでみたくなる。
空はどれだけ時が過ぎ去っても変わらない。
あの日の夕焼け空も、今と同じように輝いていた。
でもそんな空でさえ常に移り変わり、同じ姿にはならない。
決して立ち止まらない美しさだ。
俺の時間はきっと、いつまでもあの日から止まったまま。
俺にはこの風景さえ、何か大切な色が足りない絵のように見えてしまう。
俺の心から完全に失われた色が、世界を色褪せて見せる。
まるで、雨上りの空に架かる虹が六色しかないかのように。
それは酷く歪で、違和感がある世界。
いっそ、この目が見えなければいいのに。

「真也。」
「……。」
「おーい、真也―？」
「あ、あぁ。何だ？」
「ご飯、どうするんだ？」
「飯？それがどうかしたか？」
「真也はお腹空いてないか？」

言われてみれば朝に食べて以来だな、忘れていた。
今更になって身体も空腹を訴え始める。

「確かに、昼飯食べてなかったな。」
「あたしも流石に空腹だよ、そろそろ夕飯を食べてもいい時間だしな。」
「私もペコペコです。」
「よしっ、決めた！」
「嫌な予感がするが一応聞こう。」
「真也、あたしを食べてくれ！」
「……。」
「……ドキドキ。」
「おいコラ御奈坂、ドキドキすんじゃねぇ！」
「…は！ごめんなさい。」
「ったく。にしても、予想の斜め上どころか遥か彼方に行ったな。」
「そうですね、私が予想したのと全然違いました。」
「なにぃ！？お約束だろう！」
「だとしても口には出さねぇよ。」
「ダメですよ莉乃さん！その台詞を言うなら真也くんが帰ってきた時じゃないとダメです！」
「何てことだ！御奈坂、お前はホントに判ってるじゃないか！あたしとしたことが失敗した！」
「はぁ、勝手にやってろ。」

まさか御奈坂までこういうノリに乗るとは。
まったく、これから騒がしくなりそうだ、めんどくせぇ。

「さて、なら帰りに業務スーパーにでも行こうか。餌を買わないといけないし、夕飯の材料も足りないだろうから。真也は何が食べた

い？」
「別に何でも構わないが？」
「またそれか、たまにはメニューの案でも出してほしいぞ。あたしだって折角なら真也が食べたい物を作りたいんだ。」
「んなこと言われてもなぁ。」
「やれやれ、真也は好きな食べ物ないのか…。御奈坂は？」
「え、私もご一緒していいんですか？」
「いいんじゃないか？真也が家に入ってもいいって言ってるくらいだし。」
「……どうせ莉乃姉は最初からそのつもりだったろ？」
「そりゃそうだ、真也が友達を作れたんだからな。今日という日をあたしの中で祝日にしてもいいくらいだ！」
「因みに莉乃姉の中で祝日になるとどうなるんだ？」
「あたしが真也を独り占めにできる日だ！」
「却下だ。何をさせられるか判ったもんじゃない。」
「いいじゃないか―！あーっはっはっは！」

莉乃姉はくるくるとはしゃぎながら先に走っていく。
……その性格は得だよな莉乃姉。
少しだけ、羨ましいよ。

「莉乃さんってこんなにも自由な人だったんですね。」
「あぁ、俺の前だと最強の自由人に早変わりだ。昔からずっとな。」
「…大変でしたね真也くん。」
「真也―！」

こちらに振り返りながら手を振る莉乃姉。
俺を元気づけようとして、一生懸命に明るく振る舞っている。
自分だって辛いはずなのに、それでも俺を気にかけてくれて。
ありがとう莉乃姉。

「何だ―？」
「早く行くぞー！」
「判ってるっつーの！」
「あはははははは！」
「元気そうでよかったです莉乃さん。」
「あぁ、そうだな。」
「真也くんも、辛かったら泣いてもいいと思いますよ？」
「……俺は泣かないさ。いや、泣いちゃダメだ。」
「それは誰が決めたんですか？」
「……。」

……判らない、誰が決めたんだろうな。
神様か、それとも悪魔か。
いつの間にか俺の中に芽生えていた気持ち、泣いてはいけないという気持ち、罪の意識。
当たり前の幸せを願ってはいけないという思い、生き続けなければならないという観念。
誰が決めたって？
間違いなく俺のはずだ、そうじゃなきゃおかしい。
なのに何故だろう、自分に違和感を感じるのは。

「ごめんなさい、偉そうにして。」
「いや。」
「行きましょう、莉乃さんが待ってますから。」
「そうだな、待たせるとまた何を言われるやら。」

俺たちは急いで莉乃姉の後を追う。
追いついて隣を歩き出すと、俺は莉乃姉に問いかける。

「業務スーパーっていうと並木駅に戻らないとな。」
「あ、あそこのスーパーは私も知ってます。」
「便利だよなあそこは。週末しか買いに行けないあたしには丁度い
い、一度にたくさん買えるからな。」
「私は木野塚商店街ってところによく行きますよ。」
「隣町にある商店街か、昔九十九（つくも）川で遊んだ帰りに寄ったな。」
「あぁあそこか、俺も覚えてる。」
「でもま、とりあえずはいつものスーパーだな。」

少し足早に、俺たちは土の道を歩き出す。

自然公園を抜けて椿駅に着くと、電車に乗って並木駅で降りた。
駅ビルを出ると、すぐ近くに業務スーパーが建っている。
多くの人が利用するそこは、少し前に建ったばかりだ。
俺たちはそこの真新しい店内に入る。

「じゃあ少ししたら合流だ、レジの辺りに来てくれ。」
「では真也くん、また後でですね。」
「あぁ、そっちは頼む。」

莉乃姉と御奈坂はカートを押して食材を買いに行き、俺は一人で
店内を歩き出す。
どれもどれも大きい袋を眺めながら、俺は目的の物を探していた。
猫の餌って何処にあるんだ？
これだけ色々と売ってるのは便利だと思うが、これじゃ欲しい物
が見つからないじゃないか。
見上げるほど高い棚の前で立ち止まる。
……トイレットペーパーか。

はぁ、どう見てもここじゃないな。
かったりぃ。

「何かお探しですか？」
「あ？」

誰かに問われて振り返ると、そこには不思議な格好をした少女がいた。
まぁ判りやすく言うと、和服だ。
淡い青の生地に薄黄色の帯、白い鼻緒の下駄。
まさに純和風といった出で立ちだ、こんな珍しい格好中々お目にかかれない。
だがその目を引く格好に負けないくらい、少女の顔は整っていた。
筆でさっと書いたような細い眉に、小さな顔に収まった綺麗な目鼻。
短く切り揃えられた黒髪は、絹糸を黒く染めたかのように美しく、艶がある。
だからこそ、そんな少女が業務スーパーで通常の二倍はありそうなデカいカートを押している姿は、どうにもシュールで似合わない。
傍を通り抜けていく天下無敵の奥様方も、不思議そうに俺たちを一瞥していく。
まぁ当然か、どう見ても微笑ましく仲睦まじい光景には見えない。
判りやすく言うなら、目つきの悪い不良が、幼気な少女を睨みつけている図だ。
誰も少女の方から話し掛けてきたのだとは夢にも思うまい。
しかし、俺は驚きはしなかった。
……なんて言うか、こいつは知り合いだからだ。

「よぉ、恵恋（えこ）とこんなとこで会うとはな。」
「そうですね、真也さんがこんな所にいるだなんて。……私傘は持

ってきていませんよ。」
「どういう意味だコラ。」
「真也さんがコンビニ以外で買い物なんて、きっとこの先一生お目にかかれませんから。」
「チッ、否定できないところが腹立たしい。」
「それで、何をお探しでしたか？」
「猫の餌だけど、お前判るのか？」
「一応毎週二回、ここには買い物に来ていますから。何処に何があるのか、それなりに知ってはいますよ。」
「……まさかその格好で毎回？」
「はい？当たり前じゃないですか、何がおかしいんです？」
「いや、別に何もおかしくはないが…。」

こいつ自覚とかしてないのかよ、凄いな。
物凄く目立っていることに恥ずかしさとか感じてないのか？
あぁ、そうだった。
こいつは馬鹿が付くほど天然少女だったな、そもそも気がついてない。

「よく判りませんが、猫の餌ならこちらですよ。」
「あ、あぁ。」

無自覚和服少女は、その小さな身体で一生懸命カートを押している。
俺はちょこちょこと歩いていくその背中を追って、しかし歩幅を合わせるようにゆっくりと着いていく。
幾つかの角を曲がると、ペット用品が集まった棚に到着した。
トイレ用砂、ケージ、鳥籠、各種餌、果ては猫じゃらしまで、所狭しと商品が棚に詰め込んである。

「そこの棚が全部猫の餌ですよ。」
「こんなに種類があんのかよ…はぁ。」
「よろしければ私が選びましょうか？」
「は？お前猫に詳しいのか？」
「詳しいも何も、私の部屋には“恋夏（れんか）”って名前の猫がいるんです。餌だってここで買っていますから。」
「あぁ、なるほどな。で、どれが一番良いんだ？」
「因みに真也さんの猫の種類は？」
「知るかよ、拾ってきた猫だからな。色は全部黒だ。」
「拾い猫ですか、ではこの辺りが一番無難ですね。」

俺は恵恋に指差された餌の袋を掴むと、肩に担いだ。

「余計な手間を取らせたな。」
「大丈夫です、大した手間でもないですし。それより拾った猫なら一度病院に連れて行った方がいいですよ。」
「何故だ？」
「感染症や寄生虫など、まぁあまり人間には優しくない生き物を連れていたりしますから。」
「マジかよ、それは困る。」
「えぇ、ですから今度ウチに連れてきて下さい。あの親は無駄に幅広い知識だけはありますから、動物の治療や検査もできますよ。」
「そうだったのか、胡散臭さが増したな。」
「まったくです、ただでさえ胡散臭い顔をしているというのに。」

心底嫌そうに肩をすくめる恵恋。
冴塚恵恋（さえづかえこ）、あのヤブ医者の一人娘。
あの親にしてこの子ありというのはやはり適用されるようで、こいつもこいつで問題がある。
まずひたすらにあの親が嫌い、それも大が付くほどに。

だから同じ名前、つまり苗字で呼ばれたくないらしく、俺には名前で呼ぶようにと言っている。
…まぁ嫌いになるのも判るが。
俺も親があんなに腐った人間だったら嫌いになるだろう、不良にならないだけこいつはマシだ。
その代わりに性格が若干辛辣だが。

「では私はこれで失礼します。」
「あぁ、じゃあな。」
「ちゃんと黒猫ちゃん連れてきてくださいね。」
「あ？あぁ、そうだったな。」
「忘れないでください。覚えられないようでしたら身体に刻み付けましょうか？」
「いや、断る。」
「そうですか、残念です。では。」

恵恋は大きなカートを押して歩いていった。
やれやれ、あれで有言実行を信条にしてるんだから怖いな。
なんでも親があまりに適当な生活をしてるから、自分はこうならないようにと思ったらしい。
つまり、本気で刻み込んでくるだろう。
……無表情でメスとか持ってきそうだな。
まぁいいか、二人と合流しよう。

「しーんーやー。」
「あ？」

俺を呼ぶ声が聞こえて振り返ると、何故か莉乃姉が棚の角から顔だけを出して俺を睨んでいた。
その隣では驚いたような呆れたような、そんな複雑な表情をして

立っている御奈坂がいる。
…何してんだあいつら。

「おい莉乃姉、そんなとこで何してんだ？」
「真也、今の美少女は誰だ？」
「は？美少女？」
「とぼけるな。さっきまで一緒にいた和服美少女は誰だと聞いている！」
「恵恋のことか？まぁ色々あって知り合いなだけだ。」
「恵恋、恵恋だって！名前で呼んでる……名前で呼んでる！」
「…同じこと繰り返して喋るのが好きなのか？」
「違うわ！…いつの間にあんな可愛い子と知り合いになったんだ！」
「いつの間にって…覚えてないな、随分前に医者に行った帰りにすれ違ってからか、話し掛けてきたのはあいつからだったか。」
「…真也くんって、まさか…。」
「やめろ緋結華！その可能性だけは！それだけはやめてくれ！」
「……もしかしたら色んな所で女の子を…。」
「うわぁぁぁぁ！！そんな馬鹿なぁぁぁぁ！」
「おい…莉乃姉。」
「違うと言ってくれ！頼む真也！」
「違うも何もそんなことしてねぇ！あいつは俺がたまに行く医者の娘だ、だから顔見知りってだけだ！」
「……つまり何でもないと？」
「当たり前だろ。」
「…よかったぁ。」
「……ふぅ。」

御奈坂と莉乃姉がようやくこちらに向かって歩いてくる。
何をそんなに騒ぎ立てていたのか、まったく訳が判らない。
俺の知り合いなんて、あの親子以外には忠勝さんと友春さん夫妻

くらいなもんだっつうのに。
騒がしく買い物を済ませると、漸く家路につく。
荷物を分担して持ち、向うのは俺の家。
莉乃姉の提案で今夜はハンバーグらしい、単純に肉が安く売っていただけだが。
家に着くと鍵を開け、家に入る。
だが後ろ振り返ると、何故か御奈坂が入ってこない。

「どうした？そんなところにつっ立って。」
「えっと…良いのかなって思いまして。」
「ダメならそもそも途中で別れてる、いいから入れよ。」
「なら……お邪魔します。」

意を決したように中に入ってきた。
何もそこまで決意を固めなくてもいいだろうに。
靴を脱いで家に入ると、買い物袋をキッチンに運び込む。

「しまうのはあたしがやっておくから、真也は猫に餌をあげてやれ。流石にパンだけじゃ物足りないはずだ。」
「そうだな、頼むよ。」

俺は適当な皿に買ってきた餌を出すと、部屋の方に行って猫を呼ぶ。
一日中そこにいたのか、黒猫はソファーの上から飛び降りて餌に食いついた。
やっぱりちゃんと餌は買わないとダメっぽいな。
俺は一心不乱に餌を食べる黒猫を眺める。
…そういえばこいつの名前決めてなかったな。

「真也くん。」

「ん？」

首だけ動かして振り返ると、御奈坂が所在なさげに立っていた。

「何してんだそんなとこで、立ってるのが趣味なのか？」

「いえ、流石にそんな奇特な趣味はないですよ。…真也くんの部屋ってこんな風になってるんですね。」

「何かおかしいか？」

「そんなことないですよ、なんていうか真也くんらしいです。凄くシンプルで…。」

「面白みに欠ける部屋とでも言いたいのか？」

「まさかそんな！男の子の部屋ってもっとごちゃごちゃしてて、趣味全開！って感じだと思ってました。でも真也くんの部屋はとても片付いてて、物が少ないですね。」

「必要最低限の物しか買ってないからな。趣味もこれといってないし、そりゃなにもない部屋になるだろ。」

「でも意外です、真也くんが猫さんを飼っているだなんて。何て名前なんですか？」

「……。」

「…もしかして、名前決めてないんですか？」

「…チッ、悪かったな。昨日拾ったばかりでそんな余裕なかったんだよ。」

「あ、昨日からなんですか。じゃあ名前を付けてあげましょうよ。」

名前ね…。

誰かの名前を考えるなんて初めてだな、どうしたら良いんだ？

カタカナがいいのか、漢字がいいのか、猫の名前ってどんなだよ。

……もうタマとかでよくね？

「ちゃんと考えてあげましょうね、折角なら素敵な名前が良いじゃ

ないですか。この子だけの名前を。」
「……。」

なんてタイミングでそんな台詞を言いやがる、タマとか言おうもんなら文句を言いだしそうだ。
ちゃんとした名前……か。
あれ、そもそもこいつって。

「なぁ、こいつって雄雌どっちだ？」
「え、それも知らなかったんですか！？」
「うるせえな、調べ方なんて知らねえよ。」
「調べ方も何も…。」

御奈坂は餌を食べている黒猫の後ろに回ると、床に耳をつけるかたちで黒猫を覗き込んだ。

「あぁ、女の子ですね。なら可愛い名前にしないと。」
「……はぁ。」
「どうかしましたか？」
「別に何でもねぇ。」

いや、一番手っ取り早い調べ方なんてそれくらいしかないよな。
判ってんだけど、躊躇うのって俺くらいなのか？

「つか俺じゃ思いつきそうにないわ。御奈坂、お前が考えてくれ。」
「え、私ですか？」
「何だ、ダメなのか？」
「いえいえ、まさか真也くんに頼みごとされるとは思ってもいませんでしたから。」
「……それもそうだな。」

自然に口から出ていた言葉。
気を付けてないとまずいな、こいつに対して気が緩みすぎてる。
まぁ、この件に関してはもうこのままでいいか。

「そうですねぇ……待ってくださいね。」
「まぁ、無理ならいい。…お前は今日からタマだ。」
「ちょちょちょちょっ！ちょっと流石にそれは！？」
「大丈夫だろ、どうせ猫じゃ判んないだろうし。」
「……なつね。」
「は？」
「夏に音と書いて夏音（なつね）ってどうでしょうか。」
「……夏音。」

夏の…音。
梅雨に降る雨。
梅雨は春の終わりを示し、梅雨は夏の到来を告げる。
こいつと出会ったのも雨の日だった。
悪くないのかな。

「なら夏音で決定だ。」
「良かったです、無事に決まって。夏音ちゃん……自分で言うのもなんですが可愛いですよね？」
「さぁな、よく判らねぇよ。ま、いいんじゃねぇの？」
「はいっ。」

餌を食べ終わった夏音の頭を撫でる御奈坂。
丁度そこに莉乃姉がやってきて、御奈坂を呼ぶ。

「緋結華、良かったら手伝ってくれないか？」

「あ、了解です。では真也くん、夏音と待っていてくださいね。」
「あ？あぁ。」

莉乃姉についてキッチンへと消える御奈坂。
夏音は俺の背中に飛び乗ると、そのまま上ってきた。
肩の上に乗ると、そのまま力を抜いて寝始める。
…こいつ、随分と自由じゃないかコラ。
……仕方ないな。
楽しそうに料理をする二人の声を聞きながら、俺はソファーに寝転がった。
夏音を腹の上に移動し、ボーッと虚空を見つめる。
今日は色々ありすぎて疲れたな、主に精神的に。
朝は莉乃姉の悪ふざけ、昼は御奈坂とのこと、夕方は二人の騒がしさに溜め息が絶えない。
……俺は何をしてるんだ。
どんな権利があって、こんな普通の生活をしている。
友達と呼んでくる奴や、昔からずっと面倒を見るという幼馴染。
信じるな、誰も。
他人は所詮他人であって、誰も他人を気にかけたりはしない。
誰もが自分のために生きて、他人を蹴落とし、己を幸福にして、他人を不幸にしていく。
御奈坂も莉乃姉も、俺といることで何か得をすると思っているはずだ。
そうでなければおかしい、自分に得がないのに人は動かない。
…俺にそんなものはないのに。
何故あいつらは、俺に関わろうとするのだろう。
なぁ姉さん、姉さんなら判るのか？
得もない人間と関わろうとする理由が。

「真也、ご飯だぞ。」

「ん？あぁ、そうか。」

思った以上に時間が経っていたようだ。

気がつけばテーブルには三人分の食事が並んでいて、大きめのハンバーグが美味そうな匂いと湯気を立てて皿に乗っている。

マカロニのサラダに白米、コンソメのスープ。

朝以来食べていないからか腹が鳴る。

「美味そうだろ？二人で頑張ったんだぞ？」

「はい、頑張っちゃいました。真也くんのお口に合えばいいんですが。」

「いや、流石に腹が減ったからな、ありがたく頂くとしよう。」

「まったく、素直に褒めることを覚えないか真也。」

「はっ、冗談じゃねぇ。」

「あはは…。」

俺は食卓に着くと、端を掴んで手を合わせる。

そんな俺を苦笑しながら見た二人は、それぞれ箸を持って微笑んでいた。

『いただきます。』

「それでは失礼します、今日はありがとうございました。」

夕飯を食べ終え莉乃姉と雑談していた御奈坂が、そう言って立ち上がった。

俺はソファーの上で首を動かし、御奈坂を見る。

「礼を言われることをした覚えがないな。」
「いえいえ、十分楽しませてもらいました。ではまた明日会いましょう。」
「あぁ、気をつけて帰るんだぞ。」

莉乃姉は見送るためか立ち上がるが、その手には荷物を持っていない。

「…おい莉乃姉、お前も帰れ。」
「何故だ!?やっと二人きりになる時間がやってきたというのに!?」
「二日連続で人の家に入り浸るな、いい加減おじさんたちも心配してるぞ?」
「それに関しては問題ない。既に連絡して許可は取ってある、真也なら心配ないとな!あっはっは!」
「俺の許可を得てないだろうが。」
「はっはっは、それは聞くまでもないだろう!」
「いいから帰れっつうの、鬱陶しいぞ。」
「真也くん、流石にそれは…。」
「…まぁ服も洗わないといけないし、やはり帰るとするか。」
「是非そうしてくれ、そして二度と来るな。」
「勿論、次はちゃんと一週間分のお泊りセットを持参するとも!」
「ざけんな!んなもん持ってきやがったら絶対入れねぇ。」
「そんなこと言ったってあたしには鍵があるからな、あっはっは。」
「クソッタレ。」

莉乃姉は楽しそうに笑った後、自分の荷物を肩にかける。

「さて、では帰るとするか。緋結華、家まで送ろう。」
「え、大丈夫ですよ!?私の家ってここからそんなに遠くないし、

何より莉乃さんの家って逆じゃないですか？」
「真也の友達を守るのもあたしの大事な勤めってね……だから気にするな、あたしは強いぞ？」
「それはそうかもしれませんけど。」
「御奈坂、諦めろ。」
「…じゃあ、お願いします。」
「うむ、心得た。じゃあな真也、また明日だ。」
「できることなら会わないことを祈るよ。」
「七つ集めると願いを叶えてくれるボールだってその願いは聞き届けてはくれないだろうな。」
「あぁ、忌々しいことに同意見だ。とっとと帰れ。」
「はいはい。」
「おやすみなさい真也くん。」

二人が部屋から出ていき、玄関が閉まる音がする。
そのまま鍵までかかる音がするってのは、やっぱり間違っていると思うが。
俺は静かになった部屋を見渡すと、そのまま電気を消してベッドに入った。
そうしただけで、一日の疲れがどっと押し寄せてくる。
目を閉じて、闇に沈む。
自分に腹が立つ。
今日一日、人並みの高校生を演じていた自分に。
友人と共に買い物をしたり、話したり、飯を一緒に食べたり。
そんな幸福な景色に、俺がいていいはずがないのに。
…クソッタレ。
目的を見失うな、桐生真也。
テメェの命は、そんな当たり前を過ごすためにあるものじゃないんだ。
ただ静かに、生き続けるだけでいいんだよ。

これ以上、他人と関わるな。
それはお前が一番言ってきた言葉だろう。
自分に言い聞かせる。
これほどの自虐は他にないなと思いながら、俺はそれを当然のように受け入れる。
俺の存在理由を、薄れさせないために。
いつまでも晴れない心のまま、俺は眠りの中に落ちていった。

Day. 4　決別の夜

生きるのに必要な赤い液体が、コンクリートの道路に広がっていく。
流れ出してはいけないそれは、失ってはいけない体温を一緒に持っていってしまう。
頼む、止まってくれ。
俺の身体も服も、赤い色に染まっていく。
そっと頬に触れた手。
俺は叫ぶ。
頼む、いなくならないでくれ！
音が消えていく。
姉さんの口が少しだけ動いて、何かを喋る。
だが俺には、それが何を伝えたかったのか判らなかった。
夢が終わる。
力なく笑う姉さんが、俺の網膜に焼き付いていた。

？

「おはよーございまーす。」
「……。」
「起きませんね真也くん。」
「真也は寝起きが悪いからな、目覚ましもかけないし。」
「ははぁ、だから莉乃さんがこうして毎朝起こしに来てると。」
「毎日こうでもないんだが、まぁ大抵は来ても寝てるな。」
「お寝坊さんなんですね、でもそこもまた素敵なギャップです。それにしても寝顔……無防備な真也くんって殺人的に美少女ですよね。」
「女のあたしですら嫉妬するくらいに肌も綺麗だし、流石は双子だな、真耶にそっくりだ。」
「真耶さんって真也くんに似てるんですか？」

「顔も殆ど一緒だよ、目つきだけが違うけど。」
「肌の色も白くて綺麗ですし、髪も全然生えてないです。」
「身長がこんなに高くなければ、胸のない女の子だな。」
「背が高くて美人で運動も頭も抜群なんて、憧れますね。」
「…やはり御奈坂はあたしのライバルになりそうだ。」
「ライバルって何ですか？」
「むぅ、強敵だ。あたしもうかうかしてられないな。」
「……あぁ？」
「あ、起きそうですよ。」

何だ？
騒がしいな莉乃姉、一人で喋って。
でももう起きる時間か…まだ眠いな、昨日も遅かったし。
でもまぁ起きないと、もう学校は休めないし。
目を開ける。
定まらないピントを合わせようと目を凝らす。

「……んぁ？誰だお前？」
「おはようございます真也くん。」
「あぁ、おはよう？」
「おはよう真也、朝ご飯食べるか？」
「あぁ、食べる……どぅわぁ！？」

慌てて飛び起きる。
一気に覚醒した意識は、漸く状況を理解した。
目の前には笑いを堪えようと蹲る莉乃姉と、何故か嬉しそうな笑顔を浮かべた御奈坂。
何でだ、何でこいつがここにいる！？
クソッタレ、いつもみたいに寝惚けてただろ俺。
莉乃姉ならもう仕方ないが、ぬあぁぁ、御奈坂まで見てたのか？

てか最近こんな起き方ばっかだ、無防備すぎるだろ俺。
「起きて早々飛び退いて頭抱えて、真也は大変だなぁ。」
「テメェ莉乃姉！何勝手なことしてやがる！」
「あーっはっはっは、お姉ちゃん朝から頑張っちゃった！てへっ！」
「この馬鹿姉、月の裏側まで片道旅行させてやっから表出ろ！」
「あのっ、喧嘩はやめてください！？」

御奈坂に止められて俺はベッドに座り、莉乃姉はソファーの陰に隠れてまだ笑ってがやる。
はぁ、何だよ朝っぱらから。
俺は頭を掻きながら、不安そうに俺を見ている御奈坂に目を向けた。

「で、これはどういうことだ？」
「えっとですね、私が今朝真也くんの家の下にいたら莉乃さんが丁度出てきて中に入れてくれました。」
「はぁ？そもそもなんでお前は下にいたんだよ、しかもこんな早くから。」
「あの……真也くんと学校行こうと思って誘いに来たんですけど、何時に出るのか判らなかったので5時に起きてきました。」
「5時だと！？…暇なのかお前は。」
「こら真也、せっかく来てくれたのになんてこと言うんだ。」
「う……悪かったな。」
「いえ、全然気にしてませんよ。寧ろ来て良かったなぁって。」
「は？」
「いえいえ、何でもないです。」

それきり俯いて背を向ける御奈坂。
おい待てその反応、俺は寝惚けて何かしたのか！？

昨日の朝の光景が脳裏に蘇る。
いやまさか、流石にそれは…。

「…なんて罪作りな弟だ。」
「おいコラ莉乃姉！何があったのか説明しろ、俺は何かしたのか！」
「いや何も。御奈坂が来た頃には穏やかに寝ていたよ、大丈夫だ。」

あぁ、なら良かった。
そもそも一緒に寝ていたわけでもないし、昨日みたいなことが起こるはずないか。
それに、夢にうなされる姿は見られたくない。
莉乃姉ならいいとしても、きっとみっともない姿だろうからな。

「さ、とりあえず朝ご飯を温めておくから、真也はシャワーでも浴びてこい。」
「私にもできることありますか？」
「そうだな…真也の背中でも流してやってくれ。」
「背中……ってえぇ！？」
「はぁ、御奈坂は大人しく座ってろ。」

赤面して挙動不審な御奈坂を放置して、俺は風呂場に行く。
脱衣所で服を脱いでいると、鏡に自分の顔が映り込む。
姉さんと同じ顔。
毎朝見るたびに思う。
これは、俺に対する罰なのかと。
目だけが違う顔、それは問答無用で過去の日々を叩きつけてくる。
いっそ自分で顔を殴り、形を変えてしまいたい。
それは逃げだと判ってるけど、時々どうしようもなく辛いんだ。
それに、きっと殴れない。
自分の顔に姉さんを思い出す奴が、それを殴れるはずがない。

ホントに弱いな俺は。
シャワーを浴びて戻ると、既に朝ご飯が並んでいた。
俺は黙って座り、手を合わせて食べ始める。
相も変わらず静かに食事を済ませると、夏音に餌を与え、三人揃って家を出た。
暫く無言で歩いていると、御奈坂が沈黙を破るように話し掛けてくる。

「木野塚町のカフェ？」
「そうです、今日の放課後一緒に行きませんか？」
「断る、俺は暇じゃない。」
「そんなこと言って、真也はいつでも暇人だろ？部活も委員会にも所属してないんだから。」
「暇なら行きましょうよ、奢りますから。」
「借りを作りたくないから結構だ。」
「そんなこと言わずに、昨日のお返しですから。寧ろ貸し借りはこれでチャラです。それに、部活がお休みなの今日しかないんですよ。」
「知るかそんなこと、俺には関係ないだろ。大体お前と行く理由がない。」
「友達なんですし、放課後に遊ぶのは普通ですって。そうだ、莉乃さんって今日は大丈夫ですか？」
「すまない、今日は生徒会の仕事があるんだ。行けないのは残念だが、まぁ二人で楽しんできてくれ。」
「だから俺は行かないって…。」
「はい、そうします、莉乃さんはまた今度一緒に行きましょう。」
「うむ、そうされてもらおう。」

勝手に話が進んでいく、俺の話は軽くスルー。
御奈坂は大人しい奴だと思っていたが、どうやらその認識は改め

る必要がありそうだ。

「じゃあ真也くん、放課後は一緒にカフェ・フラトレスにゴーですよ。」

「わざわざ木野塚町までか、面倒だな。何が違うんだよ他と。」

「そうですねぇ……店員さんは皆さん揃って武神です。」

「……は？」

「あ、マスターだけ鬼神って呼ばれてますね。」

「何だそりゃ、漫画の読みすぎか？」

「行けば判りますよ、皆さん面白い人たちなので。」

意味が判らない、武神とか鬼神って。

強いってことなのか？

呼ばれてるってことは自称ってわけでもなさそうだし、それが全員？

まさか全員揃ってゴリラみたいな筋肉野郎なのか、もしくは武術の達人が経営してるのか。

……ただのカフェに行くよりは興味が湧くな。

「仕方ない、どうせ断っても無駄なんだろ？」

「いえいえ、流石にそこまでではないですよ。」

「どうだかな。」

こいつのしつこさは嫌というほど体感してるからな、きっと放課後まで誘い続けてくるだろう。

なら早目に諦めて、すぐに帰る方法を考えた方が良さそうだ。

お喋りに花を咲かせる二人の後ろを、俺は欠伸をしながら歩くのだった。

？

「じゃあな二人とも、ちゃんと授業は起きてるんだぞ？」

「う、頑張ります。」
「はぁ、いいから早く行け。」
莉乃姉は手を振りながら階段を上がっていく。
俺と御奈坂は自分の教室を目指して歩き出す。

「そういや、今更だが離れろ。」
「え、何でですかいきなり。」
「お前が俺を友達と思うのは構わないが、他の連中は俺を嫌っているんだ、何を言われるか判らないだろうが。」
「……もしかして心配してくれてるんですか？」
「勘違いするな。俺は単に面倒が嫌いなだけだ、お前の心配しても仕方ない。」
「ありがとうございます真也くん。大丈夫です、誰も何か言ったりしませんよ、私が保証しちゃいます！」

ガッツポーズまでして笑いかけてくる御奈坂は、結局並んで歩き続ける。
ホントに大丈夫なのか？
友達を信用してるってのもあるだろうけど、多分こいつのことだから何も考えてないだろうな。
既にすれ違った何人かは俺たちを見て、まるでおかしなものを見るような目で振り返っている。
……やっぱおかしいんだよ、俺の隣をこいつみたいな奴が歩くのは。

「おはよー。」

御奈坂が元気よく挨拶しながら教室に入っていく。

「おはよう緋結華。」

何人かいた生徒が御奈坂に挨拶を返す。

何となく、この後の反応は予想できる。

仕方なく俺も中に入ると、やはり御奈坂に挨拶した生徒が、すれ違った何人かと同じ目を向けた。

何故御奈坂と不良が一緒に入ってきたのかと。

「ちょっと緋結華。」

「え、何？」

「こっちに来なさい。」

席に鞄を置く間もなく、御奈坂は何人かに呼ばれて廊下に連れて行かれた。

…だから言ったんだ、俺と関わってもろくなことにならないと。

まぁ自業自得だな、俺にできることはせめてなるだけ校内では関わらないことだけだ。

鞄を置いて時計を見る。

今朝は遅くまで寝てしまったから、もう屋上で暇を潰すような時間はない。

大人しく座って待つか、特にすることもないんだし。

ただ何も考えず、時間だけが過ぎていく。

予鈴が鳴り、担任教師が入ってきた。

結局御奈坂が教室に戻ってきたのは、予鈴が鳴り終わる少し前だった。

？

「おい桐生！」

昼休みになり、俺は飯を食べようと席を立った時だった。

教室中の生徒が振り返るような声で、俺を呼び止める声が響く。

目を向けると、峰岸が俺を睨みつけながら歩いてきていた。
「うるせえな、テメェに用はねぇよ。」
「お前になくてもオレにはあるんだ！」
「あ？目障りだ、消え失せろ。」

胸ぐらを掴み、峰岸の目を射抜く。
間近に見える瞳が、明らかに揺れた。
掴んだ胸ぐらからは激しく動悸する心臓の鼓動が伝わってくるし、唇も僅かだが震えている。
鬱陶しい奴だ、ふざけやがって。

「震えるくらいなら近寄ってくんな、ウザッテェ。」
「……聞いたんだよ。」
「あ？」
「桐生が御奈坂と仲良くしてるってな。」
「はっ、俺はそんなつもりないがな。」
「ふざけるなよ、何で御奈坂がお前なんかと。」
「それは本人に訊けよ、俺に絡むのはお門違いだ。それとも、一昨日の仕返しでもしたいのか？」
「そんなつもりはない！」
「なら退け、何度も言わせんな。」

峰岸を突き飛ばすと、一瞥もせずに歩き出す。
「俺に何を言いたいのか、次に絡むときはちゃんと決めてからにするんだな。」

教室の誰もが峰岸を心配そうに見守る中、俺は教室を出ていく。
気分はあまり良くない、忌々しさだけが胸に残る。

御奈坂の予想は当然のように外れ、俺の予想通りに厄介事が舞い込んだ。
悩むまでもなく、誰がどう考えても判る話。
俺と関われば、良い気分になる奴は何処にもいないんだ。
この学校で余計な手間をこさえたくなければ、絶対に俺と関わるべきじゃない。
峰岸は無駄に怖い思いをして、御奈坂は友達に忠告を受けた。
正しいのは忠告をした友達の方だ。
俺をいないかのように扱えば、少なくとも関わらなくて済む。
俺に近寄らなければ、嫌な気分にされることもない。
俺は、触らなければ害の少ない猛毒だ。
間違って近寄り、不運にも触れてしまったなら、清めなければ。
御奈坂の友達がそうしたように、考えを改めさせ、二度と触れないように説得する。
これで御奈坂が俺から離れてくれたなら、寧ろその友達には感謝してもいいくらいだ。
峰岸もこれっきりにしてくれればいい、そうすれば誰も傷つかずに済むんだから。
もう食欲はない。
なら授業ギリギリまで、誰も来ない所にいよう。
…体育館裏？
見事なまでに不良の居場所として相応しいが、あまりに陰湿な場所だしなぁ。
だが今回はその陰湿さにも感謝しなければならない、お陰で人が近寄ることは皆無だろう。
仕方ないな、他に当てもないし。
靴を履き替えて外に出ると、校舎に沿って体育館裏に向かう。
昼休みにまで練習する部活はないようで、この時間はとても静かだ。
目的の場所に着くと、湿った土と雑草の上を中ほどまで進む。

適当なコンクリートブロックを見つけて座る。
建物裏特有の湿った空気が、ゆったりと流れていく。
肌にまとわりつくような空気は、あまり好きじゃない。
森の中を歩くような清涼さがまるで感じられない、ただひたすらに陰湿で暗い雰囲気だ。
雑踏を指で弄りながら、鼻歌を歌う。
こんな場所には似つかわしくない歌詞だけど、それでもつい口から零れる。

「懐かしい声、耳に残ってる…。」

姉さんがよく歌っていた歌。
誰の歌だったのかも、全部を知ってるわけでもない。
ただ歌詞と同じように、懐かしい声は今でも耳に残っている。
俺を待っている時や、気分がいい時、姉さんが口ずさむメロディ。
ボーイッシュだった姉さんが一番穏やかな微笑みでいる貴重な瞬間でもあった。
天真爛漫を絵に描いたような人だったからな。
いつも元気いっぱいで、爽やかで、朗らかに人生を楽しんでいた。
きっと姉さんの目には、この世界でさえも輝いて見えていただろう。
人を疑うことをしなかった姉さん。
困っている誰かのために奔走し、助けを求める者のために手を差し出す。
そんなことを当然のようにできる人だったんだ。
……何で俺を助けたんだよ、姉さん。
皆に好かれていた姉さんの方が、俺なんかより生きてる価値があっただろう。
姉さんに告白しようとしてた奴だってたくさんいたんだぞ。
……クソッ！

拳を握りしめ、思いっきり壁を殴りつけた。
鈍い音と痛みが響き、何かが抜けていく。
それが怒りなのか悲しみなのかは判らない。
でも、頭は冷静さを取り戻した。
拳を見ると、僅かだが血が滲んでいる。
自分を保つための自傷行為。
生きていたくないくせに死ぬのは怖いから、こうやって痛めつけて、みっともなくこの世界にしがみつく。
左手首に着けているチェーンブレスレット。
その下には、薄れているがリストカットの跡がある。
独りになったばかりの頃、死に損なった証拠。
自分の弱さの証を、姉さんの形見で隠す。
結局俺は、生きるために姉さんを利用してる。
誰もが自分の損得を考えて他人を頼るが、だとしてもその対象は生きている人間だ。
俺は、もういない人さえも利用して生き長らえている。
こんなクズみたいな人間が、誰かを犠牲に生き残っているなんておかしい。
まるで笑えない最低の冗談だ、反吐が出る。
本当に、世界は狂っている。

「まさかこんな所にいるとは、流石は並木高校最恐の不良ですね。」
「あ？」

不意に声をかけられて振り返る。
体育館の陰になっていない所に立っていたのは、小柄な少年。
まるで女みたいなそいつは、ピンと伸ばした姿勢で歩いてくる。

「テメェ、何か用か？」
「テメェとは失礼ですね、ボクには逢坂龍矢という名前があるんで

す。」
「だからどうした、非礼を詫びる仲でもねぇだろうが。」
「そうですね、僕も貴方に名前を呼ばれるのは不愉快です。」
「はっ、判りやすい。テメェから恨みを買う覚えはないが、その態度だけで十分だ。用ってのはつまり、喧嘩を売りに来たんだろう？」
「野蛮な人はこういう時に便利です。余計な手間も要らずに、こうしてすぐに乗ってくる。」
「野蛮かよ。はっ、何も原因が判らない相手に喧嘩をふっかける方もよほど野蛮だがな。」
「それくらい、言われなくても判ってますよ！」

明らかな怒気を孕み、逢坂が俺を睨む。
……見た目に反した圧迫感だな。
俺の前まで歩いてくると、見上げながら逢坂は言う。

「剣道場に行きましょう、そこで勝負です。」
「見た目と違って狡賢い奴だな、テメェの得意分野で勝負ってか？」
「いいえ、剣道ではありません。」

言うと逢坂は、この近距離で蹴りを放ってきた。
それも、真下から顎を打ち抜く軌道で。
俺は咄嗟に反応すると、僅かに身体を反らして躱す。
チッ、そういうことか。

「貴方の本分はこちらでしょう？」
「そうか、テメェの元も剣術ってわけか。」
「ボクの家は代々剣術を極めるために鍛練を積んできた一族です。そして我が流派の根底には、相手を倒すという目的がある。剣道とはそもそもの成り立ちからして違う。」
「刀も使って体術も使う、頭が固くて刀しか使おうとしない戦い方

よりはよほど合理的だな。」
「それは素直に褒め言葉として受け取っておきましょう。」
振り上げた足を下すと、逢坂は黙って剣道場へと足を向けた。
その背中は、着いて来いと俺に告げている。
どんな理由があろうと、ここまで剣士に挑発されたら乗らないとな。
それに丁度いい、こいつは中々の実力者だ、少なくとも本気で戦えるくらいには。
八つ当たりではないが、身体を動かせば少しはこの心の暗雲も晴れるかもしれない。
俺は一定の距離を保ちながら、逢坂の後に続いた。
?
剣道場の鍵を逢坂が開けると、二人とも無言で中に入る。
相変わらず静まり返った剣道場は、まさに喧嘩にはうってつけの状況だ。
誰かが来る可能性はないでもないが、昼休みにまで練習に来る生徒はあまりいない。
逢坂は奥の倉庫から竹刀を二振り持ってくると、片方を俺に手渡した。
まさか二日連続でここに来るとは思わなかったな。
冷たい板張りの床と、停滞しつつも研ぎ澄まされた静謐な空気。
道場でしか味わえない、とても落ち着いた気持ち。
荒ぶった心も、少しずつ静寂を取り戻す。
「…とっとと始めるぞ。」
「言われずともそうしますよ、昼休みはそれほど長くない。」
互いに竹刀を構える。
俺は片手で、逢坂は両手で。

もう余計な言葉はいらない。
どちらかが竹刀振るったその瞬間から、この喧嘩は幕を開ける。
剣術の戦いに審判は不要。
どちらかが動けなくなるか、明らかに致命傷と判断できる一太刀を浴びせるか。
殺し合いと同じだ。
違うのは本当に殺すわけではないのと、武器が竹刀であるということだけ。
そういう意味では、これは喧嘩なんだ。
刹那、視線が交差する。
次の瞬間、凄まじい速さで踏み込んできた逢坂が、俺の肩に向かって竹刀を振り下ろしていた。
チッ、マジでやるなこいつ。
でも速いが躱せる、動きも単純だ。
意識を集中して風に乗る。
僅かに前へ、緩やかに踏み出す。
身体は逢坂の横へ抜け、そのまま無防備な背中へ右手の竹刀を叩き込む。
だが逢坂は振り下ろした竹刀の軌道を変え、まるで月を描くような動きを持って俺の竹刀を弾いた。
間髪入れず、同じ軌道で回し蹴りを振るう。
逢坂も上手く躱しながら、俺に向かって竹刀振るい、拳を突き出す。
一連の動作に淀みはなく、鍛えた身体は命令の一つ一つを着実に遂行していく。
互いに有効打はない。
俺の攻撃はまるで軽業師のような動きで逢坂に躱され、逢坂の攻撃は俺が予想して躱す。
拳は相手の動きを殺すための爪、竹刀は相手を倒すための牙。
ダンスを踊っているようだ。

絶え間なく攻撃を続けるには、やがて円の動きに変わっていくこととなる。
攻撃の軌跡を視覚化できるなら、今頃は流線型の絵画が出来上がるだろう。
時に大きく、時に小さく、場所を変えながら軌跡を描く。
静寂に満たされていた剣道場には、竹刀を振るう風の音と、踏み込む際の足音が響いている。
静謐な空気も、今は熱を帯びているようだ。
自然と身体は動く。
始まりは最悪だったのに、今は清々しささえ感じている。
自分の技が当たらない。
ならばと動きを変えて、攻撃を連ねていく。
いつの間にか、逢坂は笑っていた。
こんなにも本気で戦えるのは久し振りだ。
それはきっと、逢坂も同じなんだろう。
身体を動かすのは気持ちいい。
それが本気であればあるほど、身体はそれに応えて従順に動き出し、思考はスイッチが入ったように稼働率を上げていく。
戦いこそ生き物の本能であるかのように、より激しく獲物を狩りたてる。
互いにすれ違いざまの剣撃、振り返る動作での反撃。
高く乾いた音が木霊する。
一旦距離を離して、僅かばかりの小休止。
逢坂の呼吸は乱れていた。
俺も意気は荒いが、動きが最小限な分だけ余裕がある。
いつまでも終わらない戦いはない。
どんな曲もいずれは終わり、曲が終わればダンスも終わる。
そろそろ終曲だ。
なら、俺が出せる全てを見せよう。
原因はどうあれ、この貴重な時間を作ったのは逢坂だ。

出し惜しみなんて、こいつ相手なら必要ない。
「…逢坂、もう一本竹刀寄越せ。」
「はぁはぁ……やはり貴方は二刀流でしたか？」
「あぁ、気づいてたみたいだな。」
「拳の動きに違和感がありました。これほど長く戦い続けていなければ気がつかない程度の違和感ですが。」
「…流石だな、認めるよ。……お前は俺の敵だ。」
「わたしも、敵である貴方を倒しましょう。」
「……わたし？」
「いや……ボクも誓います、必ずや貴方を倒すと。」

逢坂は素早く倉庫からもう一振り竹刀を持ってくると、俺に竹刀を手渡す。
それを左手に持つと、二刀流の構えになる。
あぁ、懐かしい感覚だ。
強い奴に勝つには武器を二つ持てばいいだなんて理由で始めた二刀流だったが、存外上手くいったみたいだな。
さて、小休止は終わりだ。
「終曲（フィナーレ）を飾るに相応しい舞踏を見せてやるよ。」
「ふふ、踊り疲れて倒れないでくださいね。」
「お前こそ、俺に動きについてこられるのか？」
「勿論負けません……いきます！」

合図と同時に踏み出す。
俺の一刀と逢坂の一刀がぶつかり、派手な音を立てる。
すかさず俺は空いた方の竹刀を逢坂の胴に放ち、逢坂はそれを屈んで躱しつつ足払いをかけてきた。
僅かに跳躍、二刀を以て左右から振り下ろす。

転がって避けた後、逢坂が叫ぶ。

「ボクの本気、受けてもらいますよ！」

体勢を立て直した逢坂から、とてつもない速さの連撃が放たれる。
竹刀が音を立てて向ってきたと思えば、既に逆側から蹴りが飛んできている。
速さだけなら俺よりも速いかもしれないが、威力では俺が上だ。
両手の竹刀でその猛攻を捌きつつ、更に追撃まで入れていく。
逢坂も竹刀と足で上手く捌きながら、次々と攻撃を加えてくる。
もはや動きが複雑すぎて、あの足捌きでは躱しきれない。
竹刀の立てる音はまるで拍手のようで、強く激しく木霊する。
どれくらい時間が経ったのだろう。
永遠のように長い三拍子。
互いの全力が奏でる舞踏曲（ワルツ）は、今この時に生まれ、消えゆく。

「俺もいくぞ！限界まで速く重く壮絶に打ち砕く！」
「くっ……まだ速く！？」

心臓の猛りよりも強く、循環する血流より速く。
より大きく竹刀を振るい、遠心力を利用した広範囲の薙ぎ払い。
渾身の一撃で、逢坂の竹刀を弾き飛ばした。
離れた場所で転がる竹刀と、突きつけられた竹刀の切っ先。

「はぁ…はぁ……ボクの…負けですか？」
「俺の勝ちだな。」

腰が抜けたように座り込む逢坂は、竹刀を納めた俺を見上げる。
その目にはもう、一切の戦意がなかった。

「もう満足か？」
「ボクは負けました、だからもう何も言えません。」
「そうかよ。なら、俺に喧嘩を売った理由を聞かせろ。」
「……それは貴方が緋結華さんを悲しませたから。」
「は？」
「貴方は先日、緋結華さんに酷いことを言いましたね？」
「……あぁ。」
「関わるなとか鬱陶しいとか、随分酷い台詞だと思います。」

俺は何も言えない。
それは紛れもなく事実で、俺が御奈坂にした仕打ちは非難されて当然のことだ。

「でも緋結華さんはボクにこう言いました。……どうしたら桐生くんは友達になってくれるのかと。」
「……。」
「ボクは緋結華さんにとてもお世話になりました。この街に来た時から学校の生活まで、知り合いもおらずに右往左往していたボクを助けてくれた。」

御奈坂がやりそうなことだな。
困っている奴がいれば、見過ごしたりはできないだろうから。

「そんな緋結華さんが冷たくされても友達になろうとした貴方に、ボクは怒りを抑えられなかった。そこまでの価値がある方なのか興味も湧きました。」
「……俺にはそんな価値なんてないさ、御奈坂がそう言っているだけだ。」
「そうでしょうか？ボクも今日戦ってみて、貴方には何かを感じましたよ？言葉にはできませんが、強い意志のようなものを。」

「はっ、そんな大層なもんねぇよ。」
「刃を交えたからこそ感じ取れるものもあります。はっきりと判るものでもないでしょうけど、それは確かにあるんです。」
「……俺はただ生きてるだけだ。目的も信念もなく、立ち止まったままだ。お前や御奈坂が言うほどの人間じゃない。」

自嘲気味にそう呟くと、壁際まで歩いていって座り込む。
竹刀を床に転がして、ふと時計を見た。

「もう授業始まってるじゃねぇか。」
「そうですね。」
「知ってたなら言えよな。」
「仕方ないでしょう、ボクもさっき気づいたんですから。」
「はぁ…もう戻るのも目立つしサボるかな。」
「普段から思いっきり目立ってますけどね。」
「……。」
「まぁいいでしょう、ボクもここにいます。」

逢坂は俺の隣に歩いてくると、同じように壁に寄りかかって座った。

「は？お前は教室に戻れよ優等生。」
「…なんですか優等生って。」
「深い意味はないが、お前って人前じゃ優等生気取ってるみたいだからさ。」
「誰が言ってたんですか？」
「莉乃姉は普段は大人しく真面目だみたいなこと言ってたな、俺はそうは思えないが。」
「何故ですか？」
「真面目で大人しい奴が、俺と会う度に喧嘩を売ってくるはずがな

い。」
「む……うん、その通り。僕は別に真面目でもないし、大人しくもない。本当はもっとはしゃいだり騒いだりしたいよ。…普通に。」
少し寂しそうに笑いながら、逢坂は剣道場を見ている。
思い出しているんだろう。
この場所で、他の部員たちにそんな印象を与えてしまう自分の姿を。
「目立たないように丁寧な言葉遣いをして、静かに騒がず淡々とした学生生活を送る。やっぱ辛いなぁ、こんな生活は。」
「何か理由でもあんのか？」
「そうだね……誰だって怒られないようにできるならそれに越したことはないってことだよ。昔から続く武家って色々大変なんだ。」
「はっ、そりゃ俺とは縁のない世界だろうな。」
想像でしか判らないが、きっと厳しいしきたりとかあるんだろうな。
丁寧な言葉遣いをしろだとか、みっともない姿を晒すなとか。
素のこいつなんだろうな今は、口調も砕けた感じになってるし。
「にしても、御奈坂はおかしな奴だな。」
「はい？」
「俺やお前みたいに、なるだけ人と関わらないようにしている奴と友達になりたがるんだから。」
「確かに変わってるよね、お陰で救われたのも事実だけど。」
「俺はお陰で剣道野郎に喧嘩売られたがな。」
「もういいでしょそんなことは。あんまり引きずるとしつこいって思われるよ？」
「何で売ってきた張本人が偉そうな態度なんだよ。」

「……ごめんなさい。やりすぎだったと反省してます。」
俯いて謝罪する逢坂。
…ったく、面倒な野郎だな。
「まぁもう別にどうでもいい、お前が納得できたならな。」
「それは大丈夫、少しは安心できたから。ボクを倒せるなら、大抵の奴から緋結華さんを守れる。」
「別にお前が守ればいいだろ、そもそも俺が守らなきゃならないわけじゃない。」
「いえ、きっと緋結華さんは貴方に守ってほしいと思ってるよ。」
「何でそうなるんだよ。」
「…はぁ、貴方はいつか大変なことになりそうだね。」
「はぁ？」

意味が判らないな、何のことを言ってんだ？
それに大変なことにはしょっちゅう遭ってる気がするんだが。
御奈坂と話すようになってから莉乃姉は更に五月蠅くなったし。
最近じゃ無駄に色気を使った弄りか多いし、人前で好きだとか連呼しやがるし、既に結構大変だ。
エスカレートしたらそれこそ寝込みを襲われそうだ、立場が逆な気もするが。

「そういえば、貴方は小湊部長と同棲してるって聞いたけどホントなの？」
「普通に考えたらんなわけねぇだろうが。」
「いや、あんなに求愛されてるのを見たら普通にそう考えるよ。」
「……。」
マジで止めさせよう、聞き入れる確率は限りなく低いが。

しかし同棲とまではいかないが半分くらいは当たってるからな、あながち間違いでもないのがマズい。
莉乃姉が俺の家の鍵を持ってることまで知れたら悲惨だ、教師の耳に入れば呼び出しが確定する。
しかも片やこの学校の生徒会長様だ、呼び出されて職員室で説教なんて笑い話にもなりゃしねぇ。
後できつく口止めしとこう、唐突に生徒会役員選挙にならないように。

「昨日の騒ぎの後で何人かの女子が小湊部長に質問してたよ、あの男の人とどんな関係かってね。」
「ただの世話焼きな幼なじみだよ、俺たちのな。」
「俺たち？昨日話してた真耶って人ですか？」
「…よく覚えてんなお前。そうだ、俺の姉さんだ。」
「姉弟なのに離れて暮らしてるんですか？」
「……お前って質問が好きなのか？」
「う、そうじゃなくて、こういう風に人と話すことってあんまりないからつい。」
「へぇ、俺よりは無難に社交性あると思ってたが意外だな。」
「実はそうでもないんだよね、ボク人見知りだから。」
「俺とは普通に喋ってるじゃないか、しかもタメ口で。」
「貴方相手だと何故か落ち着いてるんだよね、本気で戦えたからかな？でもそっか、緋結華さんと同い年なんだから先輩だ。ごめん、敬語の方がいい？」
「いや、別に構わねぇよ。つか、もう話すこともないだろ？」
「え……う、うん。」

少し目を伏せて頷く逢坂。
何で寂しそうな顔をすんだよ。
…ホントに普段から誰とも話さないんだろうなこいつ。

でもなぁ、これ以上俺と関わる奴を作りたくないんだが。
まぁ男だし、強いから守ったりする必要もないのか。

「まぁよく考えたら御奈坂と一緒にいることが多いならまた会うこともあるってことか？」
「うん、そうだと思う。だからその……良かったら…友達に。」

何か最近この手の勧誘が多いな、流行ってんのか？
俺の周りの状況も変わってきて、人と接することが増えてきた。
好ましい流れとは、やっぱり言えない。
俺の周りに人が増えるだけ、守るべき人が増えるのだから。
御奈坂との時も考えたことだ、自分にそれだけの力があるのかどうか。
俺はまだ友達という者たちを作るべきじゃないかもしれない、御奈坂とそうなったのも間違いかもしれない。
でも俺が求める強さが、もしかしたら今のままでは手に入らないとも思う。
そう思えるように、少しだけ変わった。
人間関係から逃げていたら、本当の意味での強さは判らない。
それを判ってはいる、けど…怖さが心を締め付ける。
警笛を鳴らすように、間違いを犯そうとする思考を迷わせ、変えようとする。
言い訳ばかりだな。
でも、今は言い訳でいい。
積極的に関わるわけじゃない、会ったら話す、それだけなんだから。
ほんの少し、話す相手が増えるだけだ。

「会ったら少し話すくらいなら、まぁ構わない。お前がそれでいいなら、だけどな。」

「うんっ……ありがとう、凄く嬉しいよ！」
「う…。」

本当に喜んでいるのか、逢坂は綺麗な笑顔を浮かべた。
男とは思えないくらいにそれは無邪気で、輝いている。
クソッ、一瞬目を奪われた。
ありえねぇ、男だぞこいつは。
俺にそっちの趣味はないはずだ、じゃなきゃ首吊り用のロープを探すところだ。

「どうしたの？そんなに頭抱えて、やっぱりボクと友達は嫌だった？」
「い、いや…そうじゃなくてな、別にお前が悪いとかではないんだ。……女みたいって、言われたことないか？」
「え…そんなにそう見えますか？」
「いや気のせいだ、そんなはずがない。気の迷いだ、俺はノーマルなはずだ。」
「何の話！？」

よし、忘れよう。
切り替えって大事だよな、運動して疲れたんだ。

「そういえばさっきこの町に引っ越してきたみたいなこと言ってなかったか？」
「うん、ボクの実家は別のところにあるよ。今は小峰の屋敷にご厄介になってるんだ。」
「小峰って昨日俺に知ってるかどうか聞いてた名前だな。」
「……。」
「ん？どうした、急に黙って。変な質問だったか？」
「ううん、流石だなって思ったんだ。」

「何がだよ。」
「常に二年生の学年トップを維持する理由が判った気がした。だってその質問ってどたばたしてた時のものでしょ？そんな瞬間でもちゃんと覚えてるなんて凄いよ。」
「はっ、どうでもいいだろ。それで、どうなんだ？」
「うん、小峰宗十郎。武神って呼ばれてる剣豪で、この街で剣術道場を開いてるんだ。ボクは訳あってその小峰の本家に居候してる。」
「わざわざ引っ越してくるほどの訳があるのか？」
「……ごめん、それは言えないや。とりあえず他の武家の技術を学びに来たということで。」

申し訳なさそうに頭を下げられる。
つまり理由は他にあるってことか。
まぁ軽い質問だし、別に構わないか。
あまり深く相手を知って厄介事に首を突っ込むのは御免こうむる、余計なことは知らなくてもいい。
自分のことを話すわけでもないのだし、聞かれたくないことなど誰にでもたくさんある。
それに、あまりいい予感がしない。
気まずくなった空気を払うように、俺は立ち上がって時計を見た。

「おい、そろそろ行くぞ。もう授業が終わる頃だ。」
「あ、そうだね。ちょっと待ってて、竹刀片付けてくるから。」

逢坂は立ち上がって三本の竹刀を抱えると、小走りで倉庫に走っていく。
俺はそれを確認すると、黙って剣道場を出た。
さて、次の授業は古文だったな。
少し早足で校舎に向かう。
早く行かなければ、先に出てきた意味がない。

だが予想に反して、逢坂は走って追いかけてきた。
チッ、素早いやつだ。

「何であっさり置いていくの！？」
「あまり俺と一緒にいないほうがいい。」
「どうして？」
「俺と一緒にいるとこを誰かに見られたら、互いに面倒なことになるからだ。」
「……あぁ。」

心当たりがあるようで、逢坂は苦笑しながら頷いた。

「俺が御奈坂と関わった翌日に、朝から二人も喧嘩を売ってきた。お前と関わったら、今度は誰が喧嘩を売ってくるんだろうな。」
「ボクは友達いないから誰も文句は言わないよ。」
「……素直に喜べない台詞だぞそれ。」
「だから気にすることないよ。それよりさ、ボクの前に喧嘩売ったのって誰？」
「あ？…確か峰岸って馬鹿、ウチのクラスの。」
「あぁ峰岸さんか、それは売られても仕方ないね。あの人、緋結華さんに好意を抱いてるらしいから。」
「お前と同じじゃないか。」
「ボクのは違うよ。どちらかといえばボクはライク、あの人はラヴだから。」
「あっそ。」

どちらにしても俺が喧嘩売られるのは変わらないってことか、まったく面倒な話だ。
この調子だと、あと何人に文句を言われるのか判ったもんじゃないな。

ま、それだけあいつが周りから大切だと思われてるってことなんだが。
昇降口に着くと、そこで逢坂とは別れた。
俺が階段を上るまで元気よく手を振っていたが。
…キャラが変わりすぎじゃないか？
まぁ元々はああいう性格なんだろうな。
三階に着くと予鈴が鳴り、全ての教室が騒がしくなる。
各教室から生徒が出てきて、廊下で他のクラスの連中と喋りだす。
だが俺が廊下を歩いてくることに気づくと、皆慌てて道を開けた。
いつものこと、もう気にならない。
寧ろ楽でもある、関わらなくて済むのだから。
目を逸らされて大きく開いた廊下を歩いて、自分の教室を目指す。
すると、教室の方から御奈坂が出てきた。
廊下に出た途端に周りを見回して、誰かを探しているようだ。
俺と目が合うと、心配そうな顔をして走ってくる。

「真也くん大丈夫！？」
「今は話し掛けるな。」
「え、どうして？」
「周りに人が多い、後で話すから教室に戻れ。」
「わ、判りました。」

深刻な話だと思ったのか素直に頷く御奈坂。
御奈坂が教室に入るのを確認すると、俺は廊下の壁に寄りかかって時間を潰す。
予鈴が鳴ってから戻れば、御奈坂が俺を探しに出たとは思われにくいはずだ。
あいつも友達に何か言われてたみたいだし、できればこれ以上悪い噂は広めたくない。
俺が原因で御奈坂の立場を悪くしたくないし、こうすれば互いに

余計な手間を作らなくて済むだろう。
廊下にいた連中は俺からなるだけ離れていく。
これでいい、俺は独りでいいんだ。
俺と関わらないことが、誰も嫌な思いをしなくて済む方法なんだから。
予鈴が校内に木霊し、俺は教室へと入っていった。

放課後。
俺は荷物を持つと、速やかに教室を出ようと歩きだした。

「真也くん。」

しかしあっさり御奈坂が立ち塞がって妨害してくる、どうやら逃げられそうにない。

「チッ、本気で俺を連れていくつもりか？」
「ちゃんと約束したじゃないですか。」
「それより、話すならここはマズい。」

既に何人かがこちらを見て何かを囁き合っている。
ちゃんとこいつに言わないとな、何より御奈坂のためにも。
首を傾げたままの御奈坂を無視して、俺は教室を出ていく。
御奈坂はまだ鞄を持っていなかったから、早足で行けば距離を離せるだろう。
昇降口で靴を履き替えると、校門を出る。
よし、ここまで来れば多分大丈夫だろう。
後ろを振り返ると、慌てて追い掛けてくる御奈坂が見えた。
息を切らせて俺の傍まで来ると、何事かと疑問に目を染めている。

「今日はどうしたんですか？」
「……はぁ、お前ってあまり気にしないのか？」
「え？」
「まぁいい、歩きながら話すとしよう。んで、例のカフェってのはどっちだ？」
「あ、はい、こちらです。」

御奈坂が歩きだし、俺はその隣に並ぶ。
莉乃姉以外と二人並んであるくのはいつ以来だろう。
昔は姉さんと二人か莉乃姉も合わせて三人、今は莉乃姉だからな。
隣を見ると御奈坂が若干不安そうにしながら歩いている。

「あのさ御奈坂。」
「は、はい！？」
「いや、そんなに堅くならなくていいが。……俺に関わるなとはもう言わないが、学校にいる間は控えろ。」
「何でですか？」
「俺は不良で、お前はクラスでも友達が多いだろ？俺みたいな奴と関わってると知られたら、今日みたいに厄介なことになるかもしれない。」
「もしかして峰岸くんですか？」
「ついでに言えば逢坂もだ。」
「龍矢くんまで！？」
「あ…まぁあいつのことはケリがついたからいいんだ。……とにかく、もう学校では話し掛けるな、その方が互いに嫌な思いをしなくて済む。」
「……嫌です。」

御奈坂がそう言って立ち止まる。

「おい、話を聞いてたか？」
「聞いてました、でも嫌なんです。」
「あのさ、今日だって朝から友達に注意を受けたんじゃないのか？」
「受けましたけど、きっぱり言いました。私は真也くんとホントに仲良くなりたいんですって。」
「くっ…。」

何て恥ずかしい台詞を言いやがるんだこいつは。
純粋な思いは伝わるって言うけど、御奈坂のはまさにそんな感じだ。
言葉の一つ一つに嘘も誇張もない。
自分が感じ思ったことをそのまま言葉にしている。
しかもこいつ自身が信じられないくらいお人好しなせいで、そういう思いが言葉に乗って伝わってくるんだ。
それでいて意外に頑固だ、俺にとって最悪な相性の組み合わせだよ。

「どうなっても知らないからな。」
「どんとこい、ですよ。それより真也くんの方が心配です。」
「何故だ？」
「だって今朝から何度か嫌な思いをしたんですよね？私からも峰岸くんには言っておきます。」
「…まぁ、あいつが俺を敵視するのも判るからな。」
「はぁ、そうなんですか？」

この様子だとやっぱ知らないんだろうなぁ、まぁあいつを応援してやるつもりはないが。
木野塚商店街へ向けて、二人で歩いていく。

「そういえばそろそろ梅雨入りだそうですよ。」
「あぁ、もうそんな時期だな。」
「真也くんは夏休みの予定とか決めてるんですか？」
「いや夏休みって、気が早すぎないか？」
「そんなことないです！学生の本分が勉学とはいえ、やっぱり夏休みは楽しみなものですよ！予定を立てるのに早すぎるということはないんです！」

いつになく熱弁を振るう御奈坂。
こいつも結構遊びとか好きなんだな、剣道ばかりやってると思ってた。
カフェに入り浸ってたり、夏休みにワクワクしたり、人生楽しんでるって感じだ。
それでいて今時の女子高生らしからぬお人好しっぷり、やはり俺と友達になっているというのは腑に落ちない。

「そういえば、五時限目はどうしたんですか？真也くんがサボりなんて実は珍しいですよね？」
「あぁ……逢坂に喧嘩を売られてた。」
「えぇ！？ホントに喧嘩してたんですか！？」
「剣道場に連れてかれて竹刀でやり合った、意外に攻撃的だな。」
「普段は絶対そんなことしないんですけど、どうしていきなりそんなこと。」
「それだけお前のことが大事なんだろ。」
「私としては大事な人同士が私のせいで争うのが辛いです、話し合いで解決しましょうよ。真也くんがいい人だって、話せば皆判ります！」

いや、そこで可愛らしくガッツポーズされてもな。
俺はいい人ではないし、話しても伝わらないだろう。

「でも確か龍矢くんとは仲直りできたんですよね？」
「それどころか友達になりたいとまで言われたよ。」
「やったじゃないですか！おめでとうございます、私も嬉しいです！そうだ、今からでも呼びましょう！」
「おいちょっと待て…。」

そう言っている内に電話を掛け始める御奈坂。
まったく、流石は莉乃姉と意気投合するだけはある、勢いで動くところが似てやがる。
間もなくして繋がったのか、二言三言話して電話を切った。

「ふふふ。」
「その様子だとすぐに来るとでも言ったらしいな。」
「はい、全速力で来るそうです！三人でお出かけですね！」
「お前といると周りにどんどん人が集まってくるな。」
「賑やかでいいと思いますけど？」
「少なくとも俺は嫌だ、面倒事は御免だ。」
「そんなこと言わずに、楽しむのも大事なことですよ。」
「既に遠慮がなくなってきたよなお前。」
「少しでも多く私のことを知ってもらいたいだけですよ。」
「なら話せば良いだろ、別にお前の友達と会う必要はない。」
「真也くんが私の友達と仲良くなれたら絶対楽しくなる、幸せになれる、そう思うんです。」
「それを決めるのは俺だ、そして俺は迷惑だと言ってる。」
「でも龍矢くんなら大丈夫ですよね？」
「俺が平気かどうかなんて関係ないだろ、そもそも俺は俺に関わってほしくないんだ。」
「ボクは桐生先輩と仲良くしたいですよ？」
「うわっ！？」

突然の声に驚いて飛び退く。
そこにはまるで乙女のような微笑みを向ける逢坂が立っていた。
「テメェいつの間に！つか気配消して近づくな！」
「ちょっとした冗談だったんだけど、こんなに驚くとは思わなかった。」
「チッ、最初とキャラが違いすぎだ。」
「桐生先輩の前なら素の自分を出そうと思って。」
「ったく、俺をそんな特別視する意味が判らねぇよ。」
「無条件で信用できる友を作れってお祖父様に言われてるんだ、緋結華さんも友達なら信じるって言ってたし。」
「諸悪の根源はお前か御奈坂。」
「諸悪って。でも友達なら信じられますよ？」
「…お前はそもそも信じないって選択肢があるのか？」
「……あはは。」
「はぁ、もういい。」

頭を振って歩きだす。
賑やかになりつつあることに頭痛を覚えながら、俺はとっととカフェとやらに行ってすぐに帰ると誓った。

木野塚商店街は比較的大きな商店街だ。
八百屋や魚屋、肉屋や惣菜など、安くて新鮮な物が手に入ると有名でもある。
昔からあるものは廃れていく世の中だが、この商店街はいつも多くの人が行き交う憩いの場だ。
さりげなく広く作られた道の両側に並ぶ商店と、そこから聞こえ

てくる客引きの声。
そのどれもが老舗と言えそうなほど代々受け継がれてきた中に、そのカフェは建っていた。
カフェ、Ｆｒａｔｒｅｓ（フラトレス）。
明らかにそこだけ新しいと判る綺麗な外装。
木の壁に洋風の硝子窓、一見してよくある喫茶店だ。
薄いカーテンが閉められているようで、外からは中の様子が判らない。
正直な感想を述べるとすれば、怪しい。
テラス席もなく、ここだけ客引きもしていない。
ＯＰＥＮと書かれた板がドアノブに吊されていて、店の前にはメニューが一覧になった看板。
値段を見ると、それほど高いというわけではなく、寧ろ誰でも気軽に立ち寄れそうな良心的値段だ。
この値段でこの商店街にあれば、さぞかし昼時は繁盛するだろう。
隣の逢坂は、メニューを見ながら既に吟味を始めている。
御奈坂は常連と言うだけあって、メニューを眺める逢坂を見て微笑んでいた。

「どうですか真也くん。」
「どうもこうも、怪しい喫茶店にしか見えないんだが。」
「怪しいですか？」
「普通のカフェって外から中が見えるもんだろ。これじゃまるで、入ったら二度と出てこれないとこに続いてるみたいだ。」
「……真也くんの例えって的確ですよね。」
「は？」
「大丈夫ですよ、騒がなければ出てこれますから。」
「騒いだら出てこれないのか！？」
「真也くんってどれくらい強いですか？」
「は？……あぁ、刀を持っていればどうか判らないが、素手だと一

度に二十人くらいが限界だと思う。」
「あはは、きっとキヨシさんやホカゾノさんにも勝てないかもしれないです。」
「それが誰なのか判らないが、一体どんなゴリラだよそれ。」
「キヨシさんは槍で雷とか台風が起こせますし、ホカゾノさんは力が強すぎて現実を歪めるらしいですよ。」
「何だそのファンタジー、漫画の読みすぎか？仮にそれがホントだとすると、この中には化け物の巣窟ができてるってことになるぞ？」
「あながち間違いとは言えないところが面白いですよね？」
「そこで疑問符浮かべんな。」
「まぁまぁとにかく入りましょうよ。龍矢くん、行こう。」
「あ、はい。」

御奈坂は躊躇いなくその魔界への門を押し開け、中へと入っていく。
俺と逢坂は目を合わせて頷くと、意を決してそれに続いた。
扉に付いたベルが鳴り、来客を店員に知らせる。

「いらっしゃいませ……あぁ、緋結華か。」
「こんにちはマスター、今日も来ましたよー。」
「いつものアンチダイエットミルクティーで良いのか？」
「何ですかその身体に悪そうな飲み物は。」
「事実だろうが。あんな砂糖とミルクに紅茶を入れたような飲み物、割と甘いもの好きな馬鹿でさえ飲むのを躊躇ってたぞ。」
「女の子はすべからく甘いものが大好きなのです。」

御奈坂が親しげにマスターと話している間に、俺は店内の観察を始める。
中に客はいなかった。
しかし中は考えていた以上にモダンな雰囲気だ。

各所に配置されたアンティークな調度品は、欝陶しさを感じさせない。
客がゆったりとした時間を過ごせるように配慮され、変な威圧感がないように気遣われている。
五月蝿く感じさせない程度に流れる音楽は、有名なクラシックだ。
店内の照明は薄暗いが、それがまたいい味を出していた。
だが、おかしな物が各所に鎮座している。
入ってすぐ右の棚。
綺麗な陶器の小物の中に、明らかに異質な一つの鉄筒が立て掛けられている。
あれは……ショットガンか？
周りを見回すと、ライフル銃や長刀がさり気なく並んでいる。
それらが何故か妙な調和を醸しだし、それほど違和感を感じない。
下手をすれば気が付かない人がいるかもしれないほどに、上手く紛れている。
洋風なのか和風なのか、どちらをコンセプトにしているのかいまいち判らないが、一言で言い表わすなら間違いなくこれだろう。

「イカレてやがる。」
「それに関しては同感だよ。」
「はっはっは、面白いな。ウチのカフェに入って第一声がそれとはね、中々判ってるじゃないか少年。」

マスターがグラスを布巾で拭きながら笑いだす。
こいつが御奈坂の言う強いマスターか。
でも想像していたようなゴリラではなく、細身で長身の若い男にしか見えない。
鍛えられてるのは判るが、強い者独特の威圧感が感じられない。
俺が訝しんでいると、マスターは緋結華に問い掛けた。

「この二人は緋結華の友達なのか？」
「はい、そうですよ。こちらが真也くんで、そちらが龍矢くんです。」
「ボクは逢坂龍矢です、よろしくお願いします。」
「ほぉ、礼儀正しいな。俺は…とりあえずマスターとでも呼んでくれ。」
「はい、そうします。」
「で、そっちは？」
「馴れ合う関係じゃないだろ、互いの立場がな。」
「はっはっは、それはそうだ。じゃあキミって呼ばせてもらおう。さ、立ってるままなのもおかしな話だ、座ってくれ。」

マスターに促されてカウンター席に並んで座る。

「キミたちは何を飲む？」
「ボクはカフェラテを。」
「ブレンドのブラック。」
「畏まりました、少々お待ちを。」

てきぱきとマスターが珈琲を淹れ始める。
淀みないその動作は軽く、手際がいい。
知らず知らずの内に、俺はその動きを目で追っていた。

「珍しいかな？珈琲をこうして淹れるのを見るのは。」
「はっ、そういうわけじゃねぇよ。」
「そうか、勘違いだったのなら失礼した。そう熱心に見られていると緊張してしまう。」

軽口を叩きながらも、マスターは手を休めない。
否定はしたが、興味がないと言えば嘘になる。

洗練されたものは、例え自分にはできないことでも目で追ってしまうものだ。
俺は豆から珈琲を淹れようとは思わないが、やはり彼の動きは見てしまう。
素早く、それでいて丁寧な仕事で、俺たちの前には注文した物が並ぶ。

「さぁどうぞ、味は保証しよう。あと、これはサービスだ。」

飲み物と一緒に出されたのは、小さなクッキーが幾つか。

「わぁ、ありがとうマスター。」
「たまにはサービスくらいするさ。それは試作品だからまだメニューに載せてない、感想があれば聞かせてくれ。」
「凄いね、初めて食べれるお客さんだよボクたち。」

感想が代金代わりってことか、まぁ試作品ってそういうものだよな。
でも甘いのは少し苦手だ、特に洋菓子は。
激甘党らしい御奈坂仕様だったらとても食えそうにない、それだと他の客も顔をしかめるだろうが。
三人揃って、試しに一つ食べてみる。
クッキーは見た目以上に軽い。
甘さは控えめだ、これなら俺も食べられる。
サクサクと口の中で砕けて、溶けるように甘さが広がっていく。
チッ、普通に美味いな。
珈琲を飲むと、深いコクと程よい酸味。
このクッキーにも合う、悔しいが満足の組み合わせだ。
それは他の二人も同様だったようで、美味しそうにそれぞれを口に運んでいる。

マスターはその反応だけで十分だったのだろう。
何も言わずに微笑むと、自分の仕事に戻る。
御奈坂は激甘仕様のミルクティーを口に運びながら、マスターに問い掛けた。

「そういえば、他の四人は何処にいるんですか？」
「あいつらは休憩、裏で煙草でも吸ってんだろ。カオリは休みだから買い物に行くと言っていたな。」
「カオリさんには会えないんですね、残念です。」
「緋結華が来ると知ってれば早めに帰ってたかもな。」
「緋結華さん、誰ですかそのカオリさんって。」
「マスターの奥さんだよ、とっても優しくしてくれるんだ。」
「へぇ、夫婦で経営してるんだ。」
「まぁ他にも五月蝿いのが三人ほど混ざってるがな。」
「さぁーって客はいるかな？っているし！？」
「何だと！？この平日のアイドルタイムに客がいるだと！？」
「賭けは俺の勝ちだな、ほら金出せよ。」
「ヒロトのその能力ズルくないか？」

何だか不穏な会話をしながら、三人の男が厨房から出てきた。
一人は大柄でゴリラのように筋骨隆々の男、見るからに強そうだ。
もう一人は中肉中背の男、鍛えているのは判る。
最後の一人は女のように細く色白で、到底鍛えているとは思えない体格だ。
三者三様の彼らは俺たちがいようとお構いなしに金のやり取りを開始する。
直後、カフェの空気が変わった。
ピリピリと肌を焦がすような感覚。
先程までの穏やかな雰囲気は、まるで毒に蝕まれるように気配を変えていく。

御奈坂が席を立ち、入り口の方へと移動する。
俺と逢坂も、そのただならぬ気配に全身が警笛を鳴らした。
これは殺気だ。
それも常人の俺たちでさえ感じ取れるほどに濃密で、軽い吐き気を催すくらいに強い。
下手に感覚が鋭い者であったなら、たちまち動けなくなる。
俺たち二人も、御奈坂に習って入り口の方へと移動した。
発しているのは、少し前まで優しげな笑顔を浮かべていたマスターだ。
その双眸は冷たい光を放ち、静かに拭いていたグラスを置く。
彼は振り返ると、後ろにあった縦長の戸棚を開ける。
中から出てきたのは、中世の騎士が腰に携えていそうな西洋の剣。
静かに鞘から剣を抜くと、銀色に輝く刀身が姿を現す。
って、何でそこから出てくるんだ！？
それはどう見ても玩具には見えない、正真正銘の殺傷武器だ。
あんな物で襲われたら、鎧を着ていたとしても真っ二つに両断されてしまう。
御奈坂は見慣れたものなのか、手にはしっかりと激甘ミルクティーを持って、笑いと呆れが入り混じった表情でそれを眺めている。

「おい御奈坂、あれは何だ？」
「うーん、判りやすい言葉で表現するならそうですね……いつものお仕置きです。」
「いやいや緋結華さん、あれで斬ったら間違いなく死にますよ！？」
「あはは、多分大丈夫だよあの三人は。」

そう言った御奈坂は、ミルクティーを口に運ぶと頬に手を当てて悦に入っている。
かくいう俺と逢坂は気が気じゃない。
およそ戦場とは言えない場所で、ありえない光景が広がっている

のだ。
例え日頃から冷静さを保つことを心がけているとはいえ、流石にこれは想定外。
そもそも、クラスメイトに連れてこられたカフェでこんな殺戮ショーが始まろうとするのを誰が予測できるのか。
絶対的に何かが間違っている、ここは本当にさっきまでと同じ世界なのか？
マスターはゆっくりと剣を上段に構えると、三人に向かって歩きだす。
大柄な男と中肉中背の男はそれに気づいていない。
たまたまマスターの方を向いていた痩躯の男だけがマスターを見て、手元の札を見て、冷静に財布へしまうと全力で走りだした。

「おいヒロト何処行くんだよ！」
「休憩は終わっただろ？」
「……断罪。」
「え？ってギャァァァァァ！」

中肉中背の男が一撃の下に斬殺される。
隣の逢坂からは小さく悲鳴が上がり、俺も一歩引いた。
人が目の前で斬られたというのに、御奈坂は特に気にした風もなく眺めているだけだ。
マスターは斬り捨てた男に一瞥をくれると、残された大柄な男と向き合い笑顔を浮かべた。

「なぁ蛆虫野郎、テメェの墓には何て刻んでやろうか？」
「ちょ、兄さん落ち着いて話し合おう！ウチは悪くないんだ！」
「ほぅ、なら誰が悪いのか一応聞こうか。で、一体誰がそんな下らねぇ賭けを思いついたんだ？ここで死んでる愚弟か？それともとっとと戦線離脱したヒロトか？」

「あ、賭けを思いついたのはウチ。」
「吹き飛べクソゴリラぁ！」
「いやぁぁぁぁ！」

毛ほどの情けも容赦も感じられない極悪な剣は、消えたかと思うような速度で大柄な男を斬り刻んだ。
悲鳴が木霊し、しかしすぐに聞こえなくなる。
逢坂は怯えて俺に抱きつくと、俺の手を握って震えだす。
チッ、この状況はヤバい。
もし次の標的に選ばれてしまったら、この二人でさえ逃がせる自信がない。
珈琲を淹れていた時にはなかった圧倒的な威圧感が、あのマスターからは溢れている。
傍にいるだけなのに己が呑み込まれそうになる、全身の筋肉がその異質を許容できずに震えだす。
人を斬り刻んだマスターは、溜め息を吐いて剣を鞘へと納める。
そして俺たちの方を見て、不思議そうな顔をした。

「どうした二人とも、何かあったのか？」
「……近寄るな！」
「マスター、初対面の人前で暴れすぎですよ？」
「あぁすまない、ついな。でも安心しろ、こいつらは…。」
「ギャグコメ視点で見ないとこんなにもグロいシーンなのか、お兄さん完全に殺戮者だね。」
「いくらなんでもミンチは酷いよ兄さん、せめてスライスで止めてもらわないと。」
「……は？」

死んだはずの二人が、ごく当たり前のように立ち上がる。
どういうことだ？

確かに彼らはあの凶悪な剣で挽肉にされたはずだ、なのに何故今目の前で息をしている？
人として当然な疑問に頭を悩ませていると、死んだはずの男たちが俺たちに近づいてきた。

「やぁ少年、驚いただろう？だが！キミは何も見なかった、そうだよな？」
「あれはツッコミなんだぜ、だから深く考えちゃダメだ。」
「心の傷になる前に忘れたまえ、もしくは受け入れろ。ここじゃそれが当然で、理解の範疇を越えた出来事には目をつぶるのが正解だ、聡明そうなキミはその意味が判るはずだ。」
「ジャンルの違いってやつさ。この店の敷居を跨いだ時点で別世界って話。」
「詳しくは第一回武闘大会のウェブで！」
「世界の根源に抵触するような戯れ言は今すぐ止めろ、さもねぇとギャグじゃ済まないくらいに殺し尽くすぞ馬鹿共！」
『サー！イエッサー！』

わざとらしく敬礼までしてみせて、彼らは仕事に戻っていく。
世の中を上手く生き延びるには多少の嘘も許容しろってことが良く判る。
少なくともこの連中は、出来る限り敵に回さないよう気を付けよう。

「紹介が遅れたな。この背が低いのが俺の弟、キヨシだ。」
「お兄さん、余計な台詞が入ってるぜ！俺はキヨシ、あと少しでまた成長期が来るから期待しとけよ！」

何に期待しろと言うのか、とにかく不死身でテンションは高いことしか判らない。

「あ、兄弟なんだ。それにしては似てないね。」
「昔っからよく言われるよ、まぁウチは兄弟みんな似てないからな。」
「んでこっちのゴリラが……。」
「ヘイ兄さん、スタートからおかしいぞ？」
「何がおかしいのか、その容量の少ない脳ミソで考えられるのか？」
「ウチはゴリラじゃない……キングコングさ！」

いい笑顔で意味不明な台詞を叫ぶ男。
とりあえず二人とも馬鹿なんだろう、マスターも呆れてる。

「ウチはホカゾノ、ホカゾノ様と呼んでくれ。」
「丁重にお断りする。」
「テメェ表に出ろ！」
「一日に二度死にてぇのかゴリラ？」
「はっはっは兄さん、冗談ですともよ！」
「やれやれ。じゃあ最後にヒロトだが、ここで呑気にキミの珈琲を飲んでいるのがそれだ。」
「あ、テメェヒロト、自分だけ逃げやがったな！」
「俺は兄さんの攻撃受けたら普通に死ぬように設定されてるから、ホカみたいに化け物じゃないの。」
「おいヒロト、設定とか言うな。」

化け物じゃない？
冗談じゃない、いつからそこにいた？
今の今までそこにいることすら認識できなかったんだ、そんな気配遮断が人間に可能なものか。
逢坂も驚愕に目を見開いている、こいつも気づいてなかったんだろう。

チッ、化け物の巣窟かよこの店は。

「まぁ騒がせて済まなかった、とりあえず座ってくれ。新しい珈琲を淹れよう、今日の代金もこちらで出すよ、迷惑料だ。」
「はぁ。」
「今日も激しかったですねー。」
「緋結華さん、慣れすぎ。」

一応もう危険はなさそうだ、警戒はしておくべきだろうが。
またいつ彼ら曰くツッコミと呼ばれる殺戮行為が行われるか判ったもんじゃない。
この店に入った時点で、死して屍拾う者なしってわけだ。
新しく淹れられた珈琲や紅茶を飲みながら、暫く過ごしていた。
御奈坂の言葉は全て本当で、確かに騒ぎを起こさなければこのマスターは真面目にしている。
逢坂の質問攻めにも笑顔で答えていたし、口調も元に戻っていた。
他の三人もそれからは比較的大人しく、緋結華と談笑している。
ま、さっきみたいなのがなければ悪くない店だ。
問題点は多大に抱えているが、実害さえなければ無視できる。
むしろ、刀や剣が好きな奴なら好んで足を運ぶだろうし。
少し離れた席で談笑しているのを見ていると、いつの間にかマスターが逢坂の質問攻めから解放されて、同じように眺めながらたたずんでいた。

「キミは混ざらないのかい？」
「生憎と騒がしいのは苦手だ、それに場違いだからな。」
「ふむ、キミは何処にいようと独りなんだね。」
「はっ、知った風な口を叩くなよ店員風情が。」
「それは失礼。だがキミの目には、楽しさや喜びといった感情の色がないように見えるからね、少し心配になったんだ。」

「頼んでもねぇのに人生相談か？テメェの自己満足に俺を巻き込むなよ、価値観の押しつけは鬱陶しいだけだ。」
「これはまた随分と手厳しい、そう言い返されては何も言えないな。」
「なら黙っててくれ、馴れ合いは御免だ。」
「では迷惑ついでに一つだけ。心の傷（トラウマ）とは克服するのが難しい、故に克服した時、キミの中の空洞を埋めるのが一体何なのか、それが判るはずだ。」
「テメェ、俺の何を知ってる？」
「俺は真耶の相談を受けたことがあるとだけ、それ以上のことは想像でしかない。」
「真耶姉さんがここに？」
「あぁ、たった一度だけだが。とても綺麗な娘だったのでね、自然と記憶に残っている。だからキミを見た時は驚いたよ、お姉さんにそっくりだ。」
「驚いた素振りも見せないでよく言う。」
「そういうわけで相談ならいつでも、まぁもし気が向いたらで構わない。」
「そんな機会はねぇよ、いつまでもな。」
「ははは、その方がいい、悩みは己でしか解決できないからね。相談とはすなわち可能性を増やすための手段だ、そもそも自分でその選択肢が見えるなら必要のない寄り道にしかならない。……さて、珈琲のおかわりは如何かな？」
「……あんたは気に入らないが、珈琲は美味いからな、頂くよ。」
「キミにお誉め頂けて恐悦至極に存じます、よろしければこちらの豆もお試しあれ。」
「チッ、馬鹿にされてる気分だ。」

新たに淹れられた珈琲を口に運ぶ。
…クソッ、美味いな。

初対面から勝てる気がしない相手だ、喧嘩じゃもとより殺されるだろうが。
俺はどれだけ強くなれば、もう失わなくて済むんだろうな。
途方も無い旅路。
向いた先は暗闇で、行き先もゴールも判らない。
道が判らないなら、今はただ鍛えるだけだ。
積み重ねていけば、いつかは見えるかもしれないから。
珈琲を飲みながら、俺は楽しそうな二人を眺める。
これっきりにするべきかと、頭の片隅で考えながら。
？

「緋結華ちゃん、また来てくれよな！」
「はいキヨシさん、また来ますよ！」
「ホカゾノさんはあまり怒られないようにしないと流石に死ぬよ？」
「心配には及ばないぞ龍矢、ウチは一番タフな身体で有名な男。かつて耐えに耐えて兄さんにさえ一撃を入れた豪傑よ！そこのキヨっちゃんと違ってな。」
「へいクソゴリラ、も一回雷庭を食らいたいなら前に出な、消し炭にしてやるからよ！」
「あんな静電気でウチは倒れない、槍を折られたの忘れたか？」
「ろくに魔力も使えない木偶の坊がよく言うぜ、テメェの攻撃なんてただの避けゲーだぜ！」
「それくらいで止めとけよたわけ者、兼定で永遠に出れない鳥籠にブチ込んでやろうか？」
『すいませんしたー！』

随分と打ち解けた様子の二人は、別れを惜しむように言葉を交わしている。
俺はそんな光景を離れた所で眺めながら、ふと視線を感じて首を

動かす。
カウンターで俺と同じように眺めていたマスターが、俺を見て微笑んでいた。
全てを見透かされてしまいそうなその瞳から、俺は思わず目を逸らす。
やはり、あの男は苦手だ。
おどけたようで隙を見せない態度もそうだが、何よりも、俺よりも俺のことを知っているような気がする。
関わらない方がいいのか、或いは…。
いや、どうせもう来る予定はないんだ、考えても無駄だな。
話が終わったのか、二人がこちらへと歩いてくる。

「すみませんお待たせしました。」
「別にいい、もう帰るぞ。時間も遅い、厄介な連中に絡まれる前に送るぞ。」
「あ、ボクはそのまま帰るよ、ここからだとすぐだから。」
「判った、じゃあな。」
「うん、またね。緋結華さんもまた。たまには師範に顔を見せてあげてね。」
「明日は行く予定だから、夕方には行けると思う。それじゃあ気をつけてね。」

逢坂は頷いて反対側に歩きだすと、途中で振り返り手を振って走っていった。
俺が無言で歩きだすと、御奈坂は慌てて少し後ろを付いてくる。
賑わう時間を過ぎた商店街の中を、二人で黙って歩く。
何度も後ろで何かを言おうとする気配があったが、実際に話し掛けてはこない。
互いに無言で歩く二人の間には、浮き彫りにされた見えない、しかし分厚い壁。

話し掛けるなという、俺からの無言の圧力。
そのままずっと会話はなかった。
御奈坂の家の前まで着いて、俺は黙って背を向ける。

「真也くん。」
「…何だ？」
「……私のこと、嫌になっちゃいましたか？」
「いや、別に。」
「強引にあそこに連れていったから、嫌われたのかと思って。」
「それくらいで嫌いになったりするほど、俺は短気じゃないつもりだ。」
「それは判ってるんですけど、何だか不安で。あはは、真也くんが私から離れていくような、そんな気がしたんです。」

渇いた笑い声。
背中を向けているから表情は見えないが、不安な顔のままだろう。
まったく、勘がいい奴だな。
結構強引なくせに、こういう時にはしおらしいし。
でも、こいつを騙したりはできない気がする。
きっとなんとなくって感覚で、俺の嘘に気付くんだろう。
なら、嘘を吐いても仕方ないか。

「悪いが、もう俺をこういうことに誘うな。」
「……。」
「お前が嫌いだとか、そんな理由じゃない。やっぱり、俺は誰かに囲まれているのが違和感なんだ。お前がどれだけ俺を気に掛けても、俺は場違いに感じる。」
「…私ではダメなんですか？私は……真也くんの隣にいたいです。莉乃さんみたいになりたい。」
「莉乃姉はただ、真耶姉さんの代わりになろうとしてるだけだろ。」

「そんな風に言っちゃダメです！莉乃さんは本気で！」
「……。」

無言で歩きだす。
もう、余計な寄り道はいらない。
俺は、皆が当たり前に感じる幸福な時間を過ごしてはいけないんだから。
ただ淡々と生を全うすることが、俺自身に課した罰。
幸せな日常なんていらない、必要なのは生きるための活動。
仲間に囲まれて、下らないことで笑い合って、また明日と別れる。
それは死を背負わない者の生き方で、俺には許されざる生き方だ。
だからこの数日間は、一時の間違い。
誰かが食べるはずだった料理が、何かの手違いで俺のもとに運ばれてきたようなものだ。
そう、これは姉さんが生きるはずだった日常。
俺はここではない別の世界で、それをただ眺めている。
この日常は、俺のモノじゃないんだ。
だから、好き勝手に生きてはいけない。

「真也くん！」

呼び止められ、立ち止まる。
でも振り返りはせず、そのまま問い掛ける。

「何だ？」
「また、お話できますよね？」
「……それは、俺が決めていいことじゃない。」

止めていた足を動かして、前に進む。
何故かどうしようもなく、心は乾いていた。

？

Ｈｉｙｕｋａ　ｓｉｄｅ

「どうしたの緋結華、元気ないじゃないの。」
「大丈夫ですよ、私は。」
「でも全然食べてないじゃない？もしかして美味しくなかった？」
「いえ、お母さんのご飯はとっても美味しいです。……ごめんなさい、部屋に戻ります。」

ほとんど手をつけないまま席を立つ。
食事が喉を通らない、食欲もない。
何も手につかなかった。
頭の中で反芻されるのは、別れ際に告げられた真也の言葉。

「もう誘うな。」

それは関わるなと言われるよりも、心に深く残った。
友達として一度は認めてもらえたからですよね。
友人となることを許された、そう思っていたし、彼にとってそれがとても特別な意味を持つことも判る。
でもダメだったのだ。
私は、真也くんの隣には立てなかった。
真也くんの心の壁を越えることも、悲しみを癒すこともできない。
一番になることを止めて、でも二番にすらなれなかった。
莉乃さんは、どうやってあんな風に信頼されるようになったのだろう。
三番ならどうか。
ううん、きっとそんなことじゃないんだ。

今の真也くんは、そういう枠組みや優劣で人を遠ざけてるわけじゃない。
真也くんは優しい、それはここ数日だけでも判った。
言葉の素っ気なさに隠れて気付きづらいけど、相手を思いやる気持ちはとても強い。
自分のせいで大切なお姉さんを亡くして、だからこそ自分と関わらせないようにしている。
冷たい態度も、あの格好も、そのためのものだ。
でも、それはダメです。
人に優しくできる人は強い、それは意外なほど難しい。
意識していても、本当の意味での優しさというのは、日頃からの努力と才能とも言える。
私は優しくなんかない、ただ嫌われたくないだけ。
誰にも嫌われたりしないように、相手が嫌がらないように考えてるだけだ。
でも真也くんは人を思いやるからこそ、より孤独になろうとしている。
そんなのは悲しい。
彼みたいな人こそ、温かで幸せな世界の中で報われるべきだ。
なら、私には何ができるだろう。
薄っぺらな言葉だけじゃ、真也くんは首を縦に振らない。
もっと別の何かが必要だ、彼に私の気持ちを伝えるには。
———優しいだけの言葉じゃなくて、本当の優しさを学ぶために。
？

街灯が照らしだす夜道を歩いていく。
目指すのは並木通り、家に帰るのはもう少し落ち着いてからだ。
きっと家には莉乃姉がいて、俺の帰りを待っている。

暖かい笑顔と、温かい食事を作って、当たり前のように待っている。
多忙極まりない中で、少しでも俺の傍にいようとして。
その優しさは、暗闇の中に立ちすくむ俺の足元を照らす月明かりのようだ。
だからこそ、このまま帰りたくない。
まだ冷静とは言えないままで帰ったら、莉乃姉は必ず気付く。
いずればれるだろうけど、その時までは知らなくていいだろ。
人通りが多くなってきた道を歩いて、忠勝さんの花屋に向かう。
結構遅い時間だが、多分まだ開いているはずだ。
すれ違う人は、みな少しでも距離を空けて脇を抜けていく。
これが一番正しい反応だよな、誰だって己の身が可愛い、厄介者にはなるだけ近寄らないってのが普通の感覚だ。
わざわざ俺に近寄るのは同類の輩か、危機察知能力が著しく欠如したやつくらいだな。

「あ、真也さん。珍しいですね外で会うなんて。」

声をかけられて振り返ると、そこにはちんまりとした和服少女が、なんか風呂敷を抱えて、周りの視線を釘付けにしていた。
…いたよ、後者の方が。
目立つ格好の二人が、往来のど真ん中で見つめ合う。
行き交う人々が訝しげに見ていく。
俺は無視して行くことにした。

「無視は良くないですよ真也さん。」

物凄く自然に隣を歩く恵恋。

「話し掛けんな。」

「何ですか、不機嫌ですか？」
「お前には関係ない。」
「相変わらずの冷徹野郎ですね。」
「黙ってろ。」
「何処に行くんですか？」
「鬱陶しいな、どっか行け。」
「わたしもそっちに用があるんです。」
「なら離れて歩け。」
「わたしが何処を歩こうと勝手でしょう？」
「はぁ、勝手にしろ。」

俺を見上げながらとことこと隣を歩く恵恋。
何だこいつ、こんな夜に出歩くのも珍しいな。
買い物にしては荷物も多いし、こっちまでわざわざ来る必要がない。

「お前、こんな時間まで何してんだ？」
「お前には関係ない。」
「……。」
「似てました？態度とか自信あったんですけど。」
「ウゼェ。」
「ダメですか、物真似って難しいですね。」
「何がしてぇんだよ。」
「いえ、特には。」
「あっそ。」

マイペースな奴だ、おまけに意味も判らない。
つか何処まで着いてくるつもりなんだ。
並木通りに辿り着き、立ち止まって隣を見る。
無表情なまま俺の隣に立つ恵恋は、何故か同じく立ち止まった。

「なぁ、お前の目的地は本当にこっちなのか？」
「えぇ、わたしは歓楽街の方に。」
「は？」
「確かあちらにはホテルがあるはずですから。」
「あるにはあるが、一人で入るようなホテルじゃないぞ？それに、家に帰ればいいだろうが。」
「あのダメ親の元には帰りません。」
「……はぁ、喧嘩でもしたのか？」
「わたしがいなくて困ればいいんですよ。」

あのダメ親父か、こいつが怒る理由なんて多分にありそうだな。
まぁ、俺には関係ない。

「そうかよ、じゃあな。」
「はい、では。」

俺は恵恋を残して花屋に入る。
こんな時間でも不思議そうな顔もせず、忠勝さんはいつものように花をくれた。
店を出て花を取り替える。
既に恵恋は姿を消していたが、ホントに歓楽街に向かったのか。
手を合わせながら、今日の出来事を思い浮かべた。
やっぱり、友達なんて作るべきじゃなかったよな。
気持ちが揺らいでた、もう間違えてはいけない。
俺と話すようになっただけで、すぐに迷惑をかけた。
だがこれで明日からは元通り。
なるだけ他人と関わらない、一人の生活に戻る。
姉さんは怒りそうだけど、放っておいたっていつかはこうなるんだ。

あんな風に、俺のせいで誰かが嫌な気持ちになるのはもう終わりにしたい。
…よし、まだ俺は大丈夫だな。
孤独は俺の隣人、離れることなんて、そもそもできなかったんだから。
立ち上がって、家に向かって歩きだす。
だが、視界の端に妙な光景が映った。
そちらに向くと、恵恋がいる。
まだそこにいたことよりも、一緒にいる連中が気になった。
チャラチャラしたアクセサリーに、派手な髪型と服装。
数は二人。
知り合いとは思えない、明らかに互いは初対面だ。
ナンパ、それも質が悪いタイプの。
恵恋は相変わらず無表情だが、あれは単に状況が判ってないんだろう。
もしかしたら知らない奴にいきなり声をかけられた、くらいにしか思ってないかもしれない。
やれやれ、かったりぃな。
歩く先を方向転換、ゆっくりと三人の方へ移動する。
近くに寄って会話を聞こう、必要なければ手は出さない。
人混みにまぎれて、少しずつ距離を詰めていく。
漸く声が聞こえる距離になった時、とんでもない台詞が聞こえた。

「あれですか？アナタたちはわたしのようなタイプにしか欲情できない憐れな人間だと？」
「は、もういっぺん言ってみろ！」
「ははぁ、感心しました。アナタたちのように下劣で汚い人でも、自分の変態さを再確認するだけの頭はあるんですね。」
「テメェ。」
「その派手な格好も不粋です、カッコいいと思ってるんですか？先

程まで一緒にいた方の方が、数十倍は素敵だと思いますよ。」
「優しくしてりゃ付け上がりやがって、思い知らせてやるよ！」

不穏な空気が辺りに流れだす、こりゃ最悪のパターンだ。
ったく、毒舌にもほどがあるな。
正直言って悪いのは圧倒的に恵恋だが、理由はどうあれ女を殴るのはいただけない。
俺は恵恋の胸ぐらを掴もうとする男に近寄る。

「まぁ待てよ、そいつは俺の連れだ。」
「あん？何だテメェは！」
「あ、真也さん。」
「お前さ、もう少し言葉を選べよ。こいつらがキレんのも仕方ねぇぞ？」
「だって変態ですよ？かけるべき言葉なんてこれくらいしかありませんよ。」
「おいテメェ無視すんな、いきなり出てきて何様だコラ！」
「悪かったよ、こいつにも謝らせるから拳を収めてくれ。」
「ざけんな、そんなんで俺らの気が収まると思ってんのか？」
「はぁ…結局こうなんのかよ。」
「大変ですね。」
「お前が言うか？」
「うだうだ言ってねぇでやるぞコラ！」
「ならこっちに来いよ、人がいない方が何かと便利だろ？」
「判ってんじゃねぇかクソガキ、とっとと行けよ。」

二人に押されて路地裏に入っていく。

「おいお前、とりあえずそこで待ってろ。」
「はい、判りました。」

恵恋を残して奥へと進み、人気の無い少し開けた場所に出る。
そこでおもいっきり背中を押されて、振り返ると既に拳が飛んできていた。
頬を殴られ、痛みが走る。
「調子に乗ったガキには体罰だよなぁ？」
「舐めた真似する奴には躾が必要ってな、はははは。」
「ってぇな、話し合いはしないって感じだな。」
「当たり前だろ、ここでテメェは死ぬんだよ。」
「はぁ、かったりぃな。」
さて、面倒だしとっとと終わりにしよう。
？

「おかえりなさい真也さん、随分早かったですね。」
「うるせぇ、早くここを離れるぞ。」
「何処に行くんです？」
「黙って着いてこい。」

置き去りにするように歩きだす、流石にゆっくり待ってやるほどお人好しじゃない。
一応とことこと着いてくるのを確認して、俺は自宅への道を進んでいく。
もう諦めた、放っておいたらまた厄介ごとに巻き込まれそうだ。
今日はとりあえず泊めて、明日の朝一で追い出そう。
はぁ、莉乃姉に何ていやいいのか。
あたしも泊まるぞとか言いだしそうだ、適当な理由をつけて。
三人もいたら寝るとこないだろうが。

仕方ない、俺は風呂場で寝るか。
幸いかどうか判らないが、何げに広く造られてるからな、一晩くらいは寝れるだろう。
それにしても、今日は散々だった。
日に二度も喧嘩とは、流石に疲れる。
帰ったら飯食ってすぐに寝よう、昼飯食ってないからな。
早足だったからか、家にはかなり早く着いた。
恵恋は黙って着いてきたが、やはり歩幅が小さいから疲れたようだ。
小さなマンションを見上げると、隣の恵恋に話し掛ける。

「一晩だ、それ以上は泊めない。明日の朝には必ず帰れ。」
「ありがとうございます真也さん、やっぱり困った時は真也さんですね。」
「偶然会っただけだろうが。」
「それにしても、頼んでもないのに家へと招くとは……はっ！」
「その続きを口に出したら絶対入れねぇからな。」
「やだな、ちょっとした冗談でしょう？この程度で怒るとは、真也さんは案外狭量ですね。」
「口を閉じてろ、真夜中に彷徨い歩きたくなければな。」
「ま、今回は素直にお世話になります。」

何故こいつはこんなにも上から目線なのか。
下からの視線なのに、上から見下ろされてる気分だ。
階段を上って、扉の前に立つ。
鍵は開いている、つまり莉乃姉は今日も飽きずに不法侵入ってことだ。
家に入ると、リビングの電気が点いている。
テーブルには夕食の準備がされていて、すぐに食べられるようになっていた。

そしてソファーには、夏音を抱き締めて眠る莉乃姉。
待ちくたびれて寝たのか、悪いことしたな。
恵恋は面白いものでも見るように部屋を見回すと、莉乃姉を見てこう言った。

「愛人ですか？」
「追い出すぞテメェ、ただの幼なじみだ。」
「ただの幼なじみが何故真也さんより先に家にいて、夕食の準備まで終えて無防備に寝ているのですか？」
「う……。」

凄い今更だが、何も言い返せない。
確かにこれはおかしいよな、まるで……いやいや。
違う、俺は許してないし頼んでもいない。
すると話し声に気付いたのか、莉乃姉がゆっくりとその目を開いた。
そして俺の姿を認めると、おもむろに抱きついてくる。

「遅いぞ真也！お姉ちゃんは待ちくたびれたぞ！」
「うるせぇ離れろ！そもそも勝手に入っておいて待ちくたびれたもあるか！」
「あたしは真也とご飯を食べるって決めてるんだ！……って、あれ？」

そこで漸く恵恋に視線が向く。
互いに固まった。
莉乃姉はゆっくりと俺から離れると、少しずつ壁ぎわに離れていく。
恵恋はいつものように無表情だが、何となく楽しげな気配を醸し出している。

まるで、宝物を得た子供みたいな気配を。
莉乃姉が俺を見て、恵恋を見て、一応冷静な口調で問う。
「何故冴塚がここに？」
「あ、莉乃姉こいつ知ってんのか？」
「あ、あぁ。冴塚は生徒会の書記をしているんだ。」
「え、お前生徒会だったのか？」
「まぁ一応はそうですね。」

意外だ、社交性皆無なこいつが生徒会の書記だと？
まぁでも書記ならあまり喋らなくてもいいのか、主に会話を文字に残すのが仕事だもんな。

「それで何故冴塚が？」
「あぁそれなんだが……。」

莉乃姉に事情を説明する。
俺とこいつが知り合いな理由、並木通りでの事、泊める旨を。
莉乃姉は黙って聞いていたが、段々とその表情が険しくなっていく。
最終的には下を向いて、プルプルと身体を震わせていた。
あ、こりゃ予想通りの展開だ。

「ダメに決まってるだろ！若い男女が一つ屋根の下で一夜を過ごすなど、風紀委員として見逃せるものか！」
「自分を棚上げしましたね会長。」
「あたしは真也の世話役だ、だから良いんだ！」
「はぁ、こうなると思った。」
「小湊会長ってこういうタイプなんですね、意外でした。」
「冷静に感想言ってねぇで説得しろよ、俺は無理して泊める必要も

ないんだ。」
「そうですね、任せてください。」
恵恋は警戒心むき出しの猫みたいな莉乃姉に向き直ると、恭しく頭を下げた。
「まずは落ち着いてください小湊会長、わたしもアナタと言い争いたくはありません。」
「あたしは認めないぞ、これ以上真也の周りに美少女を増やしてたまるか。」
「ですが今日はわたしが泊まる所がありません、ホテルは真也さんにやんわり止められましたし。なのでできれば真也さんのご厚意に甘えたいと思うのですが、やはりダメでしょうか？」
「しかし未成年が一つ屋根の下でなど。」
「でしたら小湊会長もご一緒に、それでしたら安心できると思いますが？」
「まぁそれならいいんだが、三人も寝れないぞ？」
「わたしはソファーで構いません、会長は真也さんとベッドでどうぞ。」
「……真也、冴塚を泊めよう！」
「俺は風呂場で寝るから一緒には寝ないぞ。」
「何故だ！あたしは一緒に寝たいのに！」
「真也さん、ここはわたしに免じて一緒に寝てあげてください。わたしはソファーでその光景を胸に刻み付けますから。」
「大人しくしてなかったら即座に追い出すからな。それと、今後はもう頼ってくんな。」
「判りました、今宵だけお世話になります。」
俺に向かって頭を下げた恵恋。
ったく、俺もつくづく甘いな。

御奈坂にあんなこと言ったばかりだというのに、不誠実極まりない。
だけどやっぱり、目の前で知り合いが厄介ごとに巻き込まれるのは見過ごせないんだ。
でも、これからはそれすらも切り捨てよう。
俺は独り、助けもなければ助けもしない。
それで漸く、罪の償いを再開できる。

「どうしたんだ真也、何か顔色悪いぞ？」
「いや、何でもない。」
「そうか？何かあったなら言うんだぞ、あたしは真也のためなら何でもしてやるからな。」
「……。」

ダメだよ莉乃姉、それは許されない。
生活面ならまだしも、精神面で他人を頼るわけにはいかないんだ。
苦痛も苦難も、孤独も絶望も、全て自分で乗り越えて強くならなきゃならない。
孤独になるための自己鍛練。
幸福を望めない心で、しかし不様にも生き続ける。
それが今の俺のあるべき姿、果たすべき役割。
贖罪のための孤独を、心の底から受け入れる。
弱音を捨て、感情を捨て、生き続けることだけを遂行する、そのために必要なことをする機械。

———あたしはそんなことのぞんでない！

「っ！？」
「真也？」
「あぁ、気にしないでくれ。」

頭に響いたあの声。
今までよりはっきりと、俺の中に届いた。
傍にいるのか、姉さん？
なら姿を見せてくれ、もっと声を聞かせてくれ。
俺はもう三年も、言いたかった言葉があるんだ。
だが、もう声は聞こえない。
目の前には心配そうな顔をする莉乃姉と恵恋がいる。
クソッ、いよいよ幻聴も酷くなったな、知らない内に妄想癖でもついたか？
まぁそれよりもまず、二人を安心させないと。

「とりあえず腹が減った、昼飯を食えなかったから流石に限界だ。」
「おぉ、任せろ真也！今日は麻婆豆腐にしたんだ、思い切り食べてくれ！冴塚もたくさん食べて大きくなれ。」
「余計なお世話です、わたしはこれから成長期に入るんですよ。でも中華ですか、それはご飯が進みそうですね、楽しみです。」
「うむ！じゃあすぐに温めるから待っててくれ。」
「あ、わたしもお茶くらい準備します。」
「ありがとう冴塚、なら冷蔵庫に烏龍茶があるからそれをテーブルに運んでくれ。グラスはそこの戸棚に。」

二人がキッチンに入ると、俺はソファーで待つことにする。
どうせ家事に関しては役に立てないからな、黙って待つのが一番の手伝いだ。
……少しくらい覚えないとマズイか。
そんなことを考えていると、俺の膝に夏音が飛び乗ってきた。
大きな欠伸をすると、そのまま丸くなる。
ホントに大人しい猫だな、それとも安心してるのか？
餌皿を見ると空になっているから、おそらく一足先に食べたのだ

ろう。
艶やかな毛並みを撫でながら歌を紡ぐ。
「走り出そうこの世界の中を、光輝いた想い出を連れて。」
「それ、真耶がよく歌っていたやつか？」
料理を皿に盛った莉乃姉が、テーブルに置きながら聞いてくる。
「あぁ、名前も判らないし、誰の曲かも知らないが。」
「遠い夏のメロディー。」
「え？」
「その曲の名前。それは真耶が作詞したんだよ、メロディーも自分で付けてな。楽器は判らないからって歌い方だけしか決らなかったみたいだが。」
「そうか、姉さんが。」
優しげな歌だとは思ってたが、なるほどとも思えるな。
姉さんの優しさが詰まった曲ってことか、やっぱりこの歌のイメージは…。
必ず伝えに行くよ、あの場所に。
「さぁ食べてくれ、冴塚も遠慮するなよ。」
「はい、いただきます。」
「いただきます。」
テーブルに並んだ料理を皿に分けると、早速口に運ぶ。
空腹は最高の調味料と言うが、そんなこと抜きにして美味い。
挽肉の旨味と味が染みた豆腐、たくさん食べれるように辛さは抑えてある。
文句なしに絶品だ、店を出してもいいんじゃないだろうか。

「凄く美味しいですね。」
「気に入ってもらえたか？」
「もちろんです。でもこれだけ美味しいと真也さんのお嫁さんになる方は大変ですよ。」
「は？何でそんな話題になるんだよ。」
「だって絶対真也さんの舌は肥えてます、並大抵の料理では満足できないのでは？」
「ちょ、お嫁さんってそんな、うふふ。」

隣で悶えだした莉乃姉を一瞥し、互いに無視を決め込む。

「まぁ莉乃姉の料理は下手なレストランよりは美味いからな。でも俺はコンビニ弁当とかでも…。」
「真也、あたし頑張っちゃうぞ！そしてあたしが作ったご飯しか食べれぬ身体に！」
「……もう結婚したらどうですか？」
「黙れ、そんなことできるか。」
「よし真也、ここに名前と印鑑を！」
「どっから取り出したそんなもん！つか用意してんのかよ！？」
「あとは真也の同意さえあればいつでも！」
「…お腹いっぱいになりそうな光景ですね、ふぅ。」
「お前が余計なこと言うからだろうが！」
「ほらほら真也～、もう思い切って書いちゃおう！捺印万歳！」
「あぁもう鬱陶しい！」

いつもは静かな食卓が、今日は無駄に騒がしいまま終わった。
莉乃姉は食器を洗い始め、俺と恵恋は夏音と戯れる。

「お前、先に風呂入れ。」

「何か凄い台詞が飛び出しましたね。」
「は？」
「いえ、気づいてない辺りが真也さんらしい。」
「さっきから何なんだよお前。」
「ではお言葉に甘えてお先に。…覗いたらダメですよ？」
「アホか、とっとと行け。」
「あら、案外反応薄いですね。」
「あたしの風呂は覗いていいぞ！寧ろ一緒に入ろう！」
「そういう台詞は彼氏ができてから言え！」
「だから言ってるじゃないか。」
「俺は莉乃姉の彼氏じゃねぇ！」
「なら今からでも！」
「断る！」

結局その後も莉乃姉が暴走し、寝る雰囲気になったのも相当遅くなってからだった。
俺のベッドは莉乃姉と恵恋が、俺はソファーに寝る。
でも、今日は中々寝付けそうにない。
俺は二人を起こさないように気をつけながら、静かにベランダに出た。
このどんちゃん騒ぎも明日になれば終わる、そして独りの時間が戻ってくるんだ。
家族はいないのだから、俺が独りなのは当然であって、寧ろこうして家に別の人間がいる方がおかしいこと。
心との決別は済ませた、もう耐えられる。

「真也？」
「ん、あぁ。」

莉乃姉がベランダに出てきた。

起こしてしまったのかな。

「すまん、起こしたか？」
「いや、あたしも寝られなくてな。」
「そうか。」

俺はジャージの上着を脱ぐと、莉乃姉の肩にかけてやる。

「ありがとう真也。」
「いや。」

無言で空を見上げる。
晴れた空には、儚くも煌めく星が、遠く彼方まで続いていた。

「なぁ真也。」
「ん？」
「あたしはさ、ホントにお前のためなら何でもする。だから、独りになろうとするな。」
「……なぁ莉乃姉。」
「ん？」
「俺はさ、本気で感謝してる。どうしようもなく辛いとき、いつも莉乃姉が傍にいてくれたから、俺は今もこうして俺を保ててる。」
「真也が強いからできたことだよ、あたしはその背中を支えただけだ。」
「それでも、俺は莉乃姉がいたから考えたりできたんだ。でもさ、強くなるにはどうしたらいいのか、最近ずっと考えてた。そしたら、やっぱり莉乃姉に甘えてちゃダメだと思ったんだ。」
「真也それは…！」
「ごめん、言いたいことは判る。でも、俺は幸せを感じてはいけないんだよ。」

「それは違う！真耶だって真也には幸せになってほしいと願っているはずだ！」
「例えそうだとしても、俺にはできない。俺の命は助かったけど、同時に俺のものではなくなったんだ。莉乃姉がいるとさ、やっぱどっかで安心してるんだ。だから…。」
「ダメだ止めてくれ！」

莉乃姉が俺に抱きついてくる。
それはまるで縋りつくようで、弱々しかった。
だが、俺は告げなければならない。

「頼む莉乃姉、俺にはもう関わるな。」
「あ……。」
「もうここにも来なくていい、飯も作らなくていい。莉乃姉は学校が終わったら真っ直ぐ家に帰って、おじさんやおばさんと一緒に、三人で夕食を食べるんだ。」
「だったら、真也も一緒に…。」
「言っただろ莉乃姉、俺は独りでいなければいけないんだよ。だから明日の朝、恵恋と一緒にここを出てくれ。」
「そんな……あたしは、真也が……。」

涙を溜めた瞳が、俺の目を見つめている。
下から見上げるその瞳を、俺は少しでも安心させようとして。
何年かぶりに、微笑んでいた。
莉乃姉が驚愕に目を見開く。

「久しぶりに見た真也の笑顔が、こんな時だなんて。」
「あぁ、まったくだな。」
「…本当に、あたしは傍にいちゃいけないのか？」
「俺は莉乃姉しか信じられる人がいない、だからこそそんな人を傍

においてたら、まるで幸せな生活を送っているみたいじゃないか。」
「それの何がいけないんだ！真也は生きてる！こうしてここにいるだろう！だから…幸せになっちゃいけないだなんて、そんなこと言うなよ。」
「幸せの中にいたんじゃ、俺は強くなれないんだよ！」
「強くなるって、一体何のためにだ！」
「俺はもう、誰かが俺の所為で傷ついたり犠牲になるのが嫌なんだよ！だから二度とそんなことにならないように、俺は強くならなくちゃならない。」
「そうやって、あたしたちを守ろうとしているのか？」
「あぁそうだ、でもまだ自信を持って守れるとは言えない。だから心も身体ももっと強くなるために、俺は独りにならないといけないんだ。」
「……この……バカ真也！」

乾いた音が、俺の頬から発せられた。
思いっ切り平手打ちされたのだ。
涙を浮かべたままで、でもとても怒っている莉乃姉。
初めて見た、こんなに怒っている莉乃姉は。
笑ったりいじけたり、拗ねたり驚く姿は何度も見ている。
でも、こんなにも感情剥き出しで、しかも手を上げるなんて初めてだ。
…それだけ、俺が身勝手なことを言っている証拠か。
叩かれた頬が熱い、気分なんて最悪だ。
でも、これは俺が選んだ結果なんだよな。
なら、大人しく受け入れないといけない。
莉乃姉を泣かせたんだ、もう後には引けないよな。
少なくとも、自分から舞台を降りようなんてできるはずがないんだ。

「あたしは…絶対に諦めないからな、覚えておけよ真也！」

俺を思いっきり指差して、莉乃姉はベッドに戻った。

布団を頭まで被り、それから動かない。

俺の家なのに、こんなにも居づらい雰囲気は初めてだな。

俺は着替えると、上着を羽織って外に出る。

仕方ない、これも代償の一つだと考えよう。

俺は少しでも風を凌げる寝床を探すため、独り夜の街へと歩きだした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9132x/

Tears to Rainbow

2011年12月16日00時54分発行